第Ⅴ章　弥生時代集落と出土遺物の分析・検討

第１節　レプリカ法による午王山遺跡の栽培穀物調査

遠 藤　英 子

１　はじめに

関東地方で本格的農耕社会が成立したとされる弥生時代中期後半から後期にかけて、午王山遺跡でどのような穀物栽培が行われていたのかを検討するため、当該期の出土土器を観察してレプリカ法調査を実施した。その結果を報告し若干の分析を行いたい。

午王山遺跡の弥生時代は、中期後半の宮ノ台式期にはじまり、間断期を挟んで岩鼻式２・３期（久ヶ原Ⅰ式混成）、下戸塚式（久ヶ原Ⅱ式混成）との流れが、検出住居と出土土器の様相から予測されている（柿沼本編第Ⅴ章第３節）。先行研究では東京湾岸域の久ヶ原式の系統と、中部高地系櫛描文を特徴とする岩鼻式や、東海地方東部の菊川式系など外来系土器群との接触地帯として注目を集め、集団の移動や交流について検討されてきた（松本 2007、篠原 2009 など）。弥生時代中期後半から後期後半にかけて、武蔵野台地北端、荒川右岸の低地を望む独立丘に立地する午王山遺跡では、異なる土器を携えた人々のどのような共生もしくは交代劇が展開していたのだろうか。本稿では栽培穀物という視点からそれを検討してみたい。

また植物考古学的関心からは、一遺跡という、同一生態環境下で、異なる穀物栽培が行われていたとすれば、それは気候や土壌、水利などの生態環境要因による選択ではなく、それぞれの土器グループの文化系統差に由来する可能性があり、こちらも興味深い検討課題である。

２　荒川中下流域の弥生時代後半の栽培穀物データ

まずは、午王山遺跡周辺の弥生時代中期後半から後期後半の遺跡ですでに報告されている栽培穀物情報について紹介しておきたい。

宮ノ台式土器では東京都北区飛鳥山遺跡でレプリカ法調査が実施され、イネ 11 点とキビ１点が報告されている（守屋 2014）。また和光市西隣の朝霞市向山遺跡ではやはりレプリカ法で宮ノ台式土器からイネ４点を同定している（遠藤 2014）。一方、宮ノ台式とほぼ併行する北島式を主体とする妻沼低地の熊谷市北島遺跡や同前中西遺跡では、北島遺跡でイネ 10 点、アワ 20 点、キビ１点、前中西遺跡でイネ 17 点、アワ 31 点を同定している（遠藤 2014）。

岩鼻式土器では未報告資料ながら著者がレプリカ法で、東松山市岩鼻遺跡でイネ３点、アワ２点、同八幡遺跡でイネ２点、アワ８点、キビ１点、同高坂二番町遺跡でイネ３点、アワ２点、キビ１点を同定している。

久ヶ原式、下戸塚式、弥生町式のレプリカ法調査は少ないが、午王山遺跡と 600m ほどと近く、時期的にも併存もしくはわずかに後続すると考えられる和光市吹上遺跡では、下戸塚

式土器からイネ３点とキビ４点、弥生町式土器からイネ２点を同定している（遠藤 2016）[1]。

一方、岩鼻式３期から変容したとされ（柿沼 2013）、後期中頃に成立した在地の縄文施文を特徴とする吉ヶ谷式土器（下戸塚式？前野町式併行）のレプリカ法調査では、坂戸市下田遺跡でイネ 46 点、アワ 16 点、キビ６点を（柿沼・遠藤 2019）、嵐山町大野田西遺跡でイネ６点とアワ５点を同定している（遠藤 2014）。

また和光市市場峡・市場上遺跡の弥生時代後期後半と考えられる第 41 号住居跡出土土器 137 点からはイネ４点を同定している（遠藤 2014）。

一方、炭化大型植物遺体データとしては、志木市田子山遺跡第 21 号住居跡から 81,481 点の炭化イネと 194,993 点の炭化アワが報告されており（尾形 1998）、直接の炭素年代測定も実施され、炭化イネ 1860 ± 30yrBP、炭化アワ 1930 ± 30yrBP という結果を得ている（高瀬・遠藤 2010）。土器型式で言えば午王山遺跡での下戸塚式新・新期と併行する頃と位置付けられよう。また前述の和光市市場峡・市場上遺跡では、第 41 号住居跡床面出土の台付甕内部とその周辺から炭化イネが推定個数で 10,000 点以上検出されている（和光市遺跡調査会・和光市教育委員会 2013）[2]。この住居跡床面検出の炭化材（コナラ属）の炭素年代測定も実施され、1830 ± 20BP と報告されている。

これらの情報を概観すると、東海地方東部に系譜をもつ宮ノ台式土器主体のグループでは、栽培穀物はイネに集中する傾向が看取され[3]、一方、中部高地や関東北西部と関連の深い北島式、岩鼻式、それに後続する吉ヶ谷式グループではイネと雑穀の割合は、ほぼ相半ばするという傾向が見られる。弥生後期の久ヶ原式、下戸塚式、弥生町式など東海系や東京湾岸系とされる土器群での栽培穀物についてはデータが少なく、いまひとつ傾向が判然としない。一方、炭化植物遺体から見ると、田子山遺跡ではイネと雑穀が複合しているが、市場峡・市場上遺跡ではイネに集中しており、当該期の穀物栽培がイネに集中する傾向にあったのか、イネと雑穀が複合する栽培形態であったのか、その両方が並存していたのか現状では不明である。

３　レプリカ法と種子同定基準

土器に残された圧痕にシリコン樹脂を充填してレプリカを採取し、その型取りしたレプリカを走査型電子顕微鏡（SEM）などで観察、同定を行うレプリカ法は、圧痕を残した様々な原因物質を推定できる有効な研究手法である（丑野・田川 1991）。なかでも圧痕からそれを残した植物を同定できる確実性の高い研究法として、生業研究の分野で近年急速に普及し、日本列島各地の縄文時代から弥生時代の植物データが蓄積されつつある。じつは土器の胎土は 500 倍の顕微鏡観察が可能なほどの転写力を持っており、種子表面組織の細かい形態まで観察が可能なため、種子の同定精度が高まる。また日本の考古学が長年構築してきた精緻な土器編年という時間のモノサシを使って同定資料の時期を推定することも可能である。

具体的手順としては、まず肉眼およびルーペにより土器の内外面や断面を観察し、種子由来と推定される圧痕を検出し、圧痕内の砂などを柔らかいブタ毛歯ブラシなどでクリーニングした上で、①離型剤（パラロイド B-27 を５％溶かしたアセトン）の塗布、②シリコン樹脂（本調査ではトクヤマデンタル社製トクヤマフィットテスターを使用）の充填、③硬化を

待ってレプリカの取り出し、④ 100％アセトンによる離型剤の除去、⑤走査型電子顕微鏡（本調査では明治大学日本古代学研究所所蔵の KEYENCE VE-8800 を使用）による観察、撮影、同定、記録という、おおよそ福岡市埋蔵文化財センター方式（比佐・片多 2005）に基づく手順で実施した。

また種子の同定は、現生種子との形態的比較により行うが、主な栽培穀物の同定基準は以下の通りである。

① イネ *Oryza sativa*：玄米（穎果）が内外穎（いわゆるモミガラ）に包まれた状態が籾である。籾の側面観は紡錘形で，維管束が腹面，両側面，背面に各１本ずつ縦走することから、内外穎で凹凸のある表面形態を呈しており、肉眼では両端に収束する縦筋のように見える。内外穎の表皮細胞には顆粒状突起（直径約 50 μ）（図版 20 写真１）、状態の良い資料では基部に副護穎（図版 20 写真２）や小枝梗などが観察される。玄米の場合はこの顆粒状突起は観察されず、胚が失われた部分が凹みとして観察される（図版 20 写真３）。

② アワ *Setaria italica*（L.）P.Beauv.：レプリカで観察される産状は内外穎の残存した有ふ果の状態が多く、背腹面観は卵状円形～楕円形で、先端は鈍頭であまり突出しない。側面観は、やや狭い卵状楕円形になり、背面（外穎）側が膨らみ、腹面（内穎）側がやや平坦な個体が多いが、両方が膨らむ場合もある。内外穎の表皮細胞にはエノコログサ属特有の乳頭状突起が認められ、特に外穎の乳頭状突起の直径が 15-20 μ m であることや、それぞれの突起が畝状に連なることなく独立している特徴は、アワの野生種エノコログサ（８-15 μ m）との区分の指標の一つとされる（Nasu et al 2007）（図版 20 写真４- ５）。内外穎の境目には乳頭状突起のない平滑な部位が三日月状に観察される。内外穎の剥けた穎果の状態で観察されるレプリカもみられるが、この場合は粒長の２／３ほどの長さでＡ字形をした胚が特徴である（図版 20 写真６）（椿坂 1993）。

③ キビ *Panicum miliaceum* L.：アワと同じく有ふ果の状態で観察されることが多いが、アワと比べて大型で、背腹面観では両端が尖り、側面観は内穎側と外穎側の両方が膨らむ個体が多い（図版 20 写真７- ８）。内外穎の表皮は平滑で、アワのような乳頭状突起はない。果皮がアワより厚いため、外穎が内穎を包み込む部分で明瞭な段差がつく（図版 20 写真９）。穎果の状態で観察されるレプリカもみられ、背面の中央には粒長の１／２ほどの長さの胚が観察される（椿坂 1993）。

４　観察対象資料

2013 年から 2014 年に実施した午王山遺跡のレプリカ法調査についてはすでに和光市デジタルミュージアムで公開しているが（「和光市で農耕が始まった頃」『和光市デジタルミュージアム紀要』第２号 rekitama-wako.jp/museum/2016_wako_kiyo2_023-034.pdf）、今回、総括報告書刊行に際して二次調査を実施し、本稿では一次・二次の調査結果をまとめて報告する。なお一次と二次のデータを統一するため、デジタルミュージアム報告での土器型式や時期比定を一部修正している。

一次調査では破片資料含め 751 点の土器を観察した。残念ながら土器型式別の点数をカウント出来ていない。二次調査では破片資料含め 909 点の土器を観察し、その土器型式別内訳

は、宮ノ台式 27 点、岩鼻式 30 点、久ヶ原式 23 点、下戸塚式 829 点である。総計で 1,660 点の土器を観察した。

５　調査結果

第 28 表に圧痕検出土器の属性とともにレプリカ資料の同定結果を示した。また第 29 表には土器型式別の同定栽培穀物の集計を示した。

以下に一部の資料の土器実測図、圧痕クローズアップ写真、走査型電子顕微鏡で撮影したレプリカ画像を提示しながら、種子同定根拠を説明する。各土器の型式細分については柿沼幹夫の観察所見に基づいている。

GBY-0001 は、岩鼻式２期新段階の土器を主体とする第 74 号住 13 で炉体土器と報告されている山形文を持つ久ヶ原Ⅰ式新（岩鼻式２期新併行）の壺断面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 20 実測図１・写真 10-11)。

GBY-0002 は、岩鼻式土器が初現する時期とされる第 97 号住１から出土し、柿沼が「口縁部が受口状の名残を残すが痕跡に過ぎず、胴部には櫛描縦羽状文・斜格子状文が見られず、頸部櫛描簾状文・波状文にやや乱れがある。折り返し口縁の存在などの諸特徴」から岩鼻式２期（古）の特徴を持つとした甕の胴部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 20 実測図２・写真 12-13)。

GBY-0005 ～ 0015 は、岩鼻式３期段階を主体とする第 105 号住１出土の、櫛描文を持ち岩鼻式３期とした小型甕の胴部内面に３点、外面に８点の圧痕が観察された。採取したレプリカから、イネ籾１点、アワ穎果２点、キビ有ふ果５点を同定した（図版 21 実測図３)。

GBY-0005 は、胴部外面から採取したレプリカで、両端がツンと尖る全形や内外穎境目の段差からキビ有ふ果と同定した（図版 21 写真 14-15)。

GBY-0006、-0009 は、胴部外面から採取したレプリカで、粒長の２／３ほどの長さでＡ字形をした胚が観察されたためアワ穎果と同定した（図版 21 写真 16-19)。

GBY-0012 は、胴部内面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 21 写真 20-21)。

GBY-0015 は、胴部外面から採取したレプリカで、両端がツンと尖る全形や内外穎境目の段差からキビ有ふ果と同定した（図版 21 写真 22-23)。

GBY-0016 は、第 107 号住４出土の、下戸塚式中・古（久ヶ原Ⅱ式（古）併行）とした甕胴部外面の圧痕から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 21 実測図４・写真 24-25)。

GBY-0017 は、第 128 号住１出土の、下戸塚式中・古とした台付甕胴部外面の圧痕から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 21 実測図５/ 図版 22 写真 26-27)。

GBY-0018 ～ 0020 は、第 137 号住３出土の、久ヶ原Ⅰ式新（岩鼻式２式新併行）とした輪積み甕胴部内外断面から採取したレプリカで、いずれも紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版 22 実測図６・写真 28-33)。

GBY-0022 は、第 141 号住 12 出土の、久ヶ原Ⅰ式新（岩鼻式３期並行）とした輪積み甕胴部

第28表　午王山遺跡レプリカ法調査同定資料一覧

資料番号	出土遺構	器種	時期	圧痕検出部位	圧痕検出面	種子同定	種子の形状	図版番号	報告書図版番号
GBY-0001	74号住	壺	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式2期新併行)	胴部	断面	イネ	籾	実1、写10-11	第23集6次(2000)p.38 34図13
GBY-0002	97号住	甕	岩鼻式2期古	胴部	外面	イネ	籾	実2、写12-13	第33集8次(2004)p.81　55図1
GBY-0003	89号住	台付甕	下戸塚式中・新	胴部	外面	キビ	有ふ果		第33集8次(2004)p.61　39図4
GBY-0004	89号住	台付甕	下戸塚式中・新	胴部	外面	アワ	有ふ果		第33集8次(2004)p.61　39図4
GBY-0005	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	キビ	有ふ果	実3、写14-15	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0006	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	アワ	穎果	実3、写16-17	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0007	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	キビ?	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0008	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	アワ?	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0009	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	アワ	穎果	実3、写18-19	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0010	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	キビ	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0011	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	内面	キビ?	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0012	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	内面	イネ	籾	実3、写20-21	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0013	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	キビ	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0014	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	内面	キビ	有ふ果		第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0015	105号住	小型甕	岩鼻式3期	胴部	外面	キビ	有ふ果	実3、写22-23	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0016	107号住	甕	下戸塚式中・古 (久ヶ原Ⅱ式古併行)	胴部	外面	イネ	籾	実4、写24-25	第33集8次(2004)p.97　71図1
GBY-0017	128号住	台付甕	下戸塚式中・古	胴部	外面	イネ	籾	実5、写26-27	第35集9次(2005)p.57　45図4
GBY-0018	137号住	輪積み甕	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式2期新併行)	胴部	外面	イネ	籾	実6、写28-29	第40集12次(2009)p.39 27図3
GBY-0019	137号住	輪積み甕	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式2期新併行)	胴部	内面	イネ	籾	実6、写30-31	第40集12次(2009)p.39 27図3
GBY-0020	137号住	輪積み甕	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式2期新併行)	胴部	断面	イネ	籾	実6、写32-33	第40集12次(2009)p.39 27図3
GBY-0021	141号住	輪積み甕	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式3期併行)	胴部	外面	イネ	籾		第42集14次(2010)p.34 25図12
GBY-0022	141号住	輪積み甕	久ヶ原Ⅰ式新 (岩鼻式3期併行)	胴部	外面	イネ	籾	実7、写34-35	第42集14次(2010)p.34 25図12
GBY-0023	50号住	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ	籾	実8、写36-37	第13集4次(1994)p.36 21図6
GBY-0024	51号住	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ	籾		第13集4次(1996)p.42 23図5
GBY-0025	A溝(4次2溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	アワ	有ふ果	実9、写38-39	第13集4次(1996)p.62 37図68
GBY-0026	52号住	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ?	籾		第13集4次(1996)p.47 25図6
GBY-0027	30号住	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ	籾	実10、写40-41	第18集5次(1996)p.38 23図10

資料番号	出土遺構	器種	時期	圧痕検出部位	圧痕検出面	種子同定	種子の形状	図版番号	報告書図版番号
GBY-0028	9号溝	壺	下戸塚式中	底部	内面	イネ	籾		第42集14次(2010) p.70 45図20
GBY-0029	104号住	台付甕	下戸塚式新・新	胴部	外面	イネ	籾	実11、写42-43	第33集8次(2004) p.97 70図4
GBY-0030	101号住	甕	宮ノ台式？	底部外面	底部外面	イネ	籾	実12、写44-45	第33集8次(2004) p.89 63図10
GBY19-0031	第2次調査区一括	壺	久ヶ原Ⅰ式	頸部	断面	イネ	籾	実13、写46-47	第66集(2019) p52　48図1
GBY19-0032	132号住	壺	下戸塚式中・新	底部内面	底部内面	イネ	籾		第40集12次(2009)p.27 17図5
GBY19-0033	132号住	壺	下戸塚式中・新	底部内面	底部内面	イネ？	玄米？		第40集12次(2009)p.27 17図5
GBY19-0034	131号住	壺	下戸塚式中	底部外面	底部外面	イネ	玄米		第40集12次(2009)p.24 15図3
GBY19-0035	A溝(11次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ？	玄米？		第39集11次(2008) p.23 14図28
GBY19-0036	A溝(11次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	イネ	玄米		第39集11次(2008) p.23 14図28
GBY19-0037	A溝(11次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	キビ?	有ふ果		第39集11次(2008) p.23 14図28
GBY19-0038	A溝(11次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	不明種子			第39集11次(2008) p.23 14図28
GBY19-0039	A溝(11次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	不明種子			第39集11次(2008) p.23 14図28
GBY19-0040	114号住	小型壺	下戸塚式新・新	胴部	外面	イネ	籾	実14、写48-49	第35集9次(2005) p.73 60図3
GBY19-0041	114号住	小型壺	下戸塚式新・新	胴部	内面	イネ	玄米		第35集9次(2005) p.73 60図3
GBY19-0042	109号住	高坏	下戸塚式新・新	胴部	内面	イネ	籾		第35集9次(2005) p.65 51図7
GBY19-0043	109号住	壺	下戸塚式新・新	胴部	内面	イネ	籾		第35集9次(2005) p.65 51図9
GBY19-0044	108号住	甕	岩鼻式2期新	胴部～底部	胴部～底部	不明種子			第35集9次(2005) p.61 48図14
GBY19-0045	A溝(10次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	不明種子			第57集10次(2014) p.21 15図6
GBY19-0046	A溝(10次1溝)	壺	下戸塚式中・新	底部外面	底部外面	不明種子			第57集10次(2014) p.21 15図6
GBY19-0047	A溝(10次1溝)	壺	下戸塚式中・新	胴部	外面	イネ?	玄米？		第57集10次(2014) p.21 15図4
GBY19-0048	A溝(10次1溝)	壺	下戸塚式中・新	胴部	外面	イネ	籾	実15、写50-51	第57集10次(2014) p.21 15図4
GBY19-0049	A溝(7次2溝)	壺	下戸塚式中・古	底部外面	底部外面	不明種子			第31集7次(2004) p.66 48図14
GBY19-0050	121号住	壺	下戸塚式中・古	底部外面	底部外面	イネ	玄米		第35集9次(2005) p.27 20図10
GBY19-0051	68号住	壺	下戸塚式中・古	底部外面	底部外面	イネ	籾		第23集6次(2000) p.26 21図6
GBY19-0052	43号住	高坏	下戸塚式中	坏部	外面	イネ	玄米		午王山調査報2次(1993)p.101 67図23
GBY19-0053	A溝(2次1溝)	高坏	下戸塚式中・新	坏部	内面	イネ	玄米	実16、写52-53	午王山調査報2次(1993)p.105 69図9
GBY19-0054	84号住	台付甕	下戸塚式中・古	胴部	内面	イネ	籾	実17、写54-55	第23集6次(2000)p.56 56図12
GBY19-0055	84号住	壺	下戸塚式中・古	底部外面	底部外面	不明種子			第23集6次(2000) p.56 56図7

第29表　午王山遺跡レプリカ調査土器型式別同定穀物集計

	イネ	イネ？	アワ	アワ？	キビ	キビ？	不明種子
宮ノ台式？	1						
岩鼻式2期	1						1
岩鼻式3期	1		2	1	5	2	
久ヶ原Ⅰ式	7						
下戸塚式中	15	4	2		1	1	6
下戸塚式新	5						

外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版22 実測図７・写真34-35）。

GBY-0023は、第50号住６出土の、下戸塚式中・新とした壺の底部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版22 実測図８・写真36-37）。

GBY-0025は、Ａ溝（第４次２号溝）出土の、下戸塚式中・新とした壺の底部外面から採取したレプリカで、内外頴表面の乳頭状突起からアワ有ふ果と同定した（図版23 実測図９・写真38-39）。

GBY-0027は、第30号住出土の、下戸塚式中･新とした壺の底部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版23 実測図10・写真40-41）。

GBY-0029は、第104号住出土の、下戸塚式新・新とした台付甕胴部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版23 実測図11・写真42-43）。

GBY-0030は、第101号住出土の、宮ノ台式の可能性がある甕底部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版23 実測図12・写真44-45）。ただし無文の底部資料のため確実に宮ノ台式とは比定できない。

GBY19-0031は、第２次調査区一括の久ヶ原Ⅰ式とした壺頸部断面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版23 実測図13・写真46-47）。

GBY19-0040は、第114号住出土の、下戸塚式新・新とした小型壺胴部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版24 実測図14・写真48-49）。

GBY19-0048は、Ａ溝（第10次１号溝）出土の、下戸塚式中・新とした壺胴部外面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版24 実測図15・写真50-51）。

GBY-0053は、Ａ溝（第２次１号溝）出土の、下戸塚式中・新とした高坏坏部内面から採取したレプリカで、紡錘形の全形を持ち両端に向かう縦筋状の段差は観察されるものの、表面には顆粒状突起が観察されないため、イネ玄米と同定した（図版24 実測図16・写真52-53）。

GBY19-0054は、第84号住出土の、下戸塚式中・古とした台付甕胴部内面から採取したレプリカで、紡錘形の全形や表面の顆粒状突起からイネ籾と同定した（図版24 実測図17・写真54-55）。

６　分析

本調査の具体的な研究目標は、関東地方で本格的農耕社会が成立したとされる弥生時代中期後半から後期後半にかけて、午王山遺跡では (1) 穀物栽培がすでに開始されていたのか？(2) 系統が異なる土器型式グループでは、穀物栽培形態にも違いはあるのか？ (3) 栽培穀物に通時的変化はみられるか？などの問いにある。残念ながら今回の調査データからそれらすべての問いにしっかりと答えることは難しいが、周辺地域の既存データとも比較しながら分析を試みたい。

宮ノ台式土器からの同定穀物　確実に宮ノ台式と比定できる土器から栽培穀物は同定できなかった。前述した通り GBY-0030 はイネであることは確実な資料だが、圧痕検出土器は底部のみの遺存のため確実に宮ノ台式土器と比定できない。したがって午王山遺跡での弥生時代初現期の宮ノ台式期に、穀物栽培が開始されていたのかどうか今回のレプリカ法調査からは明らかにすることはできなかった。ただ午王山遺跡での宮ノ台式の確実な住居跡は３軒に過ぎず、出土する宮ノ台式土器も少ない。したがって、本調査での穀物の不在は観察土器点数不足に原因がある可能性が高い[(4)]。一方で、同じく荒川下流域の朝霞市向山遺跡や北区飛鳥山遺跡での宮ノ台式土器を対象としたレプリカ法調査結果から類推すれば、その生業に占める割合は少ないとしても、すでに穀物栽培が開始されていた可能性は高いと考える。

岩鼻式土器からの同定穀物　午王山遺跡での岩鼻式は２期古段階から３期までの時間幅を持つとされているが（柿沼 2009、2013)、岩鼻式２期古段階のイネ籾を１点と、岩鼻式３期のイネ籾１点、アワ頴果２点、キビ有ふ果５点を同定した。この結果からは雑穀が主でイネが伴うような栽培形態と予測される。ただイネ１点以外はすべて一個体の小型甕に観察された圧痕からの同定であるため、注意が必要であろう。一個体の土器から大量の種子が同定される傾向は縄文時代晩期末の浮線文土器や弥生時代前半の再葬墓出土土器などに数多く見受けられる特徴で（遠藤 2012、遠藤 2017 など)、これを種子の偶然の混入とするか意図的な混ぜ込みとするか判断が難しい。しかし、いずれにしても一個体の土器からイネ、アワ、キビがセットで同定されたことは、岩鼻式土器期にイネと雑穀が複合的に栽培されていたことの一つの根拠となり得るのではないだろうか。前述した東松山市内３遺跡での岩鼻式土器のレプリカ法調査でも、いずれの遺跡でもイネと雑穀をセットで同定している。

久ヶ原式土器からの同定穀物　岩鼻式２期および３期と併行するとされる（柿沼 2009）久ヶ原式土器では､久ヶ原Ⅰ式新段階（岩鼻式２期新併行）の山形文をもつ壺からイネ１点、久ヶ原Ⅰ式新段階の輪積み甕２点（岩鼻式２期新併行と３期併行）からイネ５点、久ヶ原Ⅰ式の壺頸部断面からイネ１点の計７点のイネを同定している。観察資料数が少ないため雑穀の有無は判断できないが、今回の結果のみから推定すれば、岩鼻式土器と久ヶ原式土器が併存した頃、午王山遺跡では、岩鼻式土器グループによるイネと雑穀が複合する穀物栽培と、久ヶ原式グループによるイネへの集中度が高い穀物栽培、二つの穀物栽培が併存していた可能性がある。

下戸塚式土器からの同定穀物　下戸塚式土器からはイネ 20 点、アワ２点、キビ１点を同定した。多くが下戸塚式中段階とした土器からの同定で、新・新段階資料からはイネ５点である。イネに集中し僅かに雑穀が伴う傾向が看取され､午王山遺跡での穀物栽培はこの段階、

稲作主体に転換した可能性がある。

7　考察

土器型式と栽培穀物　弥生時代後期前半の岩鼻式土器からはイネと雑穀を同定し、一方久ヶ原式土器からはイネのみを同定した。もしも、同一住居内で土器が混ざり合うほど共存していた２つの土器型式で、異なる穀物栽培が行われていたとしたら大変興味深い状況である。イネと雑穀が組み合わさる栽培とイネに集中する栽培、二つの栽培形態が一つの生態環境下で併存していたとするなら、それは栽培穀物の選択が必ずしも単純に生態環境に規定されるものではなく、土器型式などの文化的社会的背景に由来する可能性を示していると言えるのではないだろうか。ただ残念ながら午王山遺跡での岩鼻式、久ヶ原式土器の出土量は少なく(5)、今回二次調査で観察できた資料も、岩鼻式30点、久ヶ原式23点に過ぎない。今後のデータの蓄積を待って、再度検討したい。

なお坂戸市下田遺跡は、岩鼻式から変容したとされる弥生時代後期後半の吉ヶ谷式を主体とする遺跡で、本来丘陵などに立地するとされる吉ヶ谷式の中で、荒川中流域の低地へ立地を移している数少ない遺跡である。一見このような集落立地の変化は水田稲作を志向しての移動とも解釈されるが、しかし前述したとおり、レプリカ法調査結果はイネと雑穀が複合していた。

栽培穀物の通時的変化　午王山遺跡で環濠が築造されたのは弥生時代後期下戸塚式期と想定されているが（柿沼2009)、今回の調査ではちょうどこの時期に、イネと雑穀が複合する栽培形態から、稲作への集中という転機が予測された。ただ前述したように、ほぼ併行し後続する吹上遺跡のレプリカ法調査ではイネへの集中は見られず、一方、炭化穀物からは後続する市場峡・市場上遺跡で一住居内でのイネへの集中が見受けられるが、志木市田子山遺跡住居では大量のイネとアワが検出されている。したがってイネと雑穀が複合する栽培とイネに集中する栽培、二つの栽培形態が弥生時代後期の荒川下流域で併存していたのか、不十分なデータや調査法によるバイアスなのか、こちらも現状での判断は難しい。ただ荒川中流域の吉ヶ谷式土器のレプリカ法調査結果からみても、この地域では弥生時代後期に入っても栽培穀物は必ずしもイネに集中していたわけではなさそうで、その多様性の要因も今後の検討課題である。

8　おわりに

弥生農耕の関東地方への波及については、土器の様相やレプリカ法調査結果からみて多様なルートが想定されるが、弥生時代中期の中部高地では、おそらく北陸地方の小松式土器からの影響を受けた栗林式土器圏でイネと雑穀が複合した穀物栽培が広範囲に展開しており（馬場・遠藤2017)、その複合的穀物栽培は栗林式土器とともに中期後半には熊谷市北島遺跡や前中西遺跡に到着している（遠藤2018a)。そして、後期吉ヶ谷式主体の坂戸市下田遺跡でも踏襲されている（柿沼・遠藤2019)。一方、太平洋沿岸を東に辿るルートでは、よりイネにシフトした穀物栽培が導入されていたようで（篠原ほか2012、遠藤・高瀬2012)、中期後半の南関東を中心とした宮ノ台式土器圏では、大塚遺跡で看取されたように（佐々木

2017）イネへの集中が報告されている。

このような、ルーツを同じくしながらも系譜の異なる穀物栽培拡散の２本のベクトルが関東地方で再び交差した場所こそが、午王山遺跡だったのではないかというのが筆者の予測である。

午王山遺跡出土土器のレプリカ法調査ならびに本稿の執筆に当たっては、鈴木一郎氏、中岡貴裕氏はじめ和光市教育委員会の皆様に大変お世話になった。午王山遺跡出土土器の時期比定に当たっては、柿沼幹夫氏に貴重なご教示を賜った。また東松山市の未発表資料のデータ使用については、東松山市教育委員会のご配慮があった。採取レプリカの顕微鏡観察に際しては、明治大学日本古代学研究所所蔵の走査型電子顕微鏡（KEYENCE VE-8800）を使用させていただいた。お世話になった皆様がたにこの場を借りてお礼申し上げます。

【註】

１）本稿では『和光市デジタルミュージアム紀要』第２号での土器時期比定を一部改めて細分して分析している。

２）市場峡・市場上遺跡では、レプリカ法でイネが４点のみ同定されたのに対して、炭化イネが 10,000 点以上検出されている。同様の傾向は志木市田子山遺跡でも看取され、81,481 点の炭化イネと 194,993 点の炭化アワに対して、レプリカ法からはイネ２点とアワ１点しか同定できていない。土器に圧痕が残る確率は非常に低いと思われるため、レプリカ法の同定数が全体量を反映しているとは解釈できない。一方でやはり限定的な炭化穀物の検出もごく一般的な数なのか特殊な例なのか不明であり、どちらが実際に存在した穀物の実態に近いのか判断が難しい。ただ当該期のレプリカ法調査を実施すると数は少ないながら栽培穀物がほぼいずれの遺跡資料からも同定されるが、炭化種子の検出はフローテーション法が十分に普及していないこともあり、限定的である。現状では定量的な議論はなかなか困難であるが、さまざまな手法からデータを蓄積し、そのデータをすり合わせて分析していくことが必要と考える。

３）宮ノ台式土器を主体とする横浜市大塚遺跡のレプリカ法調査では、「イネとエゴマの圧痕が検出され」、「3000 点以上の土器破片や完形土器の圧痕を調査したが、アワやキビなどの雑穀は１点も検出されていない」（佐々木 2017）との報告がある。一方、逗子市池子遺跡のレプリカ法調査では、宮ノ台式土器からイネ 28 点、アワ２点、キビ５点を同定し、イネが主体となり雑穀が伴う傾向が看取されている（遠藤 2018b）。

４）残念ながら一次調査では土器型式別の観察土器点数をカウントしていないが、二次調査では宮ノ台式 27 点、岩鼻式 30 点、久ヶ原式 23 点、下戸塚式 829 点を観察している。この内訳からも下戸塚式土器が観察土器のほとんどを占めていることは確実で、また午王山遺跡の弥生土器の型式別内訳もそれほど違わないと考える。

５）在地系とされる久ヶ原式土器ではあるが、松本　完によれば午王山遺跡で久ヶ原式土器のみを出土する遺構は存在せず、124 軒中７軒の住居から山形文の壺や輪積み甕が出土しているが、そのほとんどが破片資料であると述べている（松本 2007：p. 287）。

【引用文献】

丑野　毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』日本文化財科学学会 24:pp. 13-36

遠藤英子 2012『縄文晩期末の土器棺に残された雑穀』『長野県考古学会誌』140 長野県考古学会 pp. 43-59

遠藤英子 2014「栽培穀物から見た、関東地方の「弥生農耕」」『SEEDS CONTACT』平成25年度基盤研究(A)植物・土器・人骨を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究ニュースレター2 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室 pp. 16-23

遠藤英子 2016「和光市で農耕が始まったころ」『和光市デジタルミュージアム紀要』2

遠藤英子 2017「中里原遺跡出土弥生土器のレプリカ法調査」『松義中部地区遺跡群Ⅳ　中里下原遺跡Ⅱ　中里中原遺跡Ⅱ（縄文時代編）中里宮平遺跡　中里原遺跡　二本杉遺跡』富岡市教育委員会 pp. 319-327

遠藤英子 2018a「土器圧痕から見た熊谷市周辺の弥生農耕（下）」『熊谷市史研究』10:pp. 24-31

遠藤英子 2018b「池子遺跡出土弥生土器の種子圧痕分析」『弥生時代　食の多角的研究 - 池子遺跡を科学する - 』杉山浩平編　六一書房 pp. 89-104

遠藤英子・高瀬克範 2013「レプリカ法による愛知県西志賀遺跡出土土器の研究」『明治大学博物館研究報告』17:pp. 13-25

尾形則敏 1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について - 田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料 - 」『あらかわ』創刊号　あらかわ考古談話会 pp. 35-53

柿沼幹夫 2009「補足・意見 - 和光市午王山遺跡における岩鼻式土器 - 」『南関東の弥生土器2 ～後期土器を考える～』関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷遺跡調査会編　考古学リーダー16　六一書房 pp. 193-202

柿沼幹夫 2013「荒川下流域弥生時代後期土器に関する覚書」『埼玉考古』48 埼玉考古学会 pp. 5-28

柿沼幹夫・遠藤英子 2019「下田遺跡出土土器のレプリカ法調査」『下田遺跡3(3区・5区)』坂戸市教育委員会 pp. 483-496

佐々木由香 2017「Column　土器の「くぼみ」から知る弥生時代の食料事情」『横浜に稲作がやってきた！？』横浜市歴史博物館　平成29年度企画展　図録 pp. 74-75

篠原和大 2009「南関東・東海東部地域の弥生時代後期土器の地域性 - とくに菊川式系土器の東京湾北東岸地域への移動について - 」『南関東の弥生土器2 ～後期土器を考える～』関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷遺跡調査会編　考古学リーダー16　六一書房 pp. 246-254

篠原和大・眞鍋一生・中山誠二 2012「植物資料から見た静岡・清水平野における農耕の定着過程 - レプリカ・セム法による弥生土器の種実圧痕の分析を中心に - 」『静岡県考古学研究』43 pp. 47-68

高瀬克範・遠藤英子 2010「埼玉県志木市田子山遺跡第31地点弥生時代21号住居跡出土炭化種子の分析」『古代学研究所紀要』12 明治大学 pp. 3-13

椿坂恭代 1993「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史学と関連科学』吉崎昌一先生還暦記念論集 pp. 261-281

Nasu,H. Momohara,A. Yasuda,Y. He,J. 2007 “The occurrence and identification of Setaria italica(L)P,Beauv.(foxtail millet)grains from the Chengtoushan site(ca.5800calB.P.)in

central China, with reference to the domestication centre in Asia” Vegetation history and archaeobotany16:pp.481-494

馬場伸一郎・遠藤英子 2017「弥生時代中期の栗林式土器分布圏における栽培穀物」『資源環境と人類』明治大学黒耀石研究センター７:pp.1-22

比佐陽一郎・片多雅樹 2005『土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き』福岡市埋蔵文化財センター

松本　完 2007「武蔵野台地北部の弥生後期土器編年」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会　六一書房 pp.263-290

守屋　亮 2014「東京湾西岸における弥生時代の栽培植物利用 - レプリカ法を用いた調査と研究 - 」東京大学考古学研究室研究紀要 28:pp.81-107

和光市遺跡調査会・和光市教育委員会 2013『市場峡・市場上遺跡（第 18 次・第 19 次調査)』和光市埋蔵文化財調査報告書 51 集

第２節　東日本の環濠集落からみた午王山遺跡

小 倉　淳 一

１　はじめに

午王山遺跡は南関東地方における弥生時代後期の環濠集落の好例としてよく知られる存在である。しかし、遺跡内の小区域を対象とした調査が断続的に進行したこともあり、これまでその全体像については解明が進んできたとはいえなかった。また、環濠下層からの出土資料が比較的少ないなど、環濠の所属時期が必ずしも明確ではなかったことも、本遺跡の評価を難しくしてきた。

今回の総括報告書作成にあたって、これらの問題を解消し午王山遺跡の環濠集落像を再構成することが、今後の弥生時代集落および社会の検討に資することは論を待たない。午王山遺跡を東日本の環濠集落遺跡としてどのように位置づけるかについての議論は、本報告をもって本格的に始まることとなるはずである。

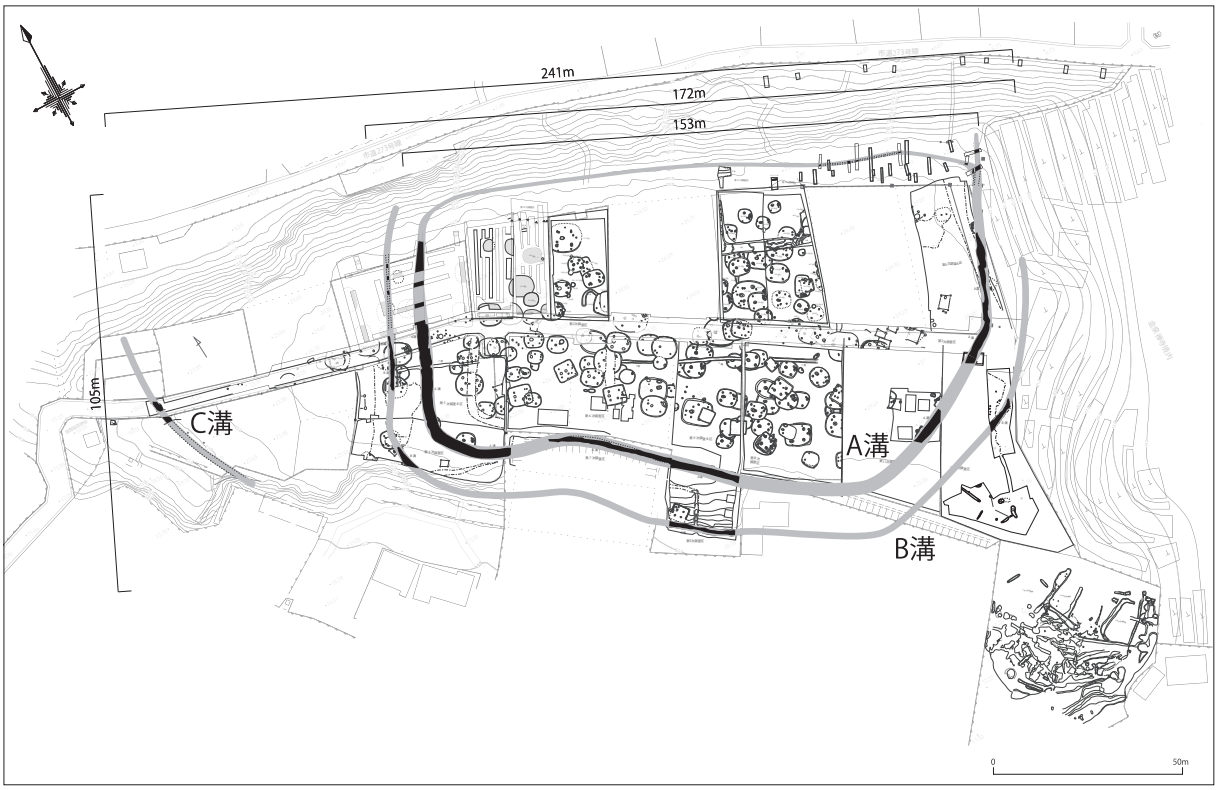
筆者はこれまで関東地方の環濠集落を集成するとともに、それらの大別的な所属時期、環濠の規模、展開過程などについていくつかの検討を行ってきた（小倉 2015･16･17）。中期の環濠とそれ以降の環濠との間に規模の上でかなりの差があり、後期の環濠は掘削土量の点でも小型化が進み、省力化された環濠として設置されていることについて数値を提示しつつ論じてきたところである。

本稿ではこうした視点に基づき、これまで本格的な検討に乏しかった午王山遺跡の環濠のあり方を復元するとともに、その特質に関する現状の理解をまとめておくこととしたい。筆者の力量では東日本全体を扱うことは些か荷が重いこともあり、主に関東地方の環濠集落を中心として諸種の問題について考えてみることをおことわりしておく。

２　午王山環濠の全体像

a. ３条の溝の存在

午王山遺跡はすでに一部が削平され、遺跡南部を中心に旧地形が失われている部分があるが、これまでの 15 次に及ぶ調査の成果を元にすると少なくとも３条の溝の存在を認めてもよさそうである（第 217 図）。総括報告書策定委員会ではこれをＡ溝・Ｂ溝・Ｃ溝と命名した。Ａ溝は午王山頂部の平坦面を中心に設置され、集落内の多くの竪穴住居を取り囲む溝で、環濠と考えているものである。第２次・第３次・第４次・第５次・第７次・第 10 次・第 11 次調査などで検出され、遺跡北側の斜面に沿って設定したトレンチ調査において発見されている溝にも続いているものとみられる。Ａ溝の外側に、一見してＡ溝と並行するように掘削されたようにみえる比較的規模の小さな溝がＢ溝である。第２次・第３次・第４次・第５次・第 10 次調査において検出されており、現地踏査による地形確認を行った結果、この溝は全周せず、遺跡北端の崖で途切れるものと考えられる。Ａ・Ｂ溝間の間隔は第２次・第５次調査区において最も狭く７ｍ程度、第３次調査区および第 10 次調査区においては間隔が広がり 12m 程度となる。これらの溝とは別に、傾斜を強めながら下っていく午王山の西端部を南



第 217 図　午王山遺跡の環濠推定復元案

北方向に走る溝がC溝であり、第２次・第 13 次調査区から検出されている。この溝は南部の崖面において断面が確認されており、等高線に沿いながら弧を描くように設置されたものとみられる。なお、本稿ではC溝を広義の環濠と位置づけるが、本来の意味においては条濠という名称で呼ぶ方が適切であろう。

b. 環濠の時期と重複遺構

午王山遺跡では、A溝においてその中層・上層を中心に土器の出土が顕著であり、B溝では出土遺物は少なく、C溝においてはほとんど遺物が認められなかった。

総括報告書の作成にあたって、本書の中で柿沼幹夫が土器編年の面から時期別の所属遺構を明らかにしており（柿沼 2019，本章第３節）、その成果によると、午王山遺跡は弥生時代中期後半から後期後半までの集落遺跡であり、その主体は後期中葉前後にある。また、環濠は東京湾岸の土器型式に照らして後期前半の久ヶ原Ⅱ式期古段階に掘削されるものとみられる。この時期は柿沼による当地域の土器編年では下戸塚式中・古期に相当し、続く下戸塚式中・新期になると環濠と重複する形で時期を推定できる竪穴住居跡が営まれる。A溝上にみられる第４次 50 号住居跡、51 号住居跡、B溝上には第４次 52 号住居跡が構築されている。なお、出土土器の面からはA溝とB溝との間に時間的な差異が存在するとは言い切れない。また、下戸塚式新期になると第５次B区 62 号住居跡が構築される。これら下戸塚式中・新期から下戸塚式新期にかけては久ヶ原Ⅱ式新段階に相当すると考えられる。

このように出土土器と遺構相互の関係に基づく集落の変遷過程からは、午王山遺跡の環濠が掘削されてから埋没するまでの時期が久ヶ原Ⅱ式期の中に収まること、久ヶ原Ⅱ式新段階において溝の埋没が始まることを想定することが可能である。なお、C溝については時期を特定することができない。

c. 多重環濠の推定

これまでの調査における成果を総合すれば、午王山遺跡の環濠は、地形上の最高所と傾斜の変化を意識しながら配置されているものとみられる（第 217 図）。Ａ溝は標高 25m の午王山最頂部を取り囲むように掘削され、その周囲のやや下った部分にＡ溝を取り巻くようにＢ溝が配される。Ｂ溝とＣ溝との間隔は第２次調査区で約 60m を測り、Ｃ溝はある時期の集落域の西端部を区画するかのようにみえる。Ｃ溝との関係については措くとして、Ａ溝とＢ溝はそれぞれ無関係に掘削されたものがたまたま等高線状に並行する形となったものではなく、溝相互の平面図上での配置関係を見る限り、どちらかの存在を意識しながら掘削されたものと考える方が自然であろう。その場合は、わざわざ居住空間を縮小するように後から内側に断面積の大きなＡ溝を掘ったとは考えにくい。やはり初めに午王山の最高所を意識し、Ａ溝を環濠として掘削した可能性が高いのではないだろうか。問題はその際Ｂ溝を同時に掘削したのか、それとも後になってＡ溝の外側にＢ溝を設置したものなのかということであるが、少なくともある時点ではＡ溝・Ｂ溝ともに機能していたと考えられよう。すなわちこの想定が正しい場合には、午王山遺跡には二重環濠の時期があったことになる。

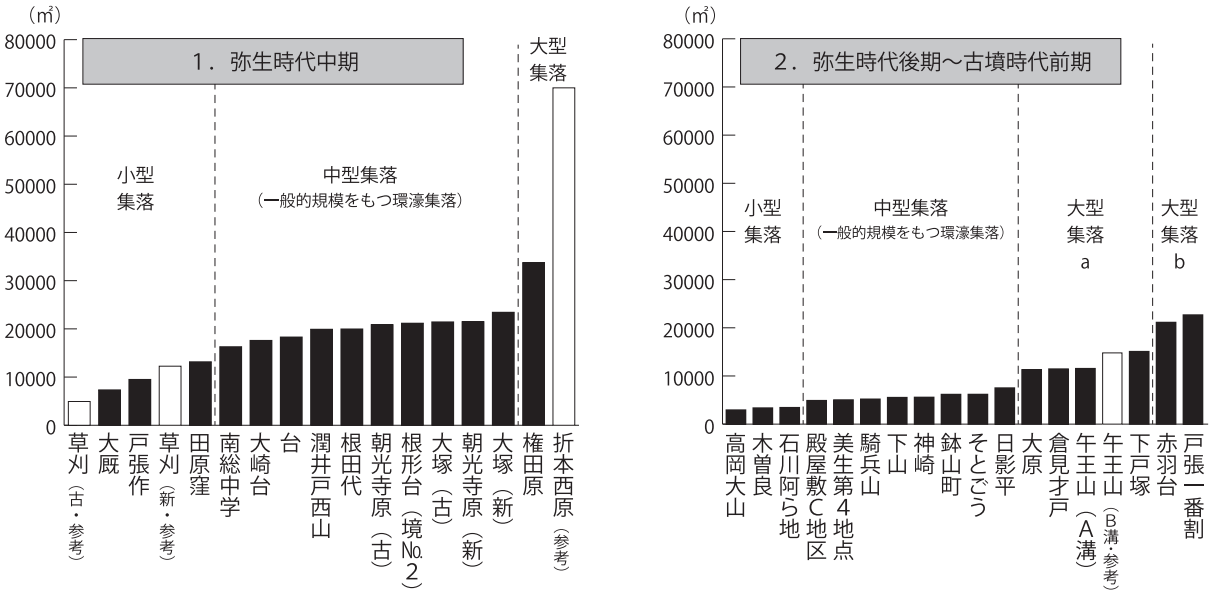
また、前項で触れた通り、久ヶ原Ⅱ式期新段階のうちにＢ溝が埋没した可能性が高いことは、Ａ溝、Ｂ溝が当初から二重環濠として成立していたという想定と矛盾しない。体裁の整った環濠が本来の姿を保っていたといえるのは、久ヶ原Ⅱ式期中のある時点までに限定されるとみておいた方がよさそうである。

d. 環濠集落の規模

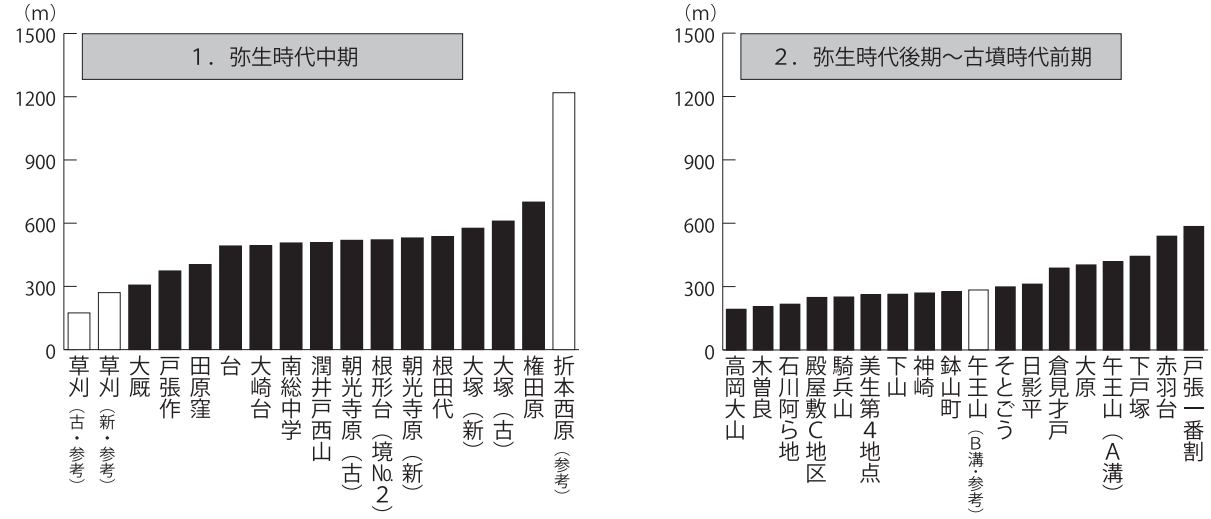
上記の成果から午王山遺跡の溝の全体像を検討してみよう。Ａ溝を環濠とすると、長軸長約 153m、短軸長約 93m となる。Ｂ溝の長軸長は 172m となり、一回り大きな範囲を区画する。Ａ溝の周長は約 419m、溝を含む範囲の面積は 11,589 ㎡と推計される。Ｂ溝は全周しないことが前提ではあるが、Ａ溝の範囲も含めて 14,000 ㎡程度の規模を区画すると考えてよいのではないだろうか。これらの溝は午王山の頂部を囲み、集落の「縄張り」を明確化したものとも考えられよう。それではどの程度の溝であったのか、当時の労働量を復元的に考える視点から、簡易的な方法によって掘削土量を見積もることにしよう。

これには小宮恒雄が横浜市大塚遺跡の環濠掘削土量の推定を行った事例が参考となろう（小宮 1991）。同遺跡においては当時の生活面（旧地表面）が過度に削平されることなく残存していた部分が多いことから、環濠断面がほぼ当時の掘削状況を反映していたと判断できる箇所があり、環濠断面積の平均値から掘削土量を見積もることができた。その体積は古い環濠（Ｂ環濠）で 2,730 ㎥とされ(1)、掘削そのものに従事者１人あたり１日３㎥の仕事量としてのべ 910 人、排土処理と土塁整備のためにその半分の日数がかかると見積もって、30 人がかりで約１か月半の工程が推定されている。

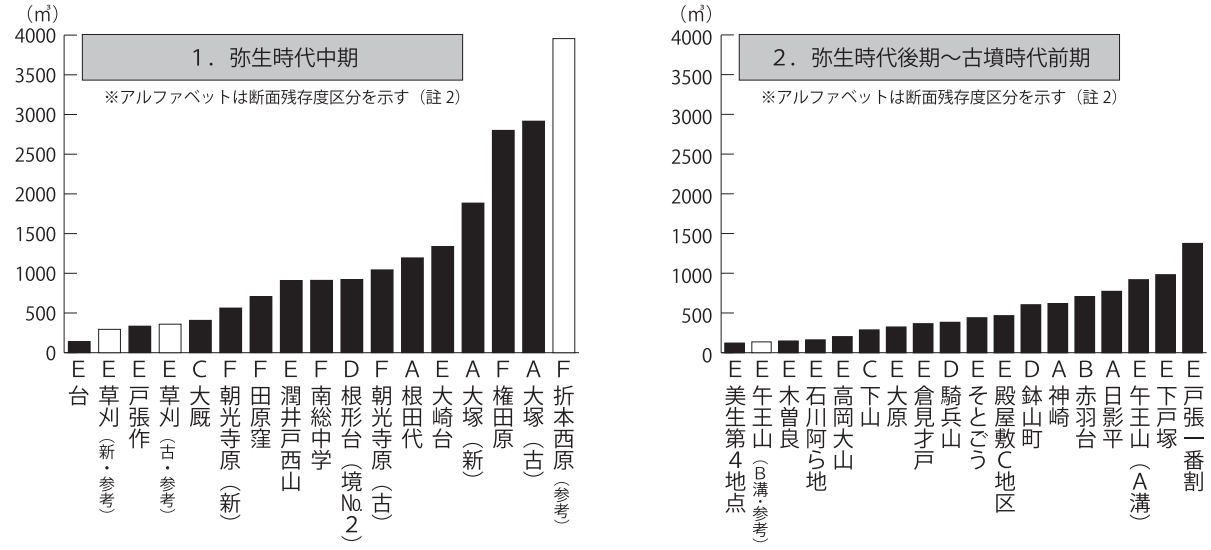
午王山遺跡の場合、第 217 図に示したＡ溝の周長が約 419m と復元可能である。遺跡上面は耕作等により削平が進行しており、弥生時代の生活面の存在は望みにくい(2)。このため、最も残りがよいと推定できる第２次調査区（第２号溝として報告）を利用して簡易的に推定を行った。この溝の最大幅は３m 程度、深さは 1.5 ～ 1.7m 程度である。３か所の断面図が残されており（本書 129 頁第 192 図）、このうち北側（K-K’）と中央（L-L’）の断面が溝



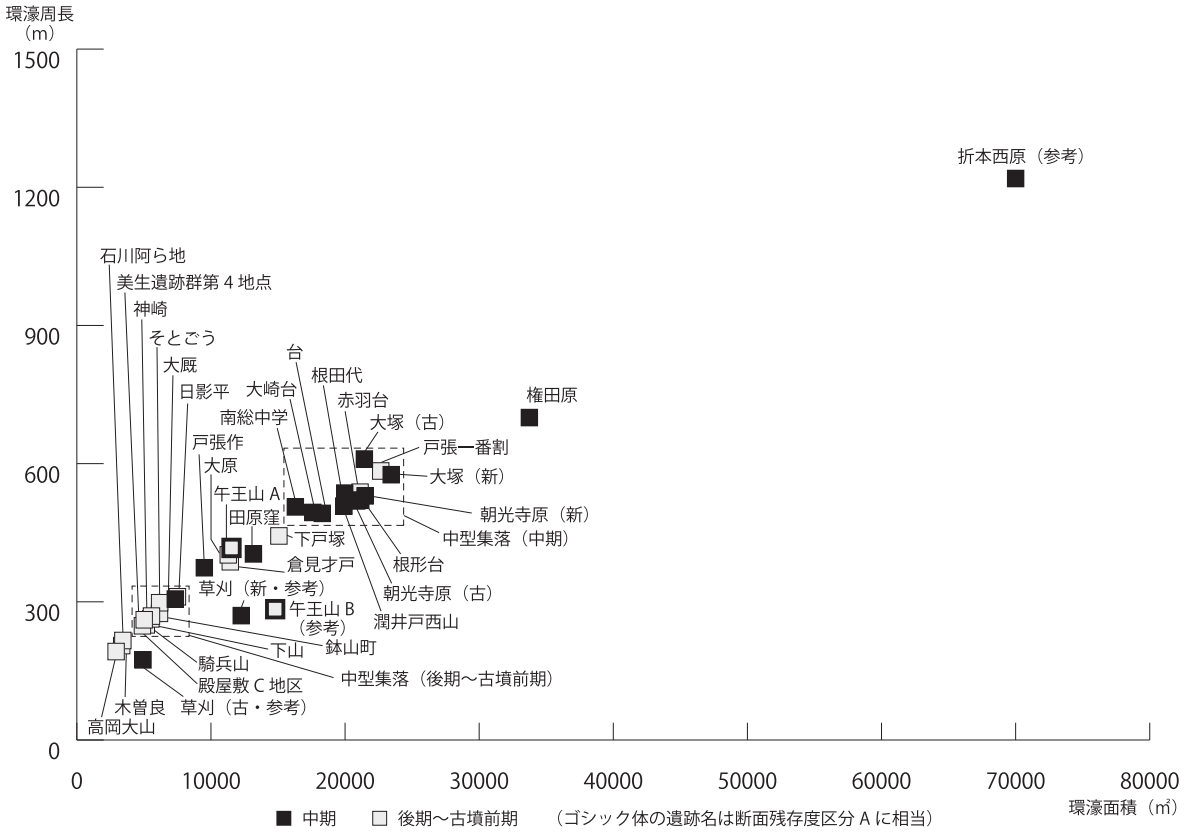
第 218 図　関東地方における環濠の推定面積（小倉 2015 を改変）



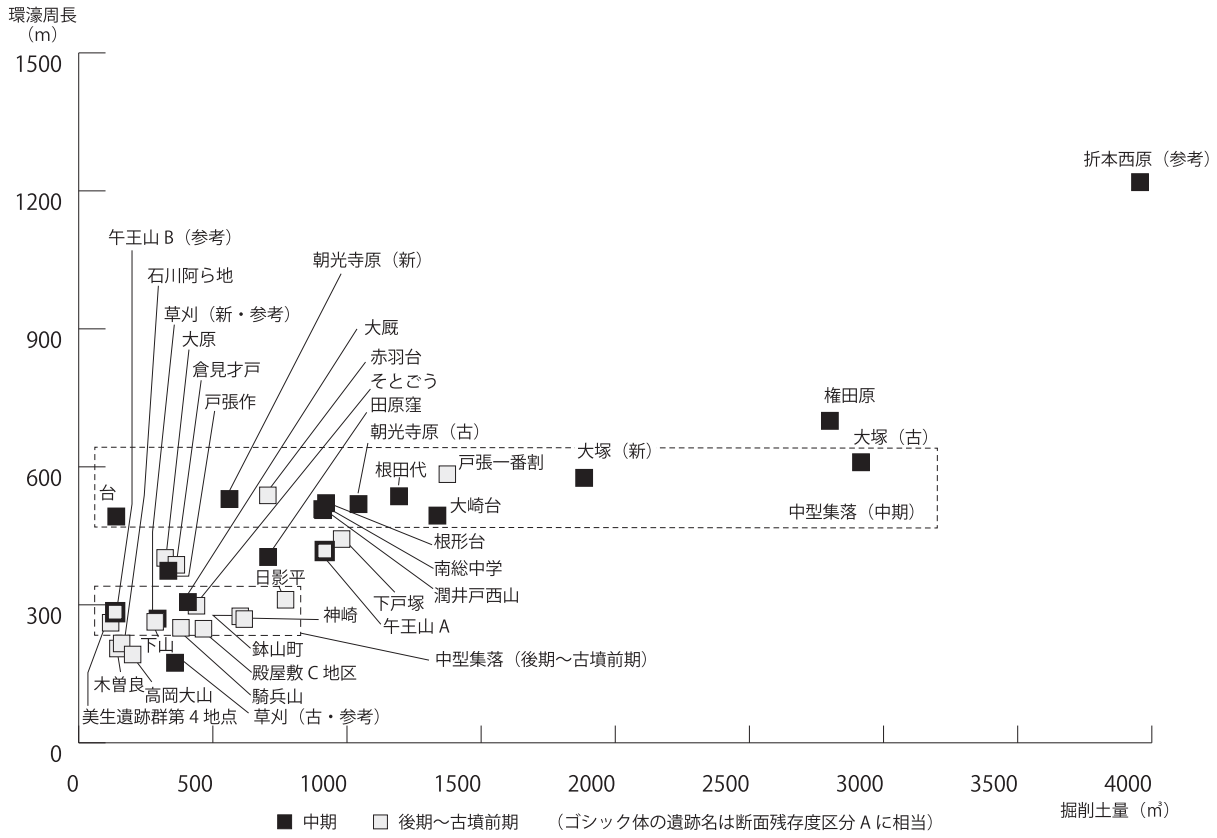
第 219 図　関東地方における環濠の推定周長（小倉 2015 を改変）



第 220 図　関東地方における環濠の推定掘削土量（小倉 2015 を改変）



第 221 図　環濠面積と環濠周長の相関（小倉 2015 を改変）



第 222 図　環濠周長と掘削土量の相関（小倉 2015 を改変）

の長軸にほぼ直交していることから推計に適していると判断した。北側の溝断面の面積は約2.26㎡、中央部の溝断面は2.14㎡と計測したため、この平均値を2.20㎡とし、周長を掛けるとA溝の掘削土量は921.8㎥となる(3)。

B溝は長さの提示が困難ではあるが、図上では284mと想定した。A溝に比べて小型の環濠とみられ、なおかつ上部が削平されている状況であったため、比較的残りのよい第3次調査区を利用して推定した。溝幅は最大で2.3m、深さは最大で1.2m程度である。報告書には4箇所の断面図が残されており(本書129頁第192図)、このうち残りのよいH-H'、I-I'の断面積はそれぞれ0.49㎡、0.47㎡であった。これらの平均値を0.48㎡とし、B溝の長さを掛け、掘削土量を136.3㎥と推計した。B溝の規模はA溝に比べてきわめて小さいこともわかる。

これらの数値はあくまで目安となるものではあるが、2条の溝の掘削土量を合計すると1,050㎥を超えることになる。中期の大塚遺跡が長軸長230mを測り、溝の断面形も逆台形で比較的しっかりと作られた環濠であるのに比べれば規模は小さいが、これらが同時期に掘削された多重環濠であるとすれば、掘削にかかる仕事量はのべ350人となり、10人体制で35日、排土の処理にさらにその半分の仕事量が必要と考えれば、環濠の掘削と整備には10人体制で50日以上(52.5日)かかる計算となる。

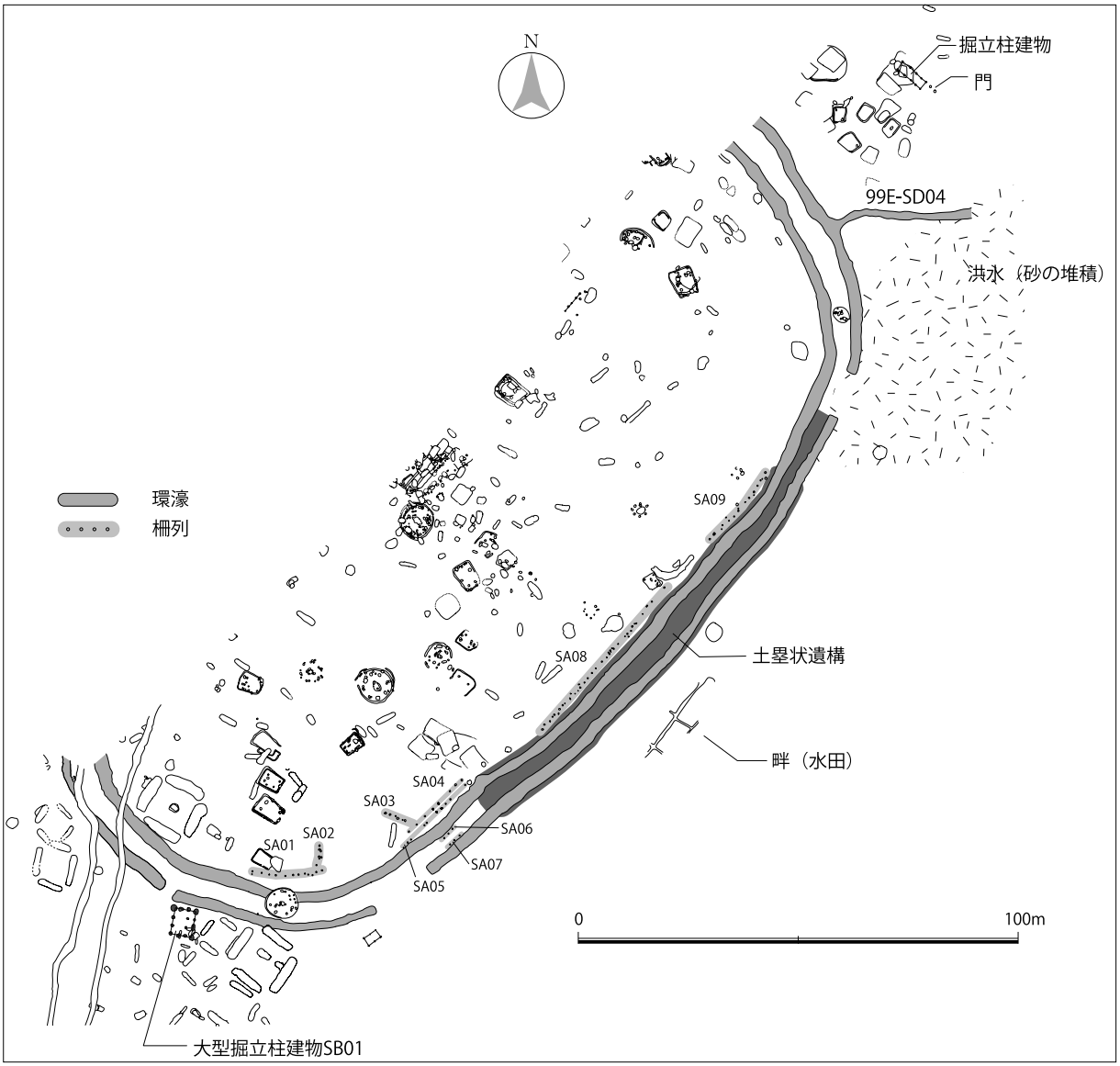
こうした推計をもとに、関東地方全体の環濠集落のなかで午王山遺跡の規模について考えてみることにしよう(第218図～第222図)。環濠面積については、関東地方において面積の推定できる環濠集落全体の中では中程度であるが、中期の環濠の方が比較的大きい傾向にあり、後期から古墳時代前期にかけての環濠集落に限ってみれば比較的大型の部類に入る(第218図)。溝の長さ(周長)については、B溝は全周しないため参考値であるが、A溝はやはり後期の環濠としては比較的長い(第219図)。面積と周長の相関関係をグラフ化したのが第221図であり、午王山遺跡が該期の中型集落からは規模の面において抜け出た存在であることがわかる。

推定される掘削土量についても同様の傾向を認めることができる(第220図)。午王山遺跡のA溝は後期から古墳時代前期にかけての環濠集落の中では比較的掘削土量の多いことが推定され、掘削土量と周長との相関関係(第222図)においても規模の大きなことがわかる。これに対してB溝はA溝に比べて断面積がきわめて小さく、全周しないことを差し引いても該期の中型集落に比して掘削土量が少ないことが推定される。

このように、A溝とB溝の規模の面からの大きな違いは、集落の旧地表面がある程度削平を受けているとしても、両者の間に看過できない差異が存在することを示しているといえるだろう。これは類例が少ないながらも関東地方の多重環濠の特質として指摘できる事実かもしれない。

e. 環濠の付帯施設

環濠の設営に関してたびたび問題となるのは排土の処理と土塁や木柵などの付帯施設のことである。午王山遺跡においては目立った遺構は発見されておらず、今のところこれら施設の存在を積極的に想定・評価することはできそうにない。多重環濠という前提に立てば、一般に外環濠と内環濠の間、あるいは内環濠の内側に土塁が設けられることなどを想定できる



第 223 図　猫島遺跡の環濠集落（赤塚・石黒ほか 2002 を改変）

こともあろう。午王山遺跡の場合、環濠集落１期の竪穴住居跡は内環濠であるＡ溝から内側におおよそ５ｍ以上離れて構築されており、空間的な規制の存在したほかに、排土を簡単に盛る行為がなされたなどの可能性は残されよう。関東地方の環濠においては概して土塁に関する根拠は乏しいが、群馬県日影平遺跡では環濠内側にローム土を盛った痕跡が認められるという（小池 2003)。視野を西に拡げれば、静岡県川合遺跡（静岡県埋蔵文化財研究所 1985･90）において土塁状の盛り土が検出されているほか、愛知県猫島遺跡においては、土塁状遺構と柵列を伴った中期前葉の二重環濠集落が発見されている（赤塚ほか 2002，第 223 図）。調査されたのは集落のおよそ半分であるが、低地に営まれており、大塚遺跡の環濠に類似した規模と考えられる。溝の両側に 20cm ほどの高さの盛り土があるため、溝と溝の間に小さな高まりのある部分が認められる(4)。午王山遺跡が多重環濠をもつと仮定した場合、Ａ溝とＢ溝との間に土塁を想定できるかどうかは問題であるが、猫島遺跡例のように溝の間隔が揃っておらず､その他の根拠にも乏しいため､溝間が土塁の構築を前提にした空間であったという確証は得られない。

そのほかに環濠の関連施設として想定できるのは橋などの入口施設であるが、実際にその根拠とされるのは、溝内に柱穴状のピット等が認められ橋脚の存在が想定できる場合であり、横浜市大塚遺跡（武井編 1991）においてはその可能性があるものの、実際の橋が残っていたわけではない(5)。また、環濠の中にはある程度埋没した部分に硬化面が残されている場合がある。こうしたものを日常利用していた通路として位置づけることも可能であろう(6)。

これらの施設が存在するとしても、かなり注意深く、なおかつその存在を前提に探さなければ見落としかねないことにも注意が必要である。たとえば横浜市三殿台遺跡（和島ほか 1965）においては、集落内に営まれたと考えられる大型方形周溝墓の存在が調査のかなり後になってから推定されているが（安藤 1992）、これは調査時には方形周溝墓という墓がまだ知られておらず、その認識が全く不足していたことが影響している。また、近年になって同遺跡の中央付近に独立棟持柱の建物が存在した可能性が指摘されてもいる（鈴木重 2017）。午王山遺跡においては遺構が密集してはいるものの、環濠が東西方向に長軸線をもち、南東部に墓域をもっていたことがわかっているだけに、集落に伴う各種施設の推定を注意深く進めていく必要があろう。

f. 集落域と墓域

午王山遺跡では第１次調査区と第 10 次調査区から方形周溝墓の検出をみており、環濠外に墓域を営むことも確認できる。方形周溝墓は四隅の切れる形態的に古いタイプのものと全周する可能性のあるものが存在するようであり、両者の間には時間差を想定することも可能である。前者は中期に多く認められるため、宮ノ台式期の集落に伴う可能性も残される。これらが集落に近い場所に造営されていることは、午王山の頂部に形成された該期の集落の規模に照らしても妥当である。ただし集落に比較的近い第４号・第５号方形周溝墓に伴う遺物はなく、土器から時期を確定することはできない。第２号方形周溝墓には中期・後期の土器が、第３号方形周溝墓にも後期の土器がみられることから、第１次調査区の方形周溝墓の中には環濠の時期に伴うものが存在する可能性がある。墓域は本来さらに広がっていたことであろうが、削平を受けて現存していない部分も多い。

３　東日本の環濠集落と午王山遺跡

a. 午王山遺跡の可能性

日本列島の環濠集落は初期の灌漑水稲耕作に伴う文化要素のひとつとして列島に導入され、北部九州地方から中部・関東地方まで広い範囲にわたって営まれたことがわかっている。九州地方では長崎県原の辻遺跡（福田ほか 2005）、福岡県板付遺跡（川道ほか 2016）、同県平塚川添遺跡（松尾ほか 2001・04）、佐賀県吉野ヶ里遺跡（渋谷ほか 2015）などがよく知られ、近畿地方の大阪府池上曽根遺跡（第２阪和国道内遺跡調査会 1970）、奈良県唐古・鍵遺跡（藤田ほか 2009）、滋賀県下之郷遺跡（川畑ほか 2017）、東海地方の愛知県朝日遺跡（石黒ほか 1991）などの大型環濠集落も著名である。ただし東日本の環濠集落には巨大なものは少なく、関東地方においては環濠に囲まれる面積がおよそ 30,000 ㎡までにとどまるものがほとんどである(7)。一方、関東地方では遺跡の発掘例が多く、弥生時代を中心として溝を持つ集落の発見・調査例は 200 以上にのぼっている。その中でも環濠の全体像を推定できるものは現

在のところ 30 例程度に限られ、午王山遺跡もその一例に加えることが可能である。

それらの中でも環濠集落が特に集中的に調査されているのは横浜市域である。鶴見川・早渕川流域では全面的に発掘された大塚遺跡、その墓域である歳勝土遺跡などをはじめとする弥生時代中期後半の環濠集落が数㎞おきに点在する様子が判明しており、列島における弥生社会の内実を検討するための格好の素材を提供している。この地域では土器編年研究の深化に伴って流域の遺跡群を動態的に把握しようとする試みが続いており、弥生集落の構造モデルを提供するとともに、農耕社会の定着・展開過程に関する議論もまた深まりをみせている。

午王山遺跡の環濠は荒川流域の弥生時代後期社会を解明するための鍵となるものであるが、周辺の遺跡群との関係を軸とした分析を進めていくことにより、東日本における弥生社会全体の動向を探るための良好な事例となることが期待されるものである。

b. 東日本の環濠集落の特徴

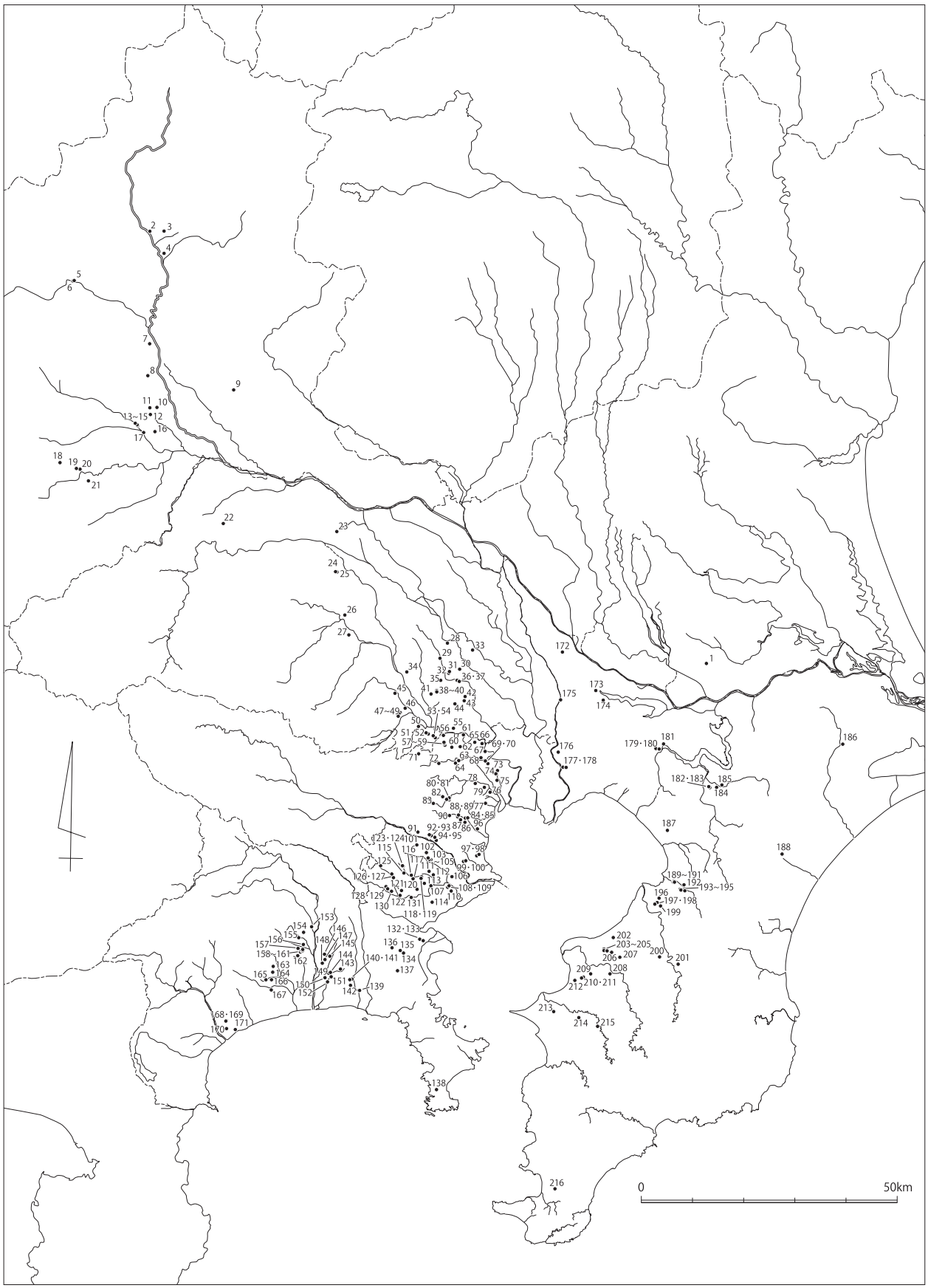
関東地方を中心として、東日本に存在する環濠集落の特徴についてまとめておこう。

環濠をもつ集落の形態は、関東地方においては弥生時代中期後半から一般化する。これは直前の時期から東海地方からの影響を大きく受けためとみられる。関東地方においては弥生時代前期の農耕集落の存在は明確でなく、本格的な農耕集落とされるものは中期中葉からであり、神奈川県中里遺跡（呉地ほか 1997，河合ほか 2015）で集落、墓域、生産域の検出をみている。同時期の遺跡は埼玉県池上・小敷田遺跡（中島 1984，吉田ほか 1991）、千葉県常代遺跡（甲斐ほか 1996）などで発見されているが、中里遺跡の事例が最もよくまとまっている。この時期に伊勢湾岸から駿河湾岸を経て伝播してくる方形周溝墓の形態が東海地方との親密な関係を物語っている。ただしこの時期には環濠の姿は明確ではない。

関東地方の集落に環濠が登場するのは弥生時代中期後半の宮ノ台式期になってからである。宮ノ台式土器は静岡県域の白岩式土器との関係が深い土器で Si Ⅰ期からⅤ期までに区分されており（安藤 1990）、先述した横浜市域における環濠の登場はⅢ期のことである。この時期に東京湾岸を中心とする南関東各地で環濠の形成が始まるものとみられ、千葉県域の養老川流域に属する市原台地、鹿島川が注ぎ込む印旛沼南岸域などでも典型的な環濠集落が形成される。ただし同じ宮ノ台式期といっても、環濠の形成時期には波があり、Ⅲ期の後にはⅤ期に環濠集落の形成が顕著になる（安藤 1991，大村 2005，小倉 2017）。その後は上総地域の一部を除いて多くの集落が一旦廃絶するようで、多数の環濠集落が営まれた鶴見川流域においても、多くの遺跡が姿を消している。

後期になると再び集落が増加するとともに、環濠の造営も再開されるが、中期段階の環濠に比して、後期以降の環濠は面積および掘削土量の面で総じて小型化する。午王山遺跡の環濠が営まれるのは後期中葉頃と考えられ、関東地方においては後期後半から古墳時代初頭にかけてはさらに小型化する集落と比較的大型の集落とに分化して集落自体は多様化するものとみられるが、やがて消滅していく。

これら環濠集落の立地は、関東地方では沖積地との比高差十数ｍから数十ｍの台地上にあるとみられていたが、その後沖積地に立地する集落の事例も認められるようになり、その多様性に対する認識も進んでいる。その解釈については大塚遺跡をはじめとする台地上の集落を畑作集団とする例もある（浜田 2011）が、同遺跡については流域の最初の開発拠点として



第 224 図　関東地方における弥生時代中期・後期の環濠・条濠を有する遺跡の分布
（小倉 2015 を改変）

敢えて台地の高所で沖積地から離れた場所に居住したとする意見（石井 2010）もあり、限られた沖積地の開発を容易に進めるための工夫がなされていることも指摘しうる。

また、関東地方の環濠集落は分布に関しても特徴的である。中部地方以東にみられる環濠集落のうち太平洋側に所在するものは千葉県域までにほぼ限定される。具体的には利根川を境として以東・以北にはほとんど分布しないことがわかっている（第 224 図）。これは方形周溝墓を伴う集落遺跡の分布とも重なり、弥生文化の地域性を示す現象の一端とみられるものである。環濠の分布には、東海地方からの文化的影響を蒙りながらも既存の文化要素を組み替えてそれに対応していった関東地方の集団の範囲が示されているとみるべきであろう。

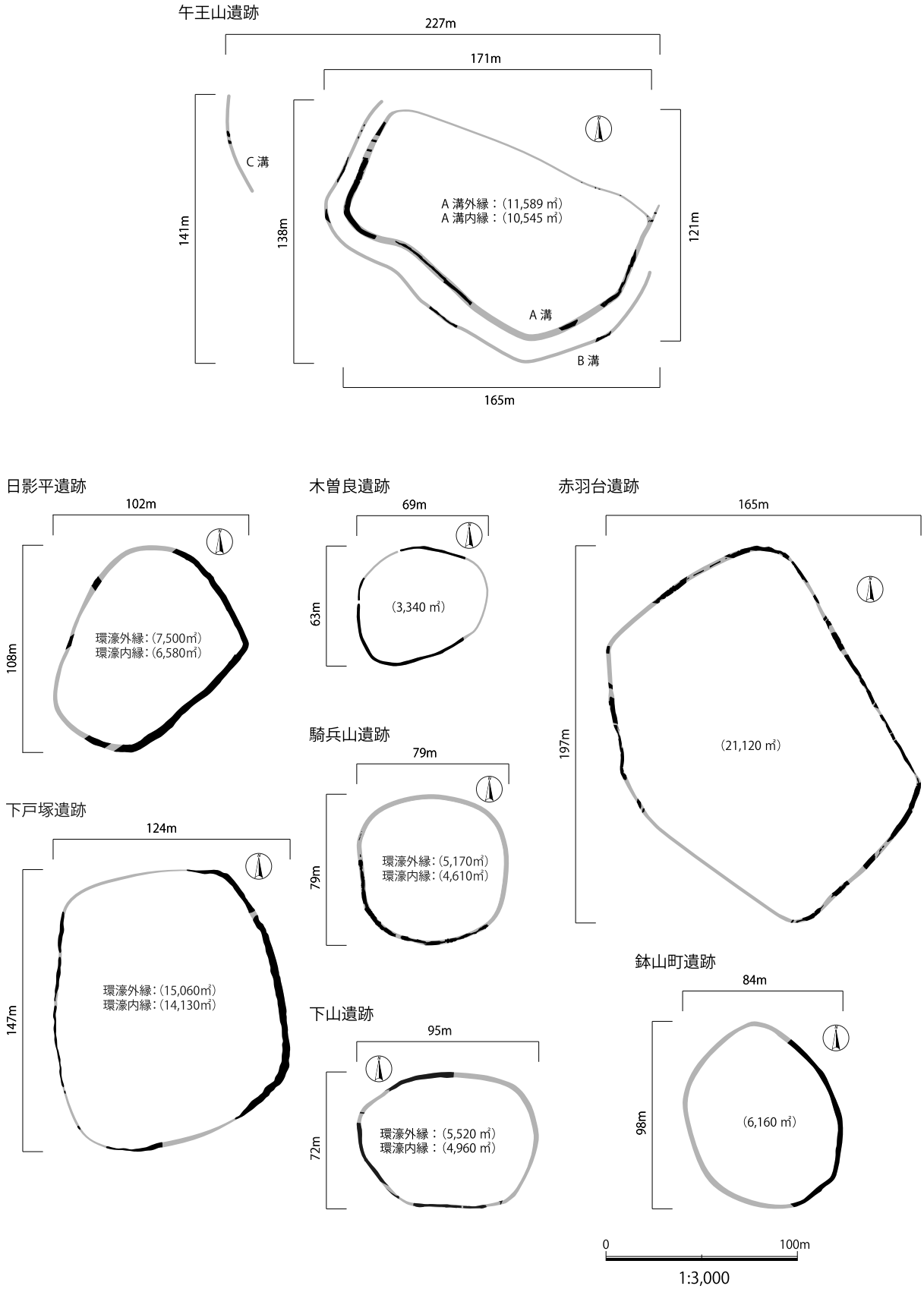
これら環濠集落に関しては、防御施設としての有効性についての議論が多く提示されている。これは先述の横浜市大塚遺跡の環濠の全貌が明らかになり、その姿が守りを固めた集落の姿を彷彿とさせるとしたことが契機のひとつとなり、その後佐賀県吉野ヶ里遺跡において大型の環濠集落が発掘されたことによって増幅された見解であるように感じられる。環濠を防御施設として評価し、社会の緊張状態に対応したものとする見解は根強い（佐原 1979, 都出 1983･89, 武井 1986 等）。しかし大塚遺跡の環濠発見以降も、その規模と内容から防御施設としては不十分であるとの認識に立ち、環濠の構築に集落域を占有して集団の結束を示すための「標」としての理解を加える論（本堂 1976）もみられ、現状では東日本の多くの環濠の防御施設としての実用性については多くの論者が懐疑的な立場を表明している（石黒 1988･90･96, 中間 1990, 篠原 1999, 久世 2001, 小出 2006･07･11 等）。

なお、安藤広道は択一的な議論では環濠の意義と広域的な定着を考えることはできないとして、環濠の機能を対立的に捉えるべきではないとしており（安藤 2003）、実用性に関する論点への過度の傾倒が環濠の意義に関する議論をミスリードしかねないことに注意を促している。

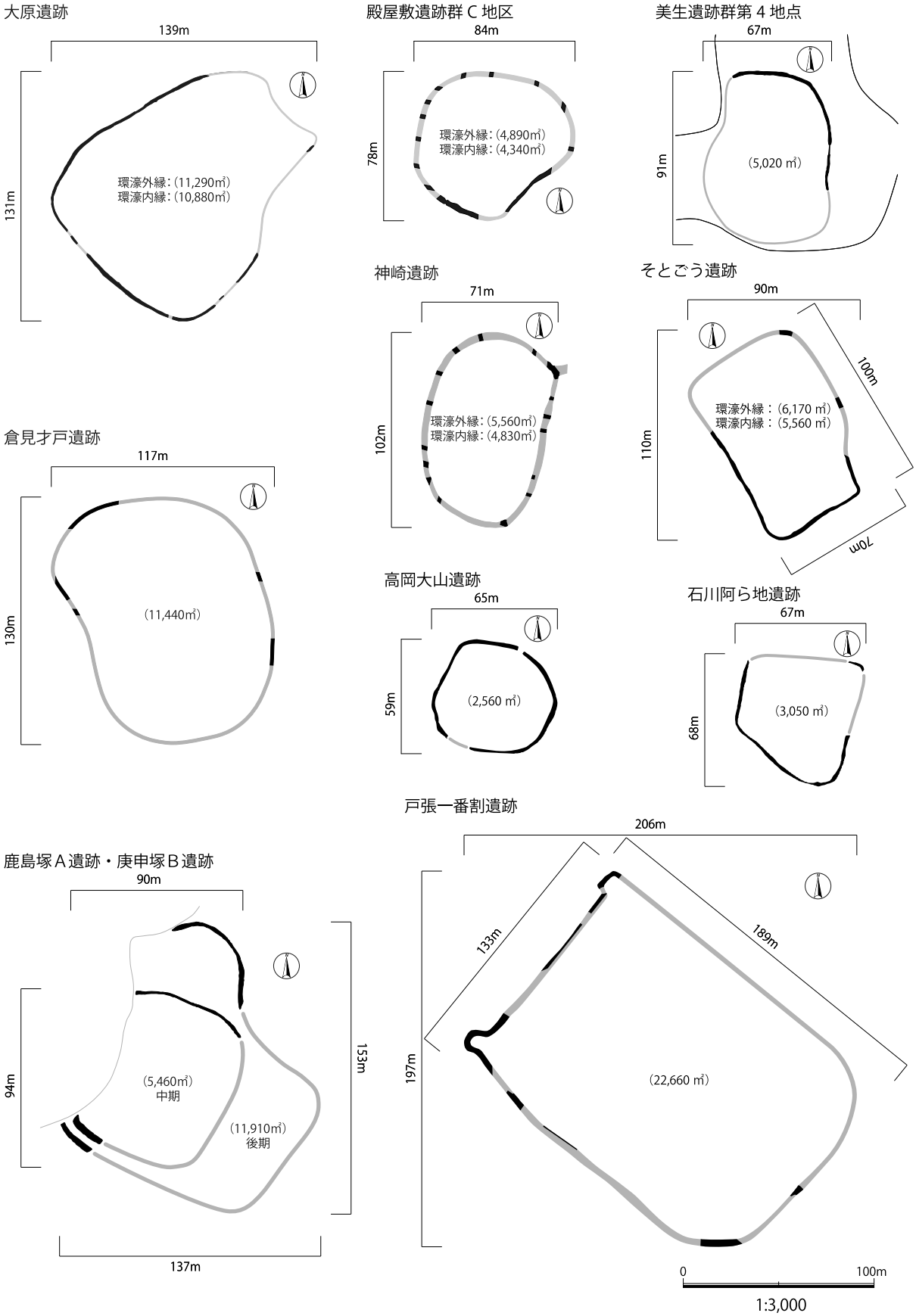
以上のような環濠集落に対する認識をもとに、午王山遺跡をどのように評価できるだろうか。以下では午王山環濠の特質について検討してみることにしよう。

c. 午王山環濠の特質

これまで述べてきたように、午王山遺跡は弥生時代後期前半期に属する多重環濠集落遺跡とみられる。集落面積はＡ溝とした環濠内側でおよそ 10,500 ㎡を測り、外側に掘られたＢ溝で区画する範囲も含めると、およそ 14,000 ㎡となる可能性もある。これは、関東地方の弥生時代の環濠として規模を推定することができる事例の中では比較的小型の部類に属することになる。しかしこれは中期の環濠集落の想定面積の平均が 20,000 ㎡を前後するためであり、推定復元可能な後期の環濠集落の平均値（約 7,900 ㎡と想定）からみると、弥生時代後期としては大型の部類に入る。同じ後期の環濠として規模の上で最も近いのは、神奈川県横浜市の大原（おっぱら）遺跡（鈴木重ほか 2011，第 226 図）であり、同県寒川町の倉見才戸遺跡（押木編 2006，第 226 図）もその可能性があるが調査範囲が限定されており確実ではない。これを超える規模の環濠は、東京都北区赤羽台遺跡（大谷編 1992，第 225 図）、新宿区下戸塚遺跡（菊池ほか 1996，第 225 図）などであり、14,000 ～ 21,000 ㎡の面積となる。関東地方の弥生時代後期に限っていえば、午王山遺跡は比較的大型の部類に入り、残存度が高く調査も進み情報量の多い良好な環濠集落遺跡といえよう。



第 225 図　関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較（１）
（小倉 2015 を改変）



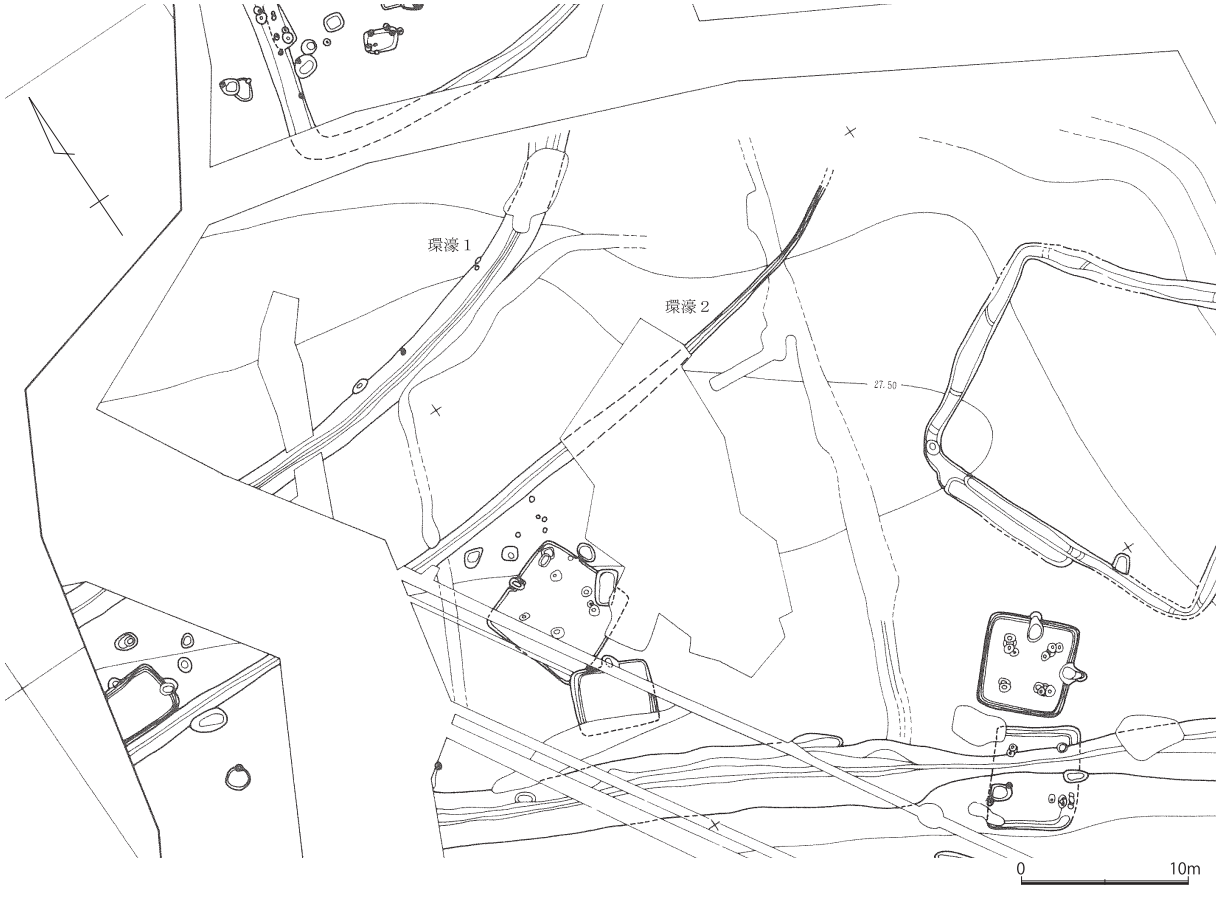
第 226 図　関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較（２）

（小倉 2015 を改変）

また、午王山遺跡の立地は荒川低地を見下ろす独立した台地上にあり、特異な様相を示してもいる。丘の上を占めた集団が最高所をめぐる環濠を設置してその場所に継続的に居住した事例といえるだろう。環濠の断面幅や深さから実用的な機能について積極的な評価はできないが、後期の環濠集落としてみれば、A溝の断面積は残りのよいところでは先述の下戸塚遺跡や神奈川県綾瀬市神崎遺跡（比留川ほか 1992，第 226 図）のそれに匹敵する。後期としてはしっかり作られた環濠であると評価することができる。

さらに午王山遺跡の大きな特徴は、多重環濠にある。多重環濠そのものは九州地方をはじめとして多数確認されており、環濠の情報に本来的に伴う要素のひとつとみられるが、関東地方ではあまり注目されてこなかった。その理由は明らかで、全貌の推定できる遺跡の中に、多重環濠とされるものがこれまでほとんど存在しなかったためである。したがって、午王山例が二重の環濠であるとすれば全体像を推定できる貴重な事例となる。

中期後半段階においては、複数の溝を検出した集落遺跡として、神奈川県秦野市砂田台遺跡（宍戸ほか 1989）、千葉県袖ヶ浦市西原（さいばら）遺跡（伊藤 1999）などがみられるが、砂田台遺跡は出土する宮ノ台式土器の検討の結果、中期に属する溝が時期を違えて営まれた例であることがわかっている（安藤 2013）。また西原遺跡は部分的な調査であり全体像や細分時期がはっきりせず、溝が並走するとも考えにくい。溝が複数存在するからといって、直ちに多重環濠集落とは認定できない難しさがある。同様に、千葉県木更津市鹿島塚Ａ遺跡・庚申塚Ｂ遺跡（岡野編 1994・1997，當眞編 2001，簑島編 1992，第 226 図）の事例も一見すると二重環濠



第 227 図　花ノ木遺跡で検出された溝（新屋ほか 1994 を改変）

第 228 図　中里前原遺跡第１次調査区で検出された溝（秦野ほか 1980 を改変）

にみえるが、内側は中期の溝、外側は後期の溝だという。

一方、後期の埼玉県域には和光市花ノ木遺跡（新屋ほか 1994）、さいたま市中里前原遺跡（秦野ほか 1980）で複数の環濠をもつ集落遺跡の報告がある。

花ノ木遺跡では舌状に伸びる台地を断ち切るように内側から環濠１・環濠２の２条の溝が検出されている（第 227 図）。軽くカーブを描きながら東西に並走する溝であり、外側の環濠２はやや規模が小さい。この規模の差は午王山によく似ていると考えられ、興味深い。ただし、部分的な検出であり、環濠集落の全体像は判明していない。小出輝雄は「環濠の内外に存在する方形周溝墓と竪穴住居跡の時期」によって環濠の時期を久ヶ原期としている（小出 2007）。環濠２からは出土遺物が少なく、土器の点からは両環濠の同時性を強調することは困難である。

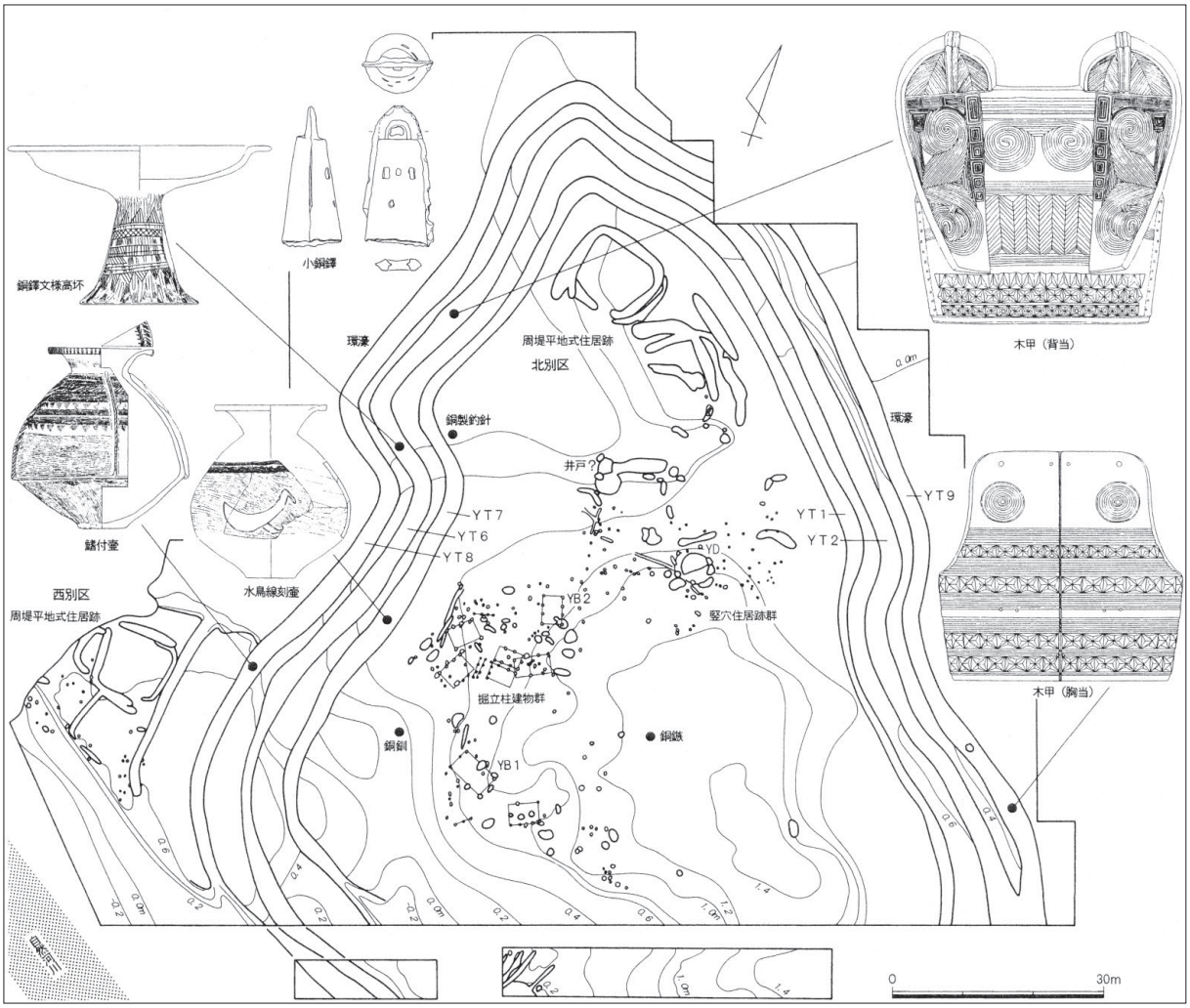
中里前原遺跡では第１次調査において３条の溝の存在が報告されている（第 228 図）。確かに内側の２条の溝は並行し、最も外側の溝も類似したカーブを描いており、多重環濠の可能性がある。報告書には外側から「１号Ｖ字形壕」「２号Ｖ字形壕」「３号箱形壕」と命名された溝がみられ、２号・３号は近接して並走するようにみえる。しかしながら、両溝は名前からもわかるように断面形状が異なり、同一の性格を持つ同時展開の溝と考えることは躊躇される[(8)]。１号は２号に比して小型の溝で、その点では午王山遺跡のＢ溝に類似するかもしれないが、同時性を推定する根拠には未だ乏しい。報告書においてはあらゆる可能性を提示しながらも、３条の溝の同時性には慎重な態度が示されている。また、これ以降の調査を

含めても溝の全体像は明らかになっておらず、集落の規模についても明確にしえない。

これらに比して午王山遺跡は全体像が想定可能で、なおかつ集落変遷も追うことができる点では、きわめて多くの情報を得ることができる遺跡であることがわかる。

さて、このように関東地方においては特異な存在ともいえる午王山遺跡であるが、環濠内の集落の様子は弥生時代後期における一般的な環濠集落と大きな違いはなさそうである。関東地方では中期の環濠集落においては環濠内に竪穴住居跡が密集するように分布し、大塚遺跡のように高床倉庫とみられる建物も認められる例がある。また、一般的な竪穴住居跡よりもかなり大型の住居跡が内部に含まれることもあり、大型方形周溝墓が単独または少数、集落内に営まれる例も見受けられる。後期の遺跡においては多数の竪穴住居跡が残される傾向はあり、大型の竪穴住居跡も存在するが、集落内に営まれる特殊な方形周溝墓などは顕著ではない。午王山遺跡も大小の竪穴住居跡が高い密度で分布するもので、関東地方の環濠集落内部の基本的な構成から逸脱するような性格はみせていない。

一方、東海地方において午王山遺跡と時期が近く、同規模かそれに近い多重環濠集落の著名な事例として静岡県浜松市伊場遺跡（鈴木敏ほか 2008）が挙げられる。低地に営まれ、南北約 150m、東西約 120m の広さで平面形が瓢箪形をしており、幅 11 ～ 14m の範囲に三重の



第 229 図　伊場遺跡の多重環濠（鈴木敏ほか 2008 より）

環濠がめぐるもので、溝と溝との間には土塁が存在するとされる。南東部分が未調査であるが、並走する溝の様子からは弥生時代後期における同時性が明らかである。溝内からは木甲なども発見されており、総括報告書では「十分に防禦用の機能を備えていたと言える」とされている（同：79 頁）。しかしながら、伊場遺跡は北側に広がる大規模環濠集落である同時期の梶子遺跡[9]（井口ほか 2017）に隣接し、環濠内から脱した首長居館の様相を呈するものと評価されており（寺沢 1998）、環濠内部も掘立柱建物や周堤を持つ平地式の住居跡によって構成されるなど、大小多数の竪穴住居跡が環濠内に密集する午王山遺跡とは全く異なる性格を持つものと推定される。

こうしてみると、竪穴住居という比較的等質な居住施設を多数配置する午王山集落が独立丘状の台地に占地して多重環濠を掘るという状態は、後期段階の集落として独特のあり方を示しているのではないだろうか。中期以来の環濠集落内の住居配置を形態的に維持しつつ、関東地方には少ない多重環濠を設置することは、午王山における環濠集落の一般性と特異性の両面をあらわしているように見受けられる。こうした点でも集落の全体像を推定復元することができる午王山遺跡は、東日本の弥生時代社会全体を検討する上で重要な事例といえるだろう。

おわりに

以上のように、午王山遺跡における環濠の全体像ならびに関東地方を中心とする東日本の環濠集落からみたその特質について論じてみた。今回の検討の結果、午王山遺跡が関東地方における弥生時代後期の環濠集落としては比較的大型であり、環濠そのものもよく掘り込まれていることがわかった。また、類例の少ない多重環濠集落として復元することが可能であり、独立した台地上に立地するといった特異性を有することも確認できた。こうした特性は弥生時代後期の関東地方の集落のあり方を考察するために有効な視点を提供するものと考えられる。環濠集落には当時の社会関係が投影されていることは間違いなく、荒川流域の弥生時代後期社会をより深く検討していくために、本遺跡例は欠くことのできない事例として大きな価値をもつことが明らかとなった。

今後は、午王山遺跡それ自体の復元や内部構造の検討を進めるとともに、午王山遺跡を核とした荒川流域の後期集落遺跡の諸関係を検討し、その変遷過程に一定の見通しを立てることが必要となろう。すでに関東地方では鶴見川流域の遺跡群において中期の集落群に関する議論が深まりつつある。河川と可耕地の規模において鶴見川流域を超えるスケールをもつこの地域で集落の展開課程や集落群の動態を明らかにすることによって、東日本の集落研究にさらに豊かな知見を加えることができるだろう。午王山遺跡の検討は、弥生時代社会の解明につながっているのである。

本稿をまとめるにあたっては、石川日出志、遠藤英子、柿沼幹夫、佐藤康二、鈴木一郎、鈴木敏弘、前田秀則、埼玉県教育庁市町村支援部文化資源課、和光市教育委員会事務局の各位にご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である（敬称略）。

【註】

1）小宮は調査原図から推定値を計算したものとみられるが、筆者は後に発掘調査報告書をもとに再計算を試みた（小倉 2015）。その際にはＢ環濠で 2,915 ㎥という値を得ている。同様にＡ環濠についても計算すると 1,896 ㎥となり、掘り直された環濠は労働量の上では節約の進んだものであることが推定された。

2）筆者は関東地方の環濠の規模を推定する際に残存率の高い環濠断面積をとりあげて推定復元を行った（小倉 2015）。当時の生活面が残されている例は限られていることから、断面の残存度に応じてＡ～Ｆの類型を設けて検討の前提とした。今回新たに検討した午王山遺跡は類型Ｅに分類される（第 220 図）が、これは「溝の上面が削平を受けている、あるいは断面図と環濠長軸のなす角度が不明瞭などの理由で、断面の規模が不明確なもの。比較的残りのよい断面から面積を推定せざるを得ない場合が多い。」という基準に則ったものである。

3）ただし第 217 図に表現した通り、遺跡北部の溝などは比較的小規模であるとも考えられる。

4）小出輝雄はこれを「濠の掘り上げた土を盛ったと考えられる土盛り状遺構」と考え、「防御のために有効であるほどの高さの土塁を築いているとも思えない」ことから、「防御力を増強するためのものではなく、「館」的な意味合いにつながる」と考えている（小出 2011）。

5）現地遺跡公園では整備に合わせて集落入口として木橋が再現されたが、実際にピットが残っていたのは開発のために削平された環濠西端部である。

6）横浜市権田原遺跡において環濠内に複数の硬化面を検出している。調査そのものは 1980 年代であるが、同遺跡は関東地方で環濠の規模の判明しているものとしては最大級の集落遺跡である。

7）横浜市折本西原遺跡は鶴見川本流に面する台地上の環濠集落で、集落としての総面積は 70,000 ㎡以上と見込まれている（石井ほか 1980）。ただし、調査は部分的に行われているに過ぎず、全域を環濠によって囲まれているかどうかは不明で、台地の南北で確認できる溝は時期を異にする可能性もある（小倉 2017）。

8）３号箱形壕には第６号住居跡・第７号住居跡が重複しているが、第６号住居跡との新旧関係は明らかでなく、第７号住居跡は３号箱形壕よりも新しいという所見が提示されている。

9）梶子遺跡は伊場遺跡など周辺の諸遺跡とともに伊場遺跡群を構成し、集落は砂堤列上に広く展開している。これまでに 20 次を超える発掘調査が行われており、本稿では最近の調査例として第 18 次調査の報文を掲げた。

【引用・参考文献】

赤塚次郎ほか　2002『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

安藤広道　1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」（上）・（下）『古代文化』第 42 巻第６・７号 (pp. 28-38, 13-24)

安藤広道　1991「弥生時代集落群の動態−横浜市鶴見川・早淵川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に−」『調査研究集録』第８冊　横浜市埋蔵文化財センター (pp. 133-164)

安藤広道　1992「三殿台遺跡の再検討−弥生時代中期の遺構群を対象として−」『調査研究集録』第９冊　財団法人横浜市ふるさと歴史財団 (pp. 71-86)

安藤広道　2013「弥生時代集落遺跡の分析方法をめぐる一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第 17 号　横浜市歴史博物館 (pp. 81-95)

井口智博ほか 2017『梶子遺跡 18 次』浜松市教育委員会

石井　寛　2010『大棚杉山神社遺跡・歳勝土南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 43　財団法人横浜市ふるさと歴史財団

石黒立人ほか 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 30　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人 1988「伊勢湾沿岸地方の〈囲郭集落〉をめぐる若干の問題」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会（pp. 462-470）

石黒立人 1990「濠のある集落とない集落」『季刊考古学』第 31 号（pp. 19-23）

石黒立人 1996「戦いの中の弥生ムラ」『市民の考古学３　発見と考古学』名著出版（pp. 241-275）

伊藤伸久 1999『西原遺跡Ⅱ』平成 11 年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ　袖ヶ浦市教育委員会

大谷　猛編 1992『赤羽台遺跡』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会

大村　直ほか 2005『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡群調査報告書ⅩⅢ　財団法人市原市文化財センター調査報告書第 92 集　財団法人市原市文化財センター

岡野祐二編 1994『千葉県木更津市請西遺跡群Ⅲ　鹿島塚Ａ遺跡』（財）君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集　財団法人君津郡市文化財センターほか

岡野祐二編 1997『千葉県木更津市請西遺跡群　鹿島塚Ａ遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集　財団法人君津郡市文化財センター

小倉淳一 2015「関東地方における弥生時代の溝」『環濠集落の諸問題 2015』環濠論集刊行会（pp. 21-51）

小倉淳一 2016「弥生時代中期環濠の造営時期と地域社会−印旛沼周辺地域を対象として−」『阿部朝衛先生還暦記念論集』阿部朝衛先生の還暦を祝う会（pp. 12-27）

小倉淳一 2017「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営期間」『法政考古学』第 43 集（pp. 1-40）

押木弘己編 2006『倉見才戸遺跡−第９次調査ほか発掘調査報告書−』寒川町埋蔵文化財調査報告書第３集　寒川町教育委員会生涯学習課

甲斐博幸ほか 1996『常代遺跡　第１分冊　常代遺跡縄文～古墳前期編』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 112 集　財団法人君津郡市文化財センター

柿沼幹夫 2019「午王山遺跡出土の弥生土器の編年的位置づけ」（本書第Ⅴ章第３節，pp. 177-218）

河合英夫ほか 2015『中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所

川畑和弘ほか 2017『下之郷遺跡発掘調査報告書　総括編』守山市教育委員会

川道寛ほか 2016『原の辻遺跡　総集編Ⅱ−平成 17 年度から平成 26 年度までの調査成果−』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 18　長崎県教育委員会

菊池徹夫ほか 1996『下戸塚遺跡の調査　第２部　弥生時代から古墳時代前期』早稲田大学阿部球場跡地埋蔵文化財調査報告書　早稲田大学

久世辰男 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房

呉地英夫ほか 1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書 61　小田原市教育委員会

小池雅典 2003『日影平遺跡　沼田市立沼田南中学校新設工事等に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』沼田市教育委員会

小出輝雄 2006「環濠は戦争用遺構か−南関東弥生時代中期後半期の検討から−」『古代』第 119 号（pp. 57-77）

小出輝雄 2007「環濠の性格についての再考察−埼玉県内の例を中心として−」『埼玉の弥生時代』六一書房（pp. 364-378）

小出輝雄 2011「続・環濠は戦争用遺構か−戦争（戦い・いくさ）への有効性・土塁の性格を中心として−」『古代』第 126 号（pp. 63-79）

小宮恒雄 1991「Ⅵ．考察　２．環濠の性格　b. 環濠の構築」『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ　横浜市埋蔵文化財センター（pp. 444-449）

佐原　眞 1979「弥生時代の集落」『考古学研究』第 25 巻第４号 (pp. 11-32)
宍戸信吾ほか 1989『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 20　神奈川県立埋蔵文化財センター
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『川合遺跡　静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査の概要』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990『川合遺跡（遺構編）本文編』
篠原和大 1999「タイプサイトの実像−弥生町遺跡−」『文化財の保護』第 31 号　東京都教育委員会 (pp. 131-142)
渋谷　格ほか 2015『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 207 集　佐賀県教育委員会
鈴木重信 2017「「大型ピット１」・「大型ピット２」の再検討」『横浜に稲作がやってきた !?』横浜市歴史博物館 (pp. 62-63)
鈴木重信ほか 2011『大原遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 44　横浜市教育委員会　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
鈴木敏則 2008「第５章　時代別総括　第１節　弥生時代」『伊場遺跡総括編（文字資料，時代別総括)』浜松市教育委員会 (pp. 79-89)
第２阪和国道内遺跡調査会 1970『池上・四ツ池』第２阪和国道内遺跡調査会
武井則道 1986「弥生時代の南関東」『岩波講座日本考古学５　文化と地域性』岩波書店 (pp. 187-222)
武井則道編 1991『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ　横浜市埋蔵文化財センター
都出比呂志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第 29 巻第４号 (pp. 14-32)
都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
寺沢　薫 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店 (pp. 103-162)
當眞嗣史編 2001『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅶ　庚申塚Ａ遺跡・庚申塚Ｂ遺跡』木更津市教育委員会
中島　宏 1984『池守・池上』埼玉県教育委員会
中間研志 1990「環濠集落の構造」『季刊考古学』第 31 号 (pp. 29-33)
新屋雅明ほか 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 134 集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
秦野昌明ほか 1980『中里前原遺跡　―第１次発掘調査報告書―』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会
浜田晋介 2011『弥生農耕集落の研究−南関東を中心に−』雄山閣
比留川聡ほか 1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告２　綾瀬市教育委員会・綾瀬市史調査会・神崎遺跡発掘調査団
福田一志ほか　2005『原の辻遺跡　総集編１　平成 16 年度までの調査成果』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 30 集　長崎県教育委員会
藤田三郎ほか 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ　範囲確認調査』田原本町文化財調査報告書５　田原本町教育委員会
松尾　宏ほか 2001『平塚川添遺跡Ⅰ　福岡県甘木市大字平塚字川添所在遺跡の調査・平塚工業団地造成に伴う発掘調査報告書Ⅱ』甘木市文化財調査報告書　第 53 集　甘木市教育委員会
松尾　宏ほか 2004『平塚川添遺跡Ⅱ　福岡県甘木市大字平塚字川添所在遺跡の調査・平塚工業団地造成に伴う発掘調査報告書Ⅲ』甘木市文化財調査報告書　第 64 集　甘木市教育委員会
簑島正広編 1992『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅳ　庚申塚Ａ遺跡・庚申塚Ｂ遺跡・山伏作古墳群第 22 号墳』木更津市教育委員会
吉田　稔ほか 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 95 集
和島誠一ほか 1965『三殿台　横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告』横浜市教育委員会

第３節　午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ

柿沼　幹夫

１　はじめに

本稿は、午王山遺跡の主要遺構である弥生時代後期の環濠集落の成立と展開過程を明らかにするために、時間的位置づけと文化的系統性を土器によって述べることを目的とする。午王山遺跡を乗せる武蔵野台地周辺の弥生時代後期土器編年研究は、特に 1970 年代以降、岡本孝之氏の久ヶ原・弥生町式併行論を契機とする混迷状況（久ヶ原・弥生町問題）にあったが、近年、一定の方向性が見えつつある。

2000 年前後の研究概況　2000 年前後までの松本 完氏と黒沢 浩氏による学史的総括（シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編 2005）では、両者ともに原典とも言える戦前の『弥生式土器聚成図録』（森本・小林編 1938・1939）、戦後の『弥生式土器集成図録』（小林・杉原編 1968a・b）が「南関東」という架空の領域を先験的に設定し、同一の土器文化圏としたところに混乱の要因があるとしていた。こうした問題意識をもとに、黒沢氏は、横浜市二ッ池遺跡の分析から二ッ池式を設定し（黒沢 2003・2005）、松本氏は新宿区下戸塚遺跡出土土器の分析（松本 1996）、更には和光市午王山遺跡とその周辺遺跡の土器群を分析した（松本 2007）。前者は東京湾西岸域（多摩川下流・鶴見川下流域）の、後者は武蔵野台地北半域の後期土器群の様相と編年を実体的な領域から把握しようとした点に意義があった。更に、東京湾東岸域を対象とした編年研究では、大村 直氏が市原市周辺の土器群を分析し、後期前半に久ヶ原式を置き、後期後半には山田橋式を設定した（大村 2004）。「弥生町式」という呼称を使用せずに「山田橋式」を用いたのも、地域様相から土器編年を再構築しようとした研究姿勢と見られる。

一方、比田井克仁氏は様式論の立場から後期を３期区分し、Ⅰ期が久ヶ原式で、Ⅱ・Ⅲ期以降に三つの様式圏に分かれるとした。篠原和大氏の端末結節縄文と自縄結節縄文の研究（鮫島 1994）も取り入れて、甕の整形手法の分布を基準に相模地域の相模様式（端末結節縄文・ハケ調整甕）、東京湾東岸房総地域と三浦半島の房総様式（自縄結節文・輪積み痕系統甕）、両者が混在する東京湾西岸の南武蔵様式に分け地域区分した（比田井 2005）。更に、南武蔵様式の範囲は三つの地域性があるとし、第一の地域性が横浜・川崎・多摩川下流域、第二の地域性が多摩川下流域の一部を除く武蔵野台地一帯、第三の地域性が大宮台地南側とした。

2010 年以降の研究概況　2010 年の齋藤瑞穂氏の「下戸塚式」の提唱は、武蔵野台地北半の後期中葉前後の土器の特徴をよく捉えたものであり（特に１式）、批判的継承をなすべき価値を備えていた（齋藤瑞 2010・2018）。齋藤氏は、武蔵野台地を刻む神田川流域にある下戸塚遺跡の環濠内住居群から出土した装飾壺を対象に、松本氏の批判的継承という立場から検討を行い、その成立に東海地方の菊川式の関与があったことを認めつつも時間の経過に従って独自の変遷をたどったとした。一方で環濠外エリアの土器群は、久ヶ原式の諸要素を受容しつつ平行区画帯縄文と下向き三角文を特徴として独自の変遷を遂げ荒川水系沿いに波及していったとする。そして、前者を下戸塚１式、後者を下戸塚２式と呼称することを提案した。

2014 年、古屋紀之氏は比田井氏や齋藤氏の地域性の考えを取り入れながら検討を加えて、南武蔵地域を北部様式と南部様式に二分し、その境を目黒川としている（古屋 2014・2015)。南武蔵南部様式は多摩川下流域と鶴見川流域が中心域で、港北ニュータウン中の北川谷遺跡群の土器編年を行い時間軸の指標とした。後期前半は沈線区画の羽状縄文帯・山形文帯壺とナデ調整多段輪積み甕を指標とする久ヶ原式土器圏で、後期後半には北部との境が多摩川北岸まで下がり、壺は重山形文系幾何学文の多重化が進み、ナデ台付甕にハケ甕が混じるようになる。南武蔵北部は、武蔵野台地東部は後期前半には久ヶ原式土器が分布するが、北半では筆者の考え（柿沼 2013）を取り入れて白子川流域を中心に北武蔵の岩鼻式の南下があって久ヶ原式と混成するとした。そして、後半には菊川系の影響が強まる一方、壺における複合口縁の発達や幅広一帯の縄文帯など久ヶ原式の要素が独自に発達する､とした。2018 年には学史的背景と近年に至るまでの研究動向を総括し、久ヶ原式と弥生町式に代わる様式・型式名の整理案を次のように提示した（古屋 2018)。

	後期前半		後期後半
東京湾東岸	久ヶ原式	→	山田橋式（久ヶ原式系）
南武蔵南部	久ヶ原式	→	大原式（久ヶ原式系）
南武蔵北部	下戸塚式前半 菊川式・久ヶ原式混在	→	下戸塚式後半 狭義の弥生町式（東海東部・相模系） 仮称田端道灌山式（久ヶ原式系）

古屋氏が後期後半の南武蔵南部の様式（型式）名に久ヶ原式、弥生町式の呼称を用いることに反対しているのに対し、安藤広道氏は杉原荘介氏の久ヶ原式、弥生町式、前野町式という学史的名称の復活と現在の資料による再編成を強調している（安藤 2015a・2015b・2017)。その方法は、山内清男氏の縄文土器研究の文様帯分析を基準に、壺の文様を口縁部（Ⅰ）と頸胴部（Ⅱ）に分け、その構成を型式的に捉え直すもので、久ヶ原式に関しては菊池義次氏の久ヶ原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を再評価し継承すべきとしている(1)。そして、南武蔵北部域の単純な端末結節や自縄結節文区画の幅広羽状縄文帯、棒状浮文を多用する特徴的な複合口縁を弥生町式土器と呼ぶことも十分可能としている。以下、安藤・齋藤・古屋氏の論攷と松本　完氏の下戸塚遺跡や午王山遺跡等に関する分析結果(2)を基本ベースに、一部批判的検討を加えて午王山遺跡出土土器を分析していくことにする。

２　午王山遺跡出土土器群の段階区分

午王山遺跡出土土器については、松本 完氏の精緻な分析による優れた編年研究があり（松本 2007)、大方は準拠することに異存はない。ただ、筆者は細かいいくつかの点で異見をもっており（柿沼 2009･2013)、次項では現時点の考えも取り入れながら記述を進めることにする。結論めくが、午王山遺跡出土土器から見た集落形成の段階区分は次のとおりである。１期・２期と時期区分せず段階としたのは、連続性があるとは限らないからである。

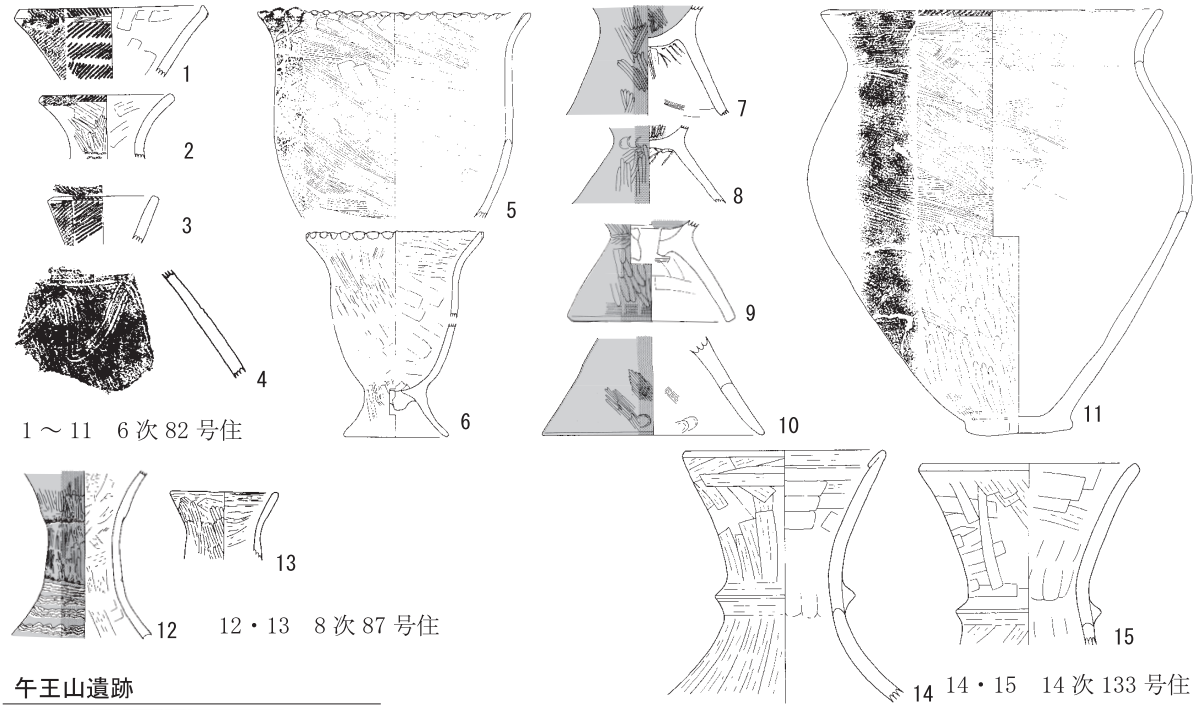
第１段階　弥生時代中期後半　宮ノ台式Ⅴ期
第２段階　弥生時代後期前半　岩鼻式２・３期と久ヶ原Ⅰ式の混成
第３段階　弥生時代中葉前後～後半　下戸塚式（菊川式系と久ヶ原Ⅱ式の混成）

(1) 第１段階

① 旧入間川流域の状況　旧入間川流域（現・荒川流域）には、安藤広道氏のSi編年（安藤1990・1996）の宮ノ台式Ⅲ期からⅤ期に至る遺跡が点在しており、下流域の武蔵野台地崖線には東京都北区／飛鳥山・赤羽台、板橋区／中台畠中、沖山、氷川神社北方、白子川を越えて埼玉県和光市／午王山、花ノ木、朝霞市／向山、新屋敷第１地点（台の城山）、富士見市／南通などの遺跡をあげることができる。更に遺跡は入間川を越えた荒川中流域右岸にも及んでいて、入間台地の川越市／川越城跡、猫田、霞ヶ関、登戸、坂戸市／木曽免、附島、塚越渡戸、高坂台地の東松山市／代正寺、野本氏館跡、吉見丘陵の吉見町／大行山などの遺跡があり、周辺の低地帯微高地にも東松山市／反町、吉見町／三の耕地などの遺跡がある。そして、比企丘陵と吉見丘陵に挟まれた東平台地には熊谷市／円山、船木などの遺跡があり、現時点における宮ノ台式の分布北限をなす。Si Ⅲ期の分布北限は越辺川以南の木曽免遺跡、附島遺跡であり、擬流水文や斜格子文など東海東部の白岩式系統の櫛描文土器が特徴的である。Si Ⅴ期では更に北上した荒川以南の円山遺跡が北限で、頸胴部に斜縄文を施した壺が主体である。円山遺跡からは、眼下に新期荒川扇状地と東側低地帯とからなる妻沼低地を望むことができる。妻沼低地には、関東地方における灌漑水田稲作農耕の定着を示す池上、前中西、北島、諏訪木遺跡等が展開している。荒川以北の中期中葉から後半の土器は池上式（古・新）→北島式（古・中・新）→仮称用土・平式と展開するが（石川・松田2014 、柿沼2014）、時間が下るにつれて北信地方の栗林式土器の影響が濃厚になる。荒川以南の比企・入間地方でも栗林式が宮ノ台式に混じて出土する木曽免遺跡や塚越渡戸遺跡等があり、木曽免遺跡では北島式土器も伴っている。

② 午王山遺跡とその周辺域　午王山遺跡の３軒の住居跡から出土した土器群（第230図1～15）は、完形土器や器種構成が不十分であるが、壺の構成は住居ごとにバラエティに富む。82号住出土の小型壺口縁部１・３の縄文帯は単節縄文（LR）であり、２の頸部にはS字状結節文が見られる。この結節文は、おそらく重畳結節文として頸部文様帯を構成するもので、大宮台地南部ではさいたま市／御蔵山中遺跡、松木遺跡、大北遺跡などSi編年のⅤ期に盛行している（柿沼2003）。133号住出土の壺２点（14・15）は頸部に突帯が付されたもので、14には口縁部内面粘土帯がある。２点ともに無文で赤彩がなされず加飾性に乏しいが、頸部突帯は重畳結節文と同様に大宮台地南部では大北遺跡や円正寺遺跡などⅤ期に顕著に認められる。87号住出土の壺は細頸部に２段の刺突の加えられた輪積み痕があり、肩部に櫛描波状文が施され無文部は縦にヘラミガキ・赤彩がなされている。82号住では赤彩された高坏脚部が４点（７～10）出土しているが、宮ノ台式の高坏には坏部が鉢・深鉢状をなすもの（第１図18～20）と口縁部が鍔状をなすもの（29）があり、後者の脚は末広がりである。７～10の脚はいずれも台状であることから、坏部は鉢状のものと推定できる。

ところで、1・2のLR斜行縄文を近隣のⅤ期の例と比較してみると、新屋敷遺跡第1地点（台の城山遺跡）の２例（第230図16・17）、南通遺跡２号住の３例（第230図24～26）、花ノ木遺跡４次９号住出土大型壺肩部の沈線区画縄文（第231図６）は、いずれも単斜方向の縄文（LR）である。更に北方の川越城跡11次３号土坑では頸部に突帯をもち赤彩された壺（第231図15）と共伴した壺（16）も単斜方向の縄文（RL）である。このような例から午王

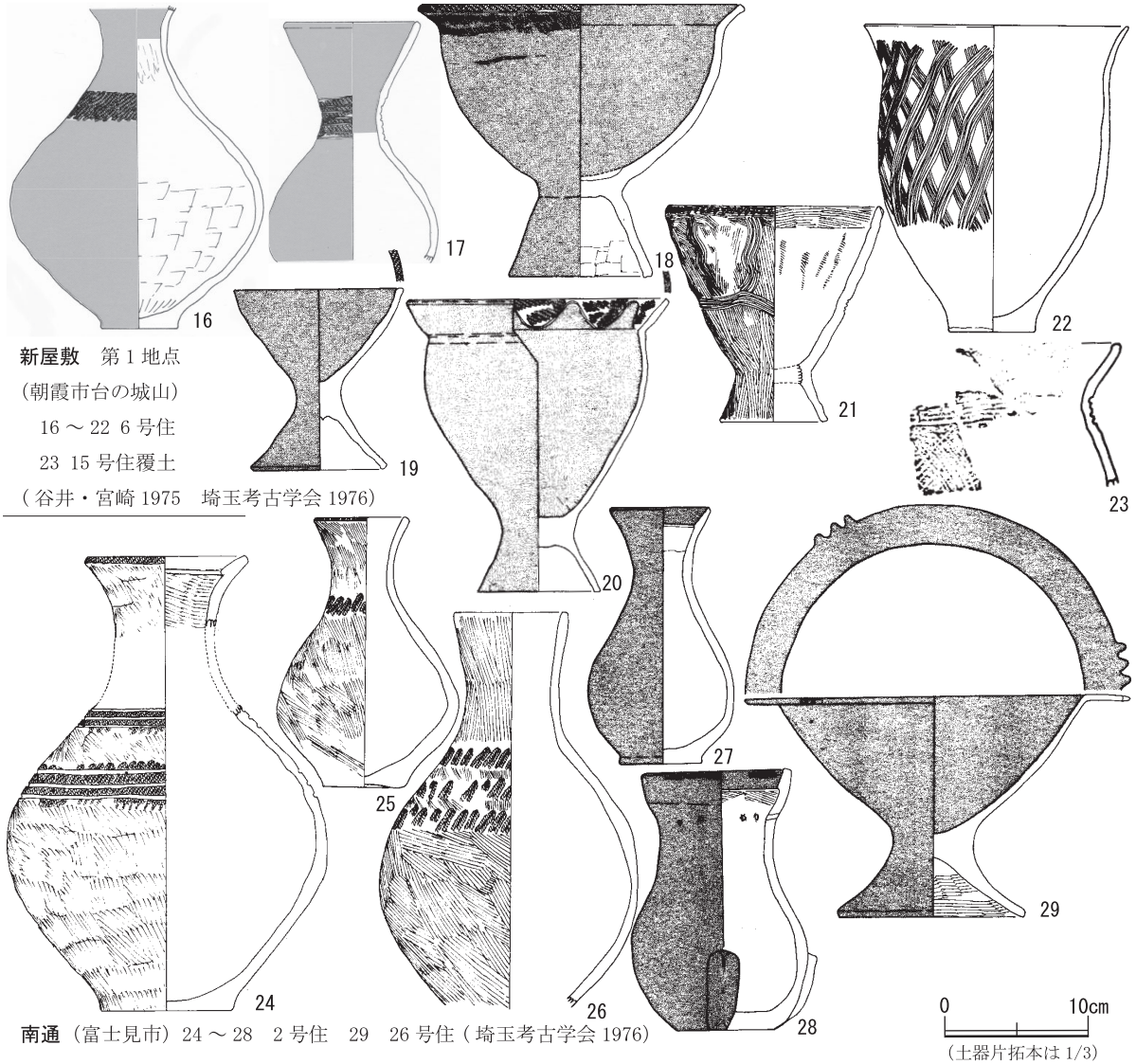


1 ～ 11　6 次 82 号住

12・13　8 次 87 号住

14・15　14 次 133 号住

午王山遺跡

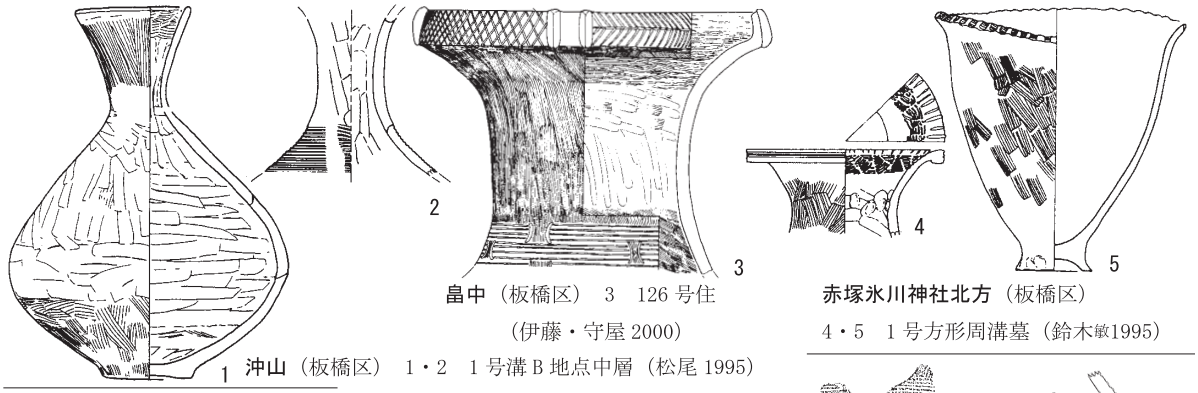


新屋敷　第 1 地点
（朝霞市台の城山）
16 ～ 22　6 号住
23　15 号住覆土
（谷井・宮崎 1975　埼玉考古学会 1976）

南通（富士見市）24 ～ 28　2 号住　29　26 号住（埼玉考古学会 1976）

0　10cm
（土器片拓本は 1/3）

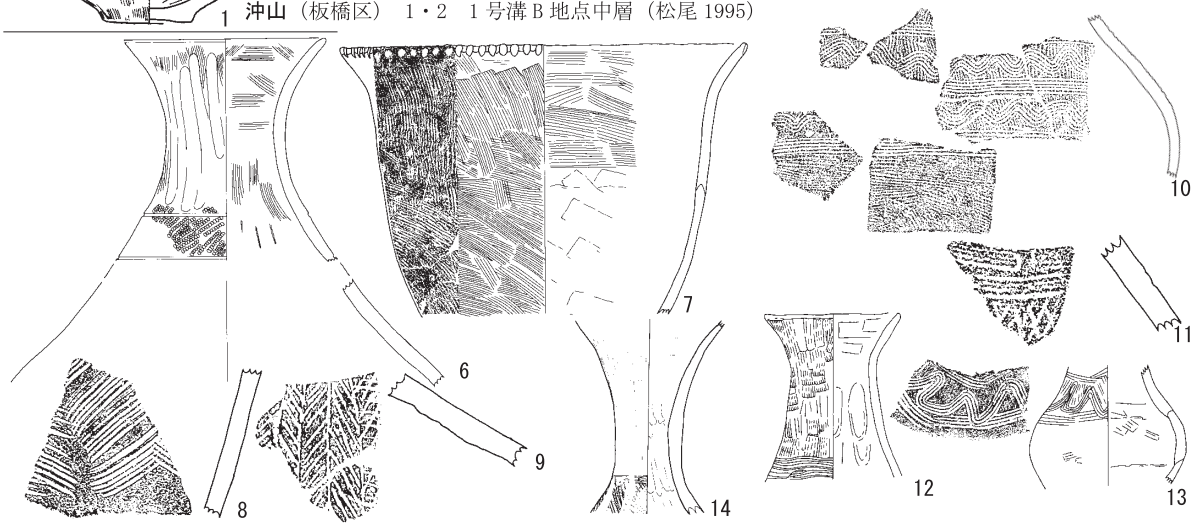
第 230 図　午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較 - 1



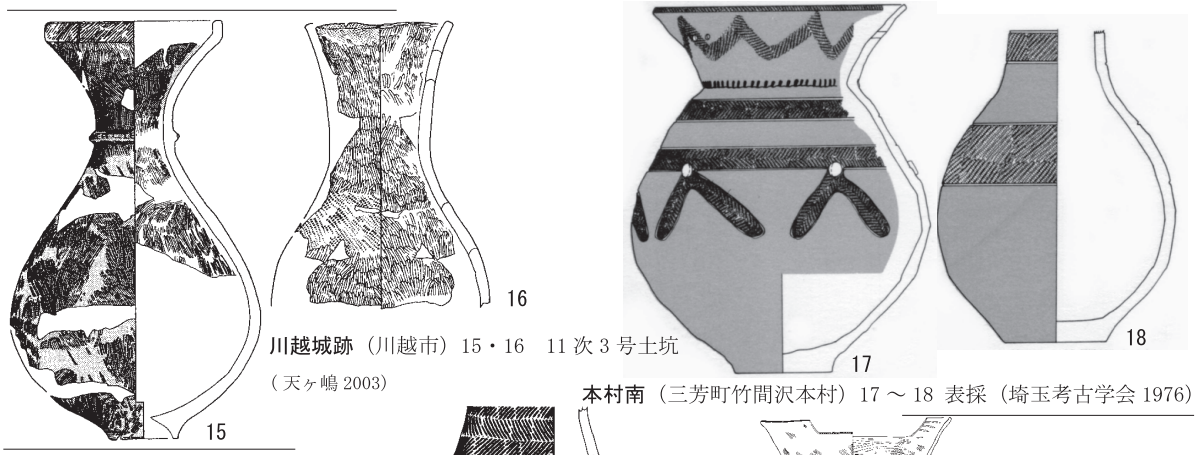
沖山（板橋区）　1・2　1 号溝 B 地点中層（松尾 1995）

畠中（板橋区）　3　126 号住（伊藤・守屋 2000）

赤塚氷川神社北方（板橋区）　4・5　1 号方形周溝墓（鈴木敏1995）



花ノ木（和光市）6 ～ 9　4 次 9 号住　10・11 4 次 10 号住　12・13 4 次 13 号住　14 県 1 号環濠（鈴木一 2001、石坂 1994）



川越城跡（川越市）15・16　11 次 3 号土坑（天ヶ嶋 2003）

本村南（三芳町竹間沢本村）17 ～ 18　表採（埼玉考古学会 1976）

代正寺（東松山市）

19・20　11 号方形周溝墓

21・22　10 号方形周溝墓（鈴木孝 1991）

（21 は 1/12、土器片拓本 1/3）

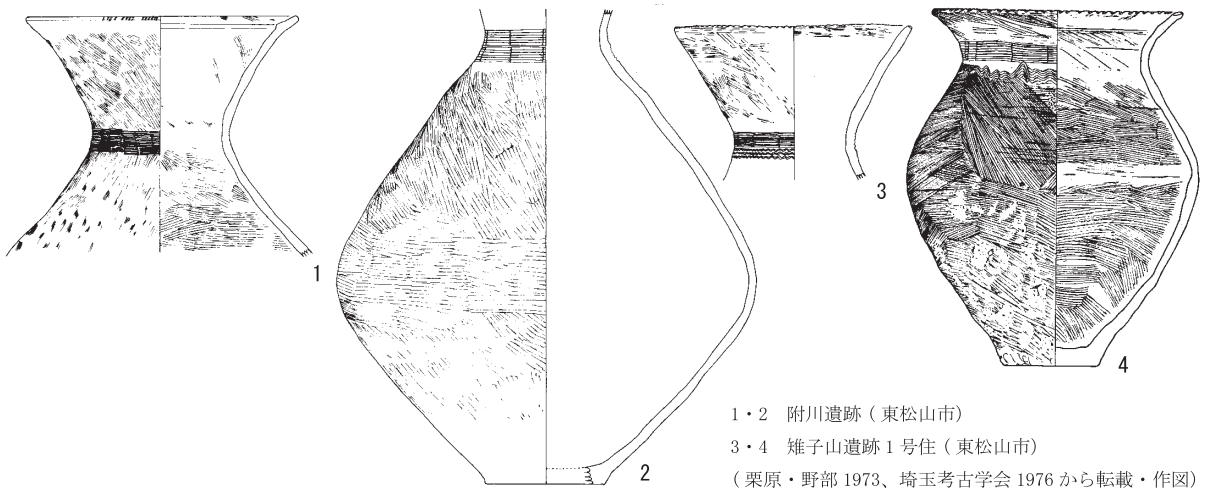
第 231 図　午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較 - 2

山遺跡周辺のⅤ期の縄文壺は単斜方向の縄文（LR 優勢）が主流のように見えるが、三芳町 / 本村南遺跡出土広口壺（第 231 図 17）の２帯縄文と結紐文は羽状縄文である。そして、口辺部の山形文・結紐文頂部のボタン状貼付文や、壺 18 の羽状縄文ではないが沈線区画された２帯縄文帯は後期の久ヶ原式土器に繋がる新しい要素をもつ。代正寺遺跡 11 号方形周溝墓出土壺頸部縄文帯は羽状縄文であり（第 231 図 20）、胴部上半の結紐文は連接して山形文風になっている。10 号方形周溝墓の大型壺（21）は頸部突帯下の縄文帯も羽状縄文である。このようにみると午王山遺跡の宮ノ台式は Si 編年のⅤ期であるとしてもその前半であり、後半は羽状縄文を有する土器群を充てるべきかもしれない。従って、午王山遺跡の中期集落と後期集落は時間的に連続せず間断期が存在した可能性も考えられる。

次に、中期後半段階における他地域との交流関係について触れてみたい。午王山遺跡では 82 号住出土の大型甕（第 230 図 11）は、松本 完氏が系統は定かでないが宮ノ台式ではないとし、中部高地型櫛描文土器である西毛の竜見町式（栗林式系）の甕から櫛描文を除いたものと推測しており、筆者も同意したい。入間川を越えた北武蔵の比企・入間地方は宮ノ台式の北限域で荒川中流域を境に栗林式土器分布圏と接触し、荒川以南にも栗林式系土器が混じて出土しており、代正寺遺跡 10 号方形周溝墓出土の小型台付甕（第 231 図 22）はその一例である。それが更に入間川を越えて南下し、新屋敷６号住の甕（第 230 図 22）は頸部櫛描簾状文のない変形品、15 号住覆土の甕（23）は頸部櫛描簾状文と胴部櫛描斜格子文を備えた忠実品である。朝霞市 / 向山遺跡１地点７号住では、コの字重ね文の出土事例もある（安田 2017）。花ノ木４次９号住の甕（第 231 図８）には縦羽状の櫛描文が認められる。以上のような長野県（北信）から群馬県（西毛）との関係が考えられるものがある一方、東海地方との関係が窺えるものがある。そもそも宮ノ台式の成立には東海地方東部（東遠江）の白岩式土器の影響が濃厚とされており、午王山遺跡の近隣でも畠中遺跡 126 号住の大型壺（第 231 図３）、沖山遺跡１号溝出土の壺２点（１・２）、花ノ木遺跡４次 10 号住・11 号住出土土器（10 ～ 13）の櫛描擬流水文・斜格子目文・横線文・波状文などがその特徴をよく示す Si Ⅲ期である。花ノ木４次９号住出土の壺破片（９）や県１号環濠出土の縦位区画文（14）は白岩式の最新相で、移動品の可能性がある。氷川神社北方遺跡１号方形周溝墓出土の壺（４）は、凹線文の口縁部を有する西遠江以西に由来があるものである。後期になって顕著となる中部高地型の岩鼻式土器の南下、その後の東海東部の菊川式土器の東進に先立って中期後半から末葉段階に両地方との交流があったことが示されている。

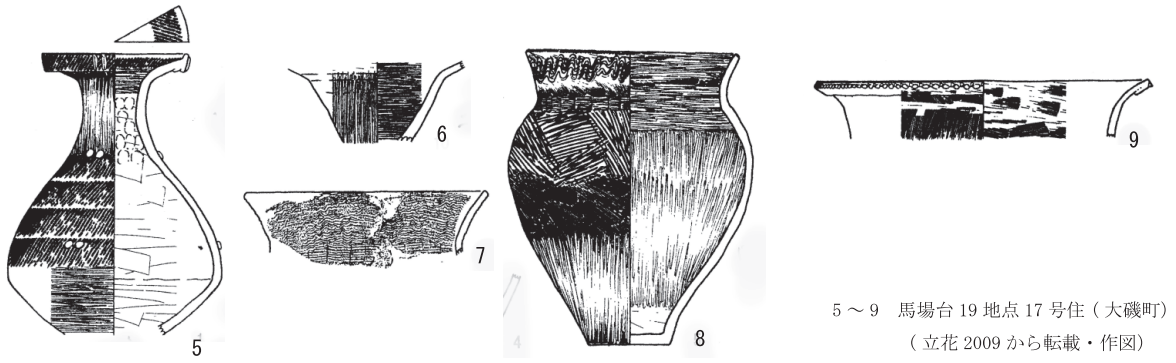
（２）第２段階

①　岩鼻式土器の南下　弥生時代後期初頭は列島規模で遺跡が激減し、前期以来発展してきた各地の弥生社会がいったん急激にしぼむという（石川 2010　p. 182）。東京湾沿岸地帯における後期初頭から前半の位置を占める久ヶ原Ⅰ式土器は、大宮台地から荒川低地では存在が皆無であり、後期初頭の遺跡を見出すことはできない。列島規模の遺跡の希薄化は荒川低地とその周辺部でも例外ではない。その一方で、遺跡の稀少化はあっても中期後半から後期への糸は細々ながらも繋がって後期土器文化を形成する地域がある。東京湾東岸の市原台地を中心とする地域は、宮ノ台式から久ヶ原式への連続過程を追うことが可能であり（大村 2004・杉山 2010）、北武蔵の中核を占める荒川中流域右岸地域（比企・入間地方）でも宮ノ



1・2　附川遺跡（東松山市）
3・4　雉子山遺跡１号住（東松山市）
（栗原・野部 1973、埼玉考古学会 1976 から転載・作図）

① 午王山遺跡にはない岩鼻式１期



5 ～ 9　馬場台 19 地点 17 号住（大磯町）
（立花 2009 から転載・作図）

② 菊川式・最古一岩鼻式１期一久ヶ原Ⅰ式最古の時間的併行関係を示す資料

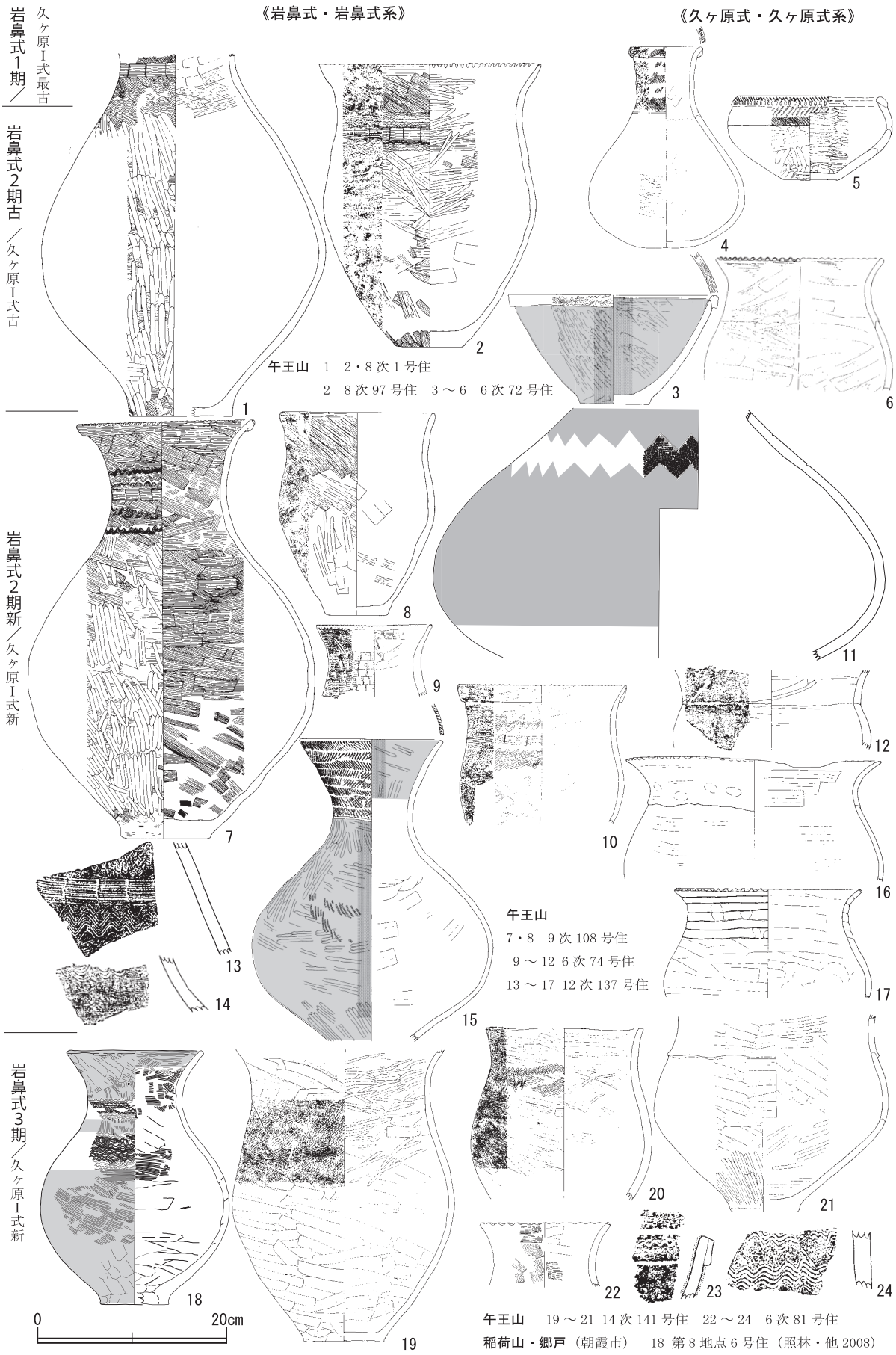
第 232 図　岩鼻式土器１期と時間的併行関係を示す資料

台式から後期櫛描文土器（岩鼻式土器）への連続した推移を辿ることができる。

荒川中流域右岸地域は、中期後半において宮ノ台式の分布圏北限をなし、荒川を境にして中部高地型櫛描文土器の栗林式土器分布圏と接触する。中期末葉から後期にかかるかと言う時期には、中部高地型分布圏の拡大によって仮称「代正寺式」土器という過渡期を経て岩鼻式土器が生成され、中部高地型櫛描文土器の周縁部を形成する。多摩丘陵の朝光寺原式土器の生成もその一環であり、両地域は関東西部山地沿いの山ッ道を通じて日常的な交流が行われていたものと考えている（石川$_{安}$・柿沼・宅間 2017）。岩鼻式土器は、壺・甕がともに櫛描簾状文・波状文を主体としており、大きく３時期（１期・２期・３期）に区分できる（柿沼 2006）。

１期（第 232 図①）は、壺・甕がともに単口縁主体の胴部中位が張る算盤玉状の器形で、文様は頸部に集中し櫛描簾状文 a（等間隔留め）を基調に波状文が丁寧に描かれる（波状文 a）。甕は口唇に刻みを施すのが基調で指頭押捺もあり、壺と同様の頸部文様に加え胴部にも中期後半からの系譜を引いて櫛描縦羽状文・斜格子状文・斜状文を施す場合が多い。

２期は、口縁部の伸張化傾向と複合口縁の明確化、頸部の緩曲化と胴部の円形化があり、櫛描手法も１期に比して原体がやや細く、簾状文 a が踏襲されるが乱れが生じ、波状文も同様である（波状文 b）。段重ねの簾状文の盛行、甕の胴部文様が稀少化するのも２期の特徴



第233図　午王山遺跡とその周辺域　後期前半期の土器編年

である。２期は２区分（－１・－２）でき、－１期は壺の折返し口縁が未発達であり、－２期は壺の折返し口縁の肥厚化（断面三角形・四角形）、甕における頸部の曲線化と胴部の張りがより少なくなる。

３期は、櫛描手法が弛緩し簾状文ａを継承しながらきちんと止めないもの、脱落するものがあり、頸胴部装飾帯（主に波状文ｂ）が幅広くなる。筆者が頸胴部帯縄文甕と呼称している甕は、頸胴部装飾帯の櫛描波状文が縄文に置き換えられたもので３期中に登場し吉ヶ谷式土器に継承される。頸胴部帯縄文甕と同時に壺にも縄文を施すものがあり、両者は後期中葉前後の一時期に東信・佐久地方の箱清水式土器、西毛の樽式土器、多摩丘陵の朝光寺原式土器にも伴っており、後期前半から後半を繋ぐ広域的な交差編年の鍵となっている（柿沼2016）。

以上のような変遷をなす岩鼻式土器を使用する集団が、入間川を越えて人口希薄な武蔵野台地北半の一角、白子川や越戸川流域に進出し、東京湾西岸の久ヶ原Ⅰ式土器を使用する集団と混成して形成した集落の一つが午王山遺跡である。近隣では、数少ないながら氷川神社北方遺跡や朝霞市／稲荷山・郷戸遺跡も、同様の性格を示す集落跡である。

なお、白子川流域一帯に岩鼻式土器が及んでいることを最初に紹介したのは、当時、埼玉大学２年生であった谷井　彪氏である（谷井1966）。本書23頁に実測図が掲載されているが（第７図２）、簾状文ａを挟んで上下に幅広く波状文ｂを施した壺は午王山遺跡108号住出土壺（第151図１）に近似しており、岩鼻式２期新に位置づけられる（第233図７）。

②午王山遺跡の後期前半　午王山遺跡における後期集落が形成されるのは岩鼻式２期からであり、岩鼻式１期が欠落している。岩鼻式１期の遺跡は、入間川水系に属し比企郡域を横断する都幾川流域に集中しており、岩鼻式土器生成後一時期をおいて２期以降、周辺へ分布拡大していく状況が窺える。岩鼻式１期の時間的位置づけを示す地域間比較資料として、神奈川県大磯町／馬場台遺跡19地点17号住出土土器(3)をあげてみたい（第232図②）。第232図５の壺と６の高坏はかつて二之宮式と言われていたもので、ともに白岩式の系統を引く東遠江の菊川式最古段階に位置づけられる。９は折返し口縁をもつ三浦半島を中心に見られる久ヶ原式最古の甕であり、７・８は甲府盆地の中部高地型櫛描文土器で、形状に中期的様相を残し胴部には櫛描きによる縦羽状文が見られ、岩鼻式土器１期の甕と共通する。午王山遺跡では、こうした後期の最古段階は欠くものの程なくして後期集落が開始される。

岩鼻式２期古　午王山遺跡で岩鼻式土器が初現する遺構としては、１号住、72号住、97号住があげられる（第233図１～６）。３号住は既報告の小型壺に加えて破片資料が追加掲載されているが（第27図）、いずれも久ヶ原Ⅰ式土器で岩鼻式が認められないが併行期と見られる。１号住は前稿（柿沼2009）では岩鼻式２期新としていたが、改めて出土壺（１）を熟覧したところ２期古とした方がよいと判断した。なで肩で胴部中央が張る器形、頸部櫛描簾状文と波状文はともにａ類で乱れが少なく古相を留める。72号住出土鉢（３）は、折返し口縁の明確化が認められ、小型台付甕（第115図11）は宮ノ台式からの系統と見るよりは痕跡の浅いハケ整形や口唇部の内方からの刻みは岩鼻式の特徴で、頸部の櫛描簾状文や波状文が省かれた事例と考える。久ヶ原式が伴出しており（４・５・６）、沈線区画口縁部・多条帯羽状縄文壺（4）は古式の様相をもつが稚拙なツクリで最古期とする決め手に欠ける。

一段の輪積み痕を有する口唇部交互押捺・ナデ整形甕（６）も、口唇部交互押捺が不揃いで胴部の円形度が増している点などから、Ⅰ式古としても最古期にはいかないと判断した。97号住出土甕（２）は受口状の名残を残すが、胴部に櫛描縦羽状文や斜格子状文がなく、頸部櫛描簾状文・波状文にやや乱れがある。

岩鼻式２期新　74号住・108号住・124号住・137号住出土土器を充てる（第233図７～17）。108号住では床直や貯蔵穴から出土した土器（７・８）のうち壺（７）はほぼ完形で、１に比して胴部の円形度が増し、折返し口縁に肥厚があり、頸部簾状文を挟んで上下に波状文ｂがある。74号住出土土器（９～12）は、簾状文を５条も重ねた甕（９）、折返し口縁で簾状文ａを挟んで上下に波状文ｂがある甕（10）がある。伴った久ヶ原式壺（11）は頂点間がつまった新しい様相をもつ山形文で、伴出した輪積み痕１段のナデ甕（12）も含めて久ヶ原Ⅰ式新と見たい。137号住出土土器（13～17）は久ヶ原式主体で、壺（15）は単口縁口辺部に沈線区画された羽状縄文帯をもつもので、下戸塚１期に位置づけられた下戸塚遺跡２号土坑出土壺（第235図５）より胴部の張りが強く後出と見られる。ナデ甕には輪積みが１段のもの（16）と多段のもの（17）があり、久ヶ原Ⅰ式新とみたい。岩鼻式は破片のみで、13は頸部櫛描簾状文の上下に波状文があり７や10と同様である。

岩鼻式３期　81号住・105号住・141号住が該当するが、長方形状で主炉が奥壁寄りに偏在する18号住、住居の複合関係から最も古く隅丸長方形で炉が奥壁寄りの119号住も３期に属する可能性が高い。141号住出土土器（第233図19・20・21）は緩曲頸部に櫛描波状文だけの甕（20）、頸胴部帯縄文甕（19）は３期の特徴で、平底で輪積み痕１段のナデ甕（21）は岩鼻式３期が久ヶ原Ⅰ式新併行に留まることを示している。81号住では点数は少ないが岩鼻式の無文甕（第233図22）が出土し、破片（23・24）は櫛描波状文で岩鼻式３期の特徴をよく示す。

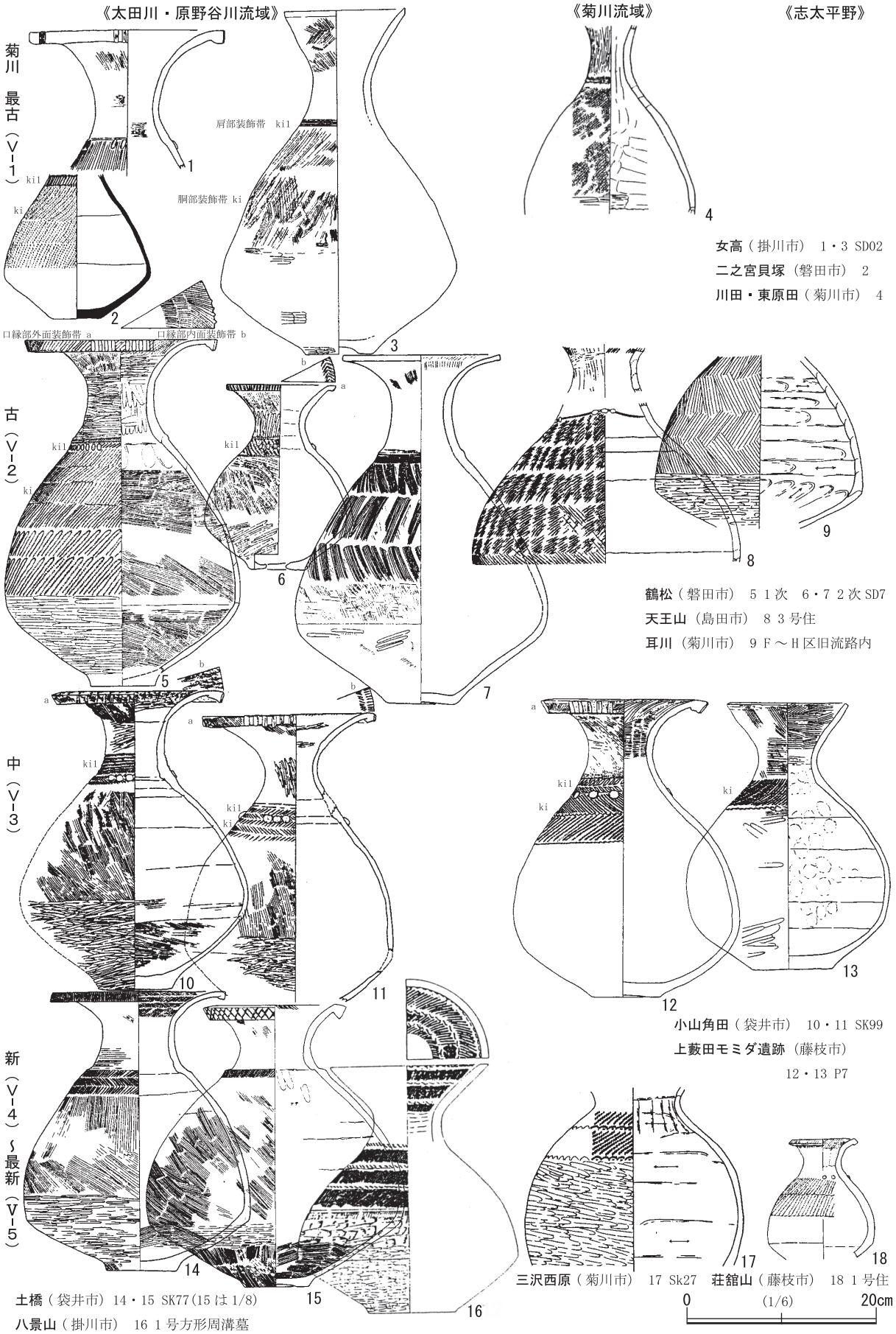
近隣の朝霞市／稲荷山・郷戸遺跡第８地点６号住出土の壺（第233図18）は頸部と胴部上半に２帯の櫛描波状文帯があり、単口縁で器面や口縁部内面は赤彩されている（照林・他2008）。この櫛描文帯が縄文に置換されれば吉ヶ谷式土器であり、岩鼻式３期でも新しく位置づけられる。同・第９地点１号住の甕（第245図15）は櫛描簾状文が健在だが、長胴な器形や口縁部の指のヨコナデは岩鼻式３期に特徴的である（斉藤純2010）。

岩鼻式３期をもって武蔵野台地北半から岩鼻式の系統を引くと考えられる土器は見当たらなくなり、在地化することなく痕跡も留めずに姿を消してしまう。

（３）第３段階

岩鼻式の撤退後、午王山に集落を形成するのは下戸塚式土器を使用する集団であり、久ヶ原式系土器（久ヶ原Ⅱ式併行）が継続して混成する。下戸塚式は東海東部地方の菊川式土器に祖型があることは間違いなく、松本氏は武蔵野台地北部と菊川流域とは型式変化の軌道が一部共有され、持続的な交流関係が存在していたとしている（松本1996 pp.622-623）。

①　菊川式土器　菊川式土器の壺は無花果形の器形が特徴的で、細頸で肩の張らないものから胴部の張りが強くなるもの、頸部の屈曲が強くなるものに変遷する（第234図）。安藤広道氏は菊川式の壺に文様が施される文様帯を記号化し（安藤2009）、口縁部をⅠ文様帯とし口唇面装飾帯（a）・内面装飾帯（b）、受口状口縁は受口部外面（A）・口唇（B）と区分する。



第 234 図　菊川式土器　壺の編年（抄）（篠原 2000・2001・2002 をもとに作図）

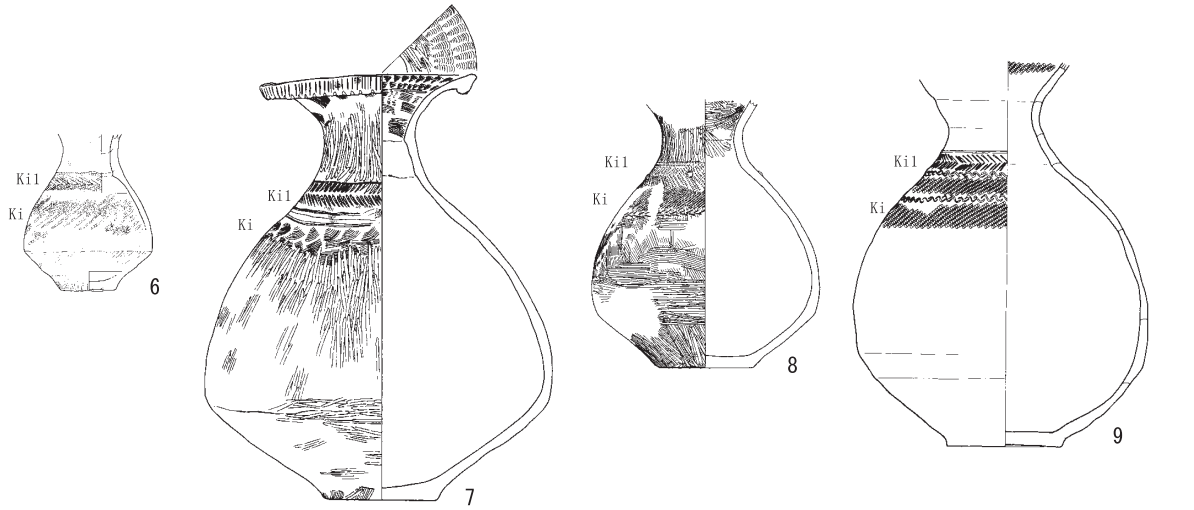
頸胴部のⅡ文様帯は一貫して肩部から始まるが、肩部装飾帯（Ki1）、胴部装飾帯（Ki）に分ける。複数個の浮文が付される場合があり、その位置はKi1とKiの境界である。

菊川式は３期（古・中・新）に大別され（中嶋1988）、その後５期（Ⅴ－１・２・３・４・５）に区分されている（篠原・山下2000、篠原2002）。菊川式の文様帯をKi1とKiに分けた場合、最古・古段階（Ⅴ１・２期）は細頸で文様が下膨れの胴部最大径付近まで広がり、Ki1にはハケ目沈線やハケ刺突等が､Kiには縄文や櫛描羽状文等が施される(第234図１～４、５･７～９)。古段階（Ⅴ２期）からはKi1だけの個体（６）も存在する。中段階（Ⅴ－３期）になるとKi1の羽状文が段数を増やして幅を広げるがKiの幅は狭くなり、Ⅱ文様帯は上方に集約される。東遠江から西駿河を中心に、下端に端末結節をもつ縄文が定着し重畳させるモミダ型（12）も現れる（篠原2001）。新・最新段階（Ⅴ－４・５期）でも重畳端末結節文が主力だが文様帯の簡略化が進み、Ki1のみ、もしくはKi1、Kiの区別がなくなる。

②　下戸塚式土器　武蔵野台地を刻む神田川右岸にある下戸塚遺跡は1987年から1988年のほぼ１年間に亘って調査され、発掘調査報告書は1996年に刊行された（市毛･車崎･松本･他1996)。弥生時代後期の遺構は後期全般に亘り、出土土器を分析した松本 完氏は、そもそも在来土器と呼びうる土器が少なくハケ刺突文(4)の隆盛や器種構成において最も類似しているのは東遠江でも菊川流域の菊川式土器としている。そして、５期区分し氏自身の甕の変遷を基準とした南関東編年（松本1993）の「Ⅰ・Ⅱ期、Ⅲ期古・新段階、Ⅳ期」に対応できるとする。菊川式の編年（中嶋1988・1991）との関係については慎重ながらも、下戸塚１期が菊川式古段階の一部と併行し、３期にハケ刺突文が消滅し端末結節が出現することから菊川式中・新段階の境を３期においた。続く４・５期は菊川式新段階に対応させ、下限は器台・坩などが出現する以前とした。「下戸塚式」の名称は用いなかったが、下戸塚遺跡の菊川式系土器は全器種にまたがる移動事例として認められ菊川流域からの人的移動が関与するとし、その一方でハケ刺突文や壺の形態に菊川式とは異なる特徴があり、赤彩率が高い点などもあげた。その後「下戸塚式土器」を提唱した齋藤瑞穂氏は、松本氏の分析について「半世紀以上襲用されてきた型式もしくは様式が、不十分であったことを露わにするだけでなく、この分野の前提であった「南関東地方」という枠組みにさえも見直しを迫った」と評価した（齋藤瑞2010 p.54)。その上で齋藤氏は、下戸塚遺跡の環濠内部のエリア出土土器に菊川式土器の影響を認めつつ、ハケ刺突文や櫛描波状文の使用率や口内帯文様（安藤：口縁部内面装飾帯）は時期が新しくなるにつれて下がる点など、菊川式の要素と久ヶ原式の要素とが複合した独自色を備えたまとまりがあるとし、「下戸塚１式」を提唱した。氏は更に環濠外部エリア出土土器を「下戸塚２式」と命名した。対象とした壺の特徴は、幅広の文様帯を備え、口内帯をもつものはほとんどなく、２ないしは３段で構成される単節縄文帯を胴部上半にもち、最下段に鋸歯文や三角文など配している。直近では、古屋紀之氏が南武蔵北部地域の後期土器に「下戸塚式」の名称を与えることに賛同している（古屋2018)。筆者も齋藤氏の「下戸塚式」の提唱に賛同し、午王山遺跡の菊川式系土器にも充てたいが、その範疇は「下戸塚１式」である。確かに、「下戸塚式」は口縁部形状に大きく外湾するものや口内帯にハケ刺突を用いるものは少なく、Ki1だけ、あるいは、Kiだけの簡素な頸胴部文様が目立つ。篠原和大氏によれば東駿河では東遠江系統の土器が著しく変容した土器群がみられ

1 12 号住　2 9 号土坑　3 7 号土坑　4・5 2 号土坑

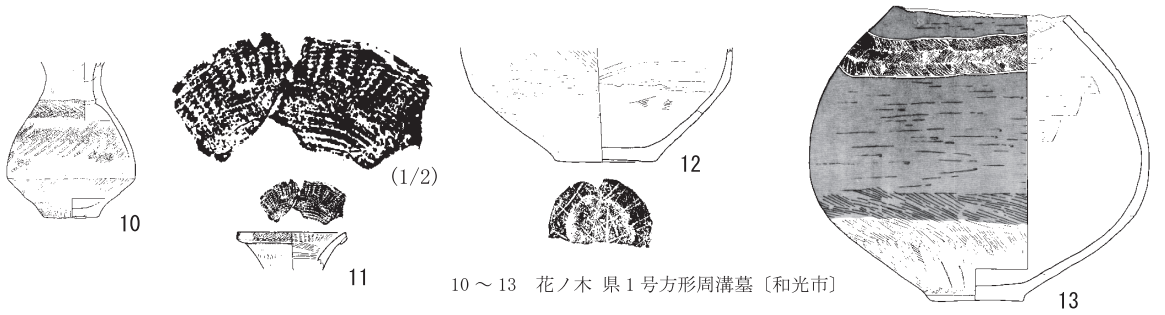
① **下戸塚遺跡　集落形成開始期の土器**（松本 1996 から転載・一部作図）



古段階（V-2） 6 花ノ木 県 1 号方形周溝墓〔和光市〕

中～新段階（V-３・4） 7 西台 1 次小型住居跡〔板橋区〕8 西台後藤田 Y43 号住〔板橋区〕 9 南通 5 号溝〔富士見市〕

② **菊川式土器の移動品又は忠実な模倣品**（石坂 1994、小林理 1995、石川・藤波・他 1999、佐々木・小出・他 1984 から転載・付加）



10 ～ 13　花ノ木 県 1 号方形周溝墓〔和光市〕

③ **下戸塚式古期**（石坂・他 1994 から転載・付加）

0　20cm

第 235 図　下戸塚式土器生成に関わる土器群

るというから、下戸塚２・３期以降は東駿河で変容した菊川式系土器との関係性を考える必要もある。これについては、後述する。そして、松本氏が下戸塚４期とした段階にも口唇がやや凹む内湾口縁や口内帯の縄文施文など菊川式の継続的な浸透が見られ、その系譜は複合口縁の拡張傾向や端末結節縄文主体の幅広一体型壺への収斂によって本郷弥生町出土の「弥生式土器第１号」に繋がっていく（安藤 2015a　pp. 384-385）。「下戸塚２式」の分別の根拠とした２帯縄文帯や鋸歯文は久ヶ原式系要素が混交する後期前半からの系統で、後期後半以降にも武蔵野台地北部の二系統の混成という伝統が継承されたものであり、「弥生町式」の

主要な構成要素なのである[5]。従って、下戸塚２式を採ることは賛同しがたい。

次に、「下戸塚式」の開始時期についてである。松本氏は下戸塚遺跡の１期とした土器について菊川式古段階の一部と併行する可能性があるとしているが（松本 1996　p. 622)、「下戸塚式」の開始時期が後期初頭まで遡るとは言い切ってはいない。第 235 図①は下戸塚遺跡の環濠集落形成開始期の土器の一部で、12 号住出土の壺大型破片（１）には胴部に数段のハケ羽状文が施されている。ハケ羽状文は最古段階（菊川式Ⅴ－１様式）から古段階（菊川式Ⅴ－２様式）まで認められ（第 234 図３・７・９)、肩部から胴下位の稜部付近まで占められる。単口縁の壺（第 235 図２）は口唇端部が明瞭に肥厚し、口唇面 (a) と内面 (b) をハケ刺突文で加飾する。ハケ甕（３）は口唇端部に明瞭な平坦面があり下方から刻みを入れるもので、折返し口縁の甕（４）も端面に粗いハケ調整を行う。以上は、菊川式に忠実な古式の様相をもつが、相模では菊川式最古段階（共伴土器との時間的位置づけも矛盾しない）の土器群（第 232 図②）が出土しており、それと比較しても下戸塚遺跡や周辺の遺跡ではⅤ－１式（最古段階）のものは見いだせない。久ヶ原式の単口縁壺（第 235 図①５）は、口縁部に沈線区画された羽状縄文帯をもち赤彩されている。ただし、本類は久ヶ原Ⅱ式になっても残り、５が久ヶ原Ⅰ式だとしても最古段階までいくとは言い切れない。現時点では下戸塚式の初現は後期初頭には至らず、後期前半でも古段階に留めておくのが妥当と思われる。下戸塚式の主体（下戸塚１期から３期）は菊川式古段階（Ⅴ－２様式）から中段階（Ⅴ－３様式）にあり、一部は新段階（Ⅴ－４様式）にかかる可能性があり、端末結節縄文が文様の主体となり胴部上半幅広一帯型が作出される「弥生町式」の直前までを充てることが妥当と考える。

次節では、午王山遺跡とその周辺域の下戸塚式土器について編年し、環濠集落の形成と廃絶にかかる時間軸の設定を行いたい。

３　午王山遺跡とその周辺域の下戸塚式土器

菊川式土器の遠来から下戸塚式土器の生成後、下戸塚式は主に武蔵野台地北方域の小河川沿いに拡大していく。出井川・蓮根川・前谷津川流域では板橋区／西台、西台後藤田、四葉地区などの遺跡があり、白子川・越戸川・黒目川流域では和光市／吹上、四ツ木、午王山、花ノ木、上之郷、朝霞市／稲荷山・郷戸、向山、中道・岡台などの遺跡があり、更に、富士見市／南通遺跡、東台遺跡など柳瀬川流域に達する。花ノ木、西台、西台後藤田、南通などの遺跡では、Ki1-Ki、a・b の基本構造が崩れていない菊川式の移動品ないしは忠実な模倣品と考えられる土器が出土している（第 235 図②)。これらは菊川式古段階から中～新段階のもので、後続して新・最新段階のものも確認できるから（中嶋 1991、比田井 1991、松本 1991)、彼我との交流は継続的であり、変容し、文様は簡素化しても、東海系の要素は在地化して埋没してしまうことなく型式的な情報更新がなされ土師器形成へと繋がっていった。

午王山遺跡では住居跡の重複が激しく一括出土土器に良好なものが少なかったが、宮ノ台式と岩鼻式を除いた住居跡から比較的良好な資料を選別し、住居間の複合関係から新古を割り出した。更に、環濠がほぼ埋没した溝上部分に貼り床し構築した住居の土器群、環濠内で中層から上層にかけてまとまりのある土器群を対象に型式学的検討を行った。また、欠失している資料等を補うため近隣遺跡の資料も用いた。その結果、午王山遺跡とその周辺におけ

る下戸塚式土器の編年は、大きく古・中・新の３期区分が可能であった（下戸塚遺跡１・２・３期とは必ずしも合致させていない)。ただし、細分した同一時期住居間でも重複しているものがあり、時期を明らかにできない住居跡も少なくないから単一時期の同時存在を割り出すことは困難である。

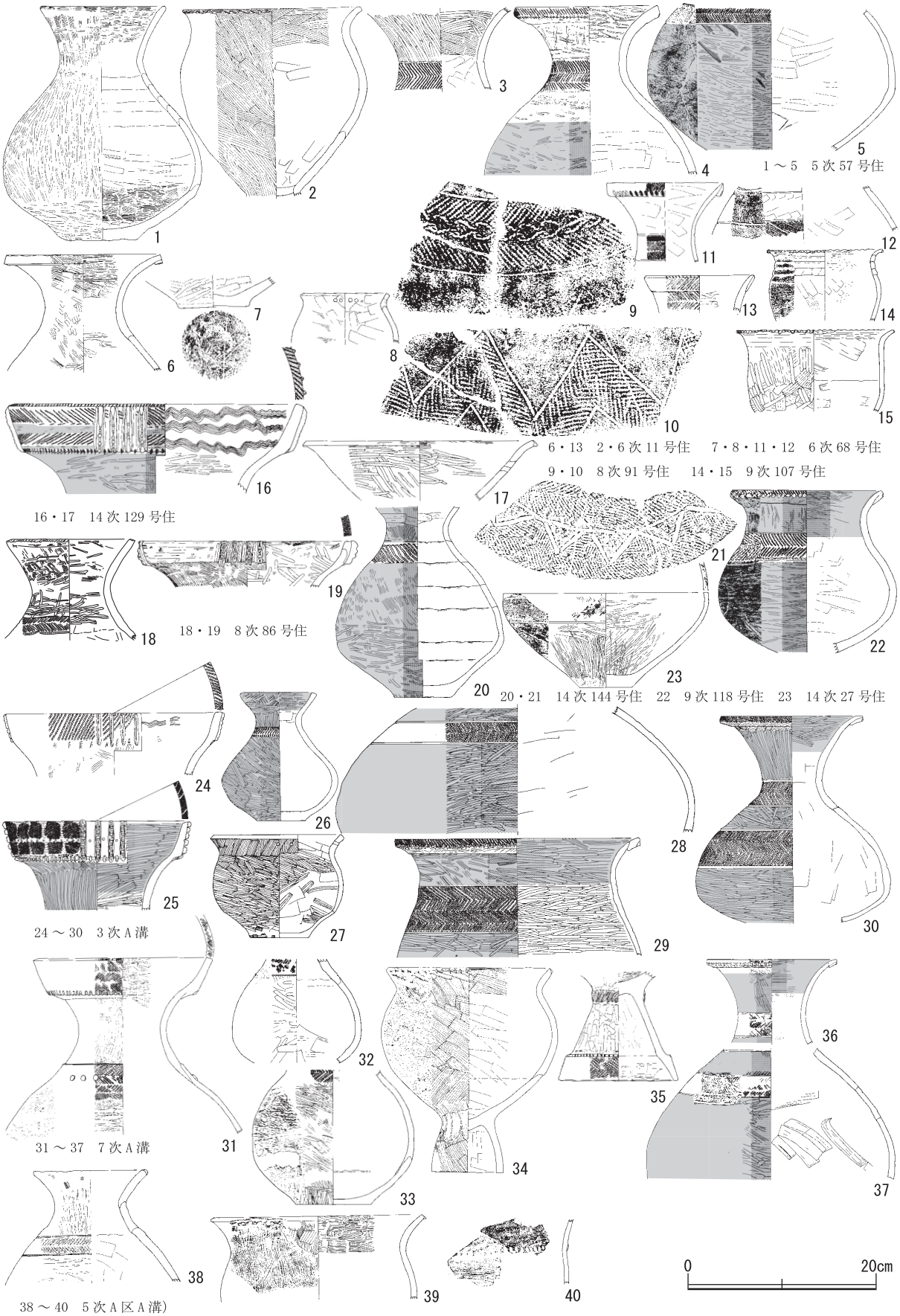
①　下戸塚式古期　下戸塚式の北方への拡大による進出集落群のうち、現時点で最も古く遡るものは花ノ木遺跡（石坂・他 1994）であり、午王山遺跡における環濠集落開始期以前である。花ノ木遺跡は環濠集落であるが、環濠外の第１号方形周溝墓から出土した土器が該当する（第 235 図③ 10 ～ 13)。10 の小型壺は、胴部下位に稜をもち、ハケ目沈線とハケ刺突文で Ki1 を、稜付近まで幅広く LR 縄文を施して Ki を構成する（第 237 図１)。口縁部は不明であるが、頸胴部は成形・整形・施文において菊川式土器に忠実であり、菊川式古段階の様相を残す。11 は小型壺の口縁部で口唇端部（ａ）に縄文、口内帯（ｂ）にハケ刺突文を施す。ただし、この口縁部は大きく外湾しない点は忠実な模倣品とは言えず変容が見られる。12 は壺下半部で、底面は中央が凹み外周に薄い粘土帯が巡る輪台風の底面で、菊川式の特徴を示す。13 は久ヶ原式の壺で、肩部に羽状縄文帯を沈線区画した文様帯があり、器面は赤彩されている。おそらく頸部にも沈線区画羽状縄文帯がある２帯型の久ヶ原Ⅰ式新期で、最初から菊川式系と久ヶ原式系の混成であることを示す。午王山遺跡では１期を欠いており、白子川・越戸川流域への進入時期が岩鼻式３期の集落存続期間中か撤退した直後かは不明だが、花ノ木遺跡開始期は岩鼻式３期 / 久ヶ原Ⅰ式新期併行に収まると考えたい。

②　下戸塚式中期　午王山遺跡の環濠集落造営期であり、住居は激しく重複する。土器からは中・古期と中・新期とに分けられ、環濠集落の形成は中・古期に開始される。しかし、環濠内出土土器でもＡ溝では中・古期に比定できる土器がまとまって出土する箇所（３次・７次Ａ溝域と５次Ａ区Ａ溝域）がある。このことは、早い段階での埋没開始と溝中投棄が行われたことを示している。

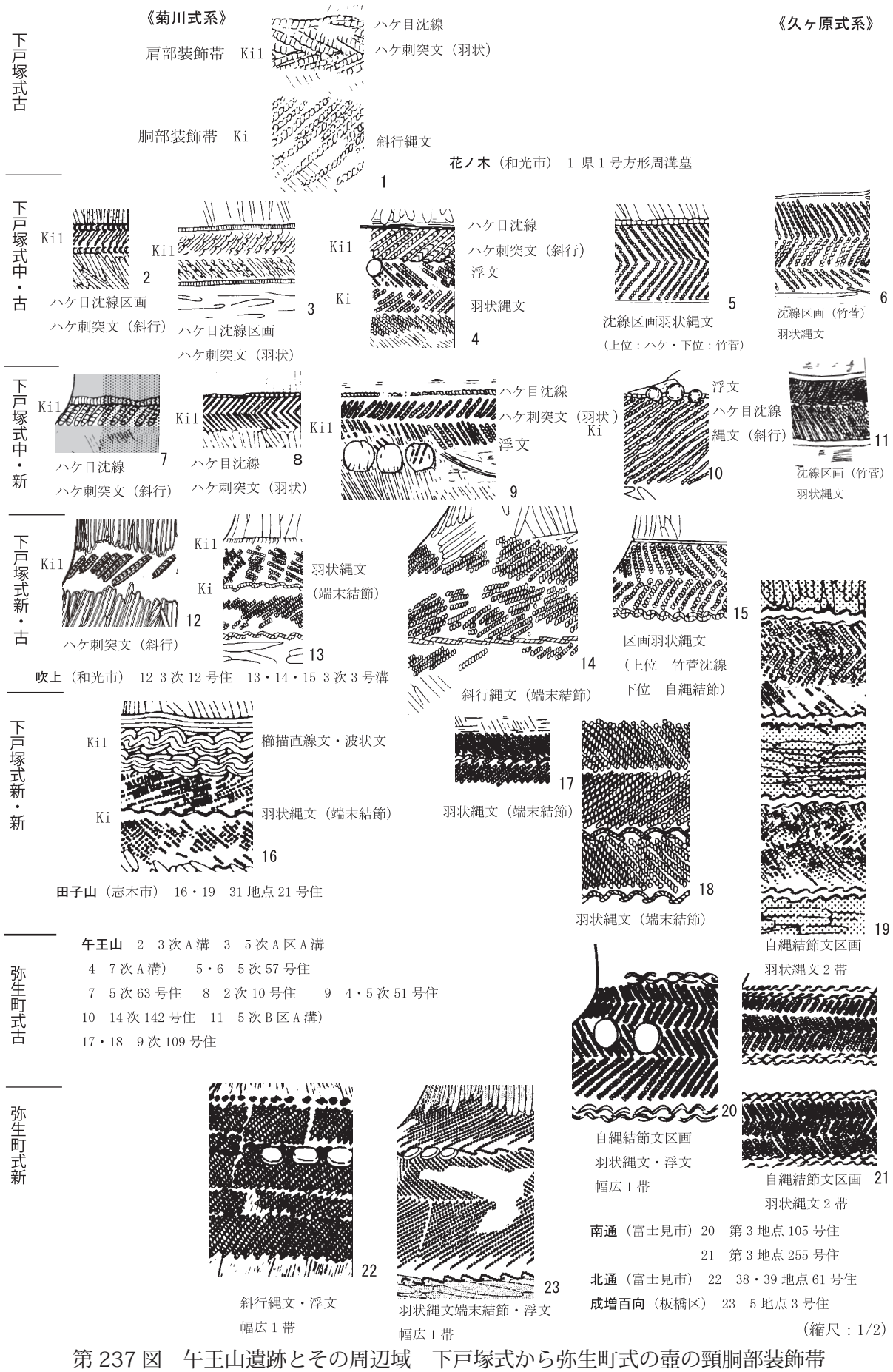
ａ．中・古期　器種は、壺・広口壺・無頸壺・甕・鉢・高坏からなる。先述の３次Ａ溝、７次Ａ溝、５次Ａ区Ａ溝出土資料にまとまりがあり、住居跡では 11・24・57・68・86・91・107・118・129・144 号住等の床直出土資料があげられる。近隣の吹上遺跡３次 26 号住出土土器（第 239 図②）は午王山遺跡の欠を補う良好なセット関係を示す（鈴木_2003)。

壺　口縁部形態には、複合口縁、折返し状口縁、単口縁がある。

菊川式系の複合口縁は、複合部下端の突出は目立たたず受口状の形態が保たれており、口縁部内面櫛描波状文が施されたもの (第 236 図 16・24) が、午王山遺跡における初現期の特徴をよく示す。棒状浮文がない受口状幅広複合口縁（第 236 図 31）は、その口縁部形状が菊川式古段階（Ⅴ－２）に位置づけられている十二所遺跡出土土器（第 239 図１）に祖型が求められようか。31 はⅡ文様帯が分かる数少ない事例でもあり（第 237 図４)、胴肩部に突帯の名残のような稜があってⅡ文様帯の始点となり、ハケ刺突文の Ki1 とその下部の Ki は RL-LR-RL の羽状縄文帯であり、中間点の円形浮文が両者を画する。このⅡ文様帯は第 237 図１に比し幅狭く胴肩部にまとまっているから菊川式中段階（Ⅴ－３）以降であることは明らかで、下戸塚式中・古の時間的位置づけの目安となる。一方、幅広で棒状浮文が付されたものも菊川式に系譜があるようであるが、午王山遺跡の複合口縁部に羽状縄文が施されたも



第 236 図　午王山遺跡　下戸塚式中・古期の土器



第 237 図　午王山遺跡とその周辺域　下戸塚式から弥生町式の壺の頸胴部装飾帯

の（第 236 図 25、第 239 図①４）や無文のもの（第 236 図 19）などは駿河の壺に特徴的な複合口縁（第 239 図２・３）との関係性も無視できない。菊川式系の底部形態は、輪台風の底面を有するものが古期から継承されている（第 236 図７）。

菊川式の折返し状口縁壺の口縁部形態は四角形状で大きく外湾し内外面を装飾するのが特徴で（第 234 図）、武蔵野台地北部でも西台遺跡１次小型住居跡出土壺（第 235 図７）が近い。しかし、午王山遺跡ではそのような事例が稀で、四角形状の口縁部を有する壺（第 236 図６）も大きく開くが外湾するとは言えず、口縁外面や口内帯に装飾がなくⅡ文様帯もない。単口縁の壺（第 236 図 18）は口唇端部に平坦面を有しやや内傾して菊川式系の特徴を示すが、折返し状口縁壺と単口縁壺はⅡ文様帯が Ki1 のみで Ki がないものがほとんどである。ハケ刺突文による斜行文は単斜と羽状をなすものがあるが、上下をハケ目沈線で区画されて独立した文様帯をなす（第 236 図 26・32・38、第 237 図２・３）。Ki1 のみで上下ハケ沈線区画されたものは菊川式にも早くからあり（第 234 図６）、省略とするよりは完結した文様とみるべきかもしれない。あるいは、後述する東駿河の菊川式系土器との関係性も考える必要があり、Ki1 のみの構成を在地化と表現するだけで片付けるべきではない。

久ヶ原式系では、古期の花ノ木遺跡出土壺（第 235 図 13）の系統を引く、一帯ないしは二帯の沈線区画羽状縄文帯を有する折返し状口縁赤彩壺の存在が目立つ。57 号住（第 236 図５）、68 号住（11・12）、３次Ａ溝（28・30）、７次Ａ溝の壺（36・37）などがあげられる。久ヶ原式系の壺でも山形文などが少ないのに比して沈線区画された帯縄文の卓越は、松本　完氏も指摘しており、久ヶ原式とは異なる在来の壺として「午王山式」と仮称することも一方法としている（松本 2007 p. 285・p. 289 註 21）。しかし、沈線区画帯縄文壺は岩鼻式に伴う久ヶ原式に系譜がある久ヶ原式系であることは確かであって、下戸塚式の構成要素として加えておきたい。また、少ないとは言え山形文を始めとする久ヶ原式は伴出しており、交差編年の目安になる。91 号住出土の山形文片（第 236 図９・10）は横帯羽状縄文中に自縄結節文が２条施され、山形文は横帯文に近接し頂点間が狭まっており、総じて沈線は細くなっている。21 は横帯縄文帯に接して上向き鋸歯文区画縄文帯からなっており、９・10・21 の特徴は久ヶ原Ⅱ式古段階に位置づけられる文様構成である。

なお、羽状縄文帯壺でもその区画に、上位がハケ目沈線、下位が竹管によるものがあり（第 236 図３、第 237 図５）があり、菊川式系と久ヶ原式系との折衷型と見られる。長めの原体による斜行縄文で端末結節のない壺（第 236 図 20）は、菊川式系であろうが、赤彩されている。赤彩は、久ヶ原式系は高坏・鉢も含めて総じて施されているが、菊川式系でも 16・25・26 は赤彩されており、下戸塚遺跡では赤彩率が高いとする松本 完氏の指摘（松本 1996 p. 623）が午王山遺跡でも当てはまる。

甕　ハケ台付甕が主流を占めるようになるのが、菊川式系の進出による最も大きな変化である。台付甕は口縁部が屈曲度のある頸部から短く開き胴部最大径がやや上方にある形状で、口唇端部をハケ整形具で面取し下方から刻みを入れるのが特徴である（第 236 図 2・34）。その一方で、久ヶ原式系のナデ甕も伴い（第 236 図 14・15・40）、後続していく。14 は輪積み痕を明瞭に残すが、胴部にハケ整形が垣間見え、15 はナデ整形とヘラミガキだが、輪積み痕は痕跡化し器形も口縁部に最大径があり胴部が張らない。40 は一段の輪積み痕上に刻

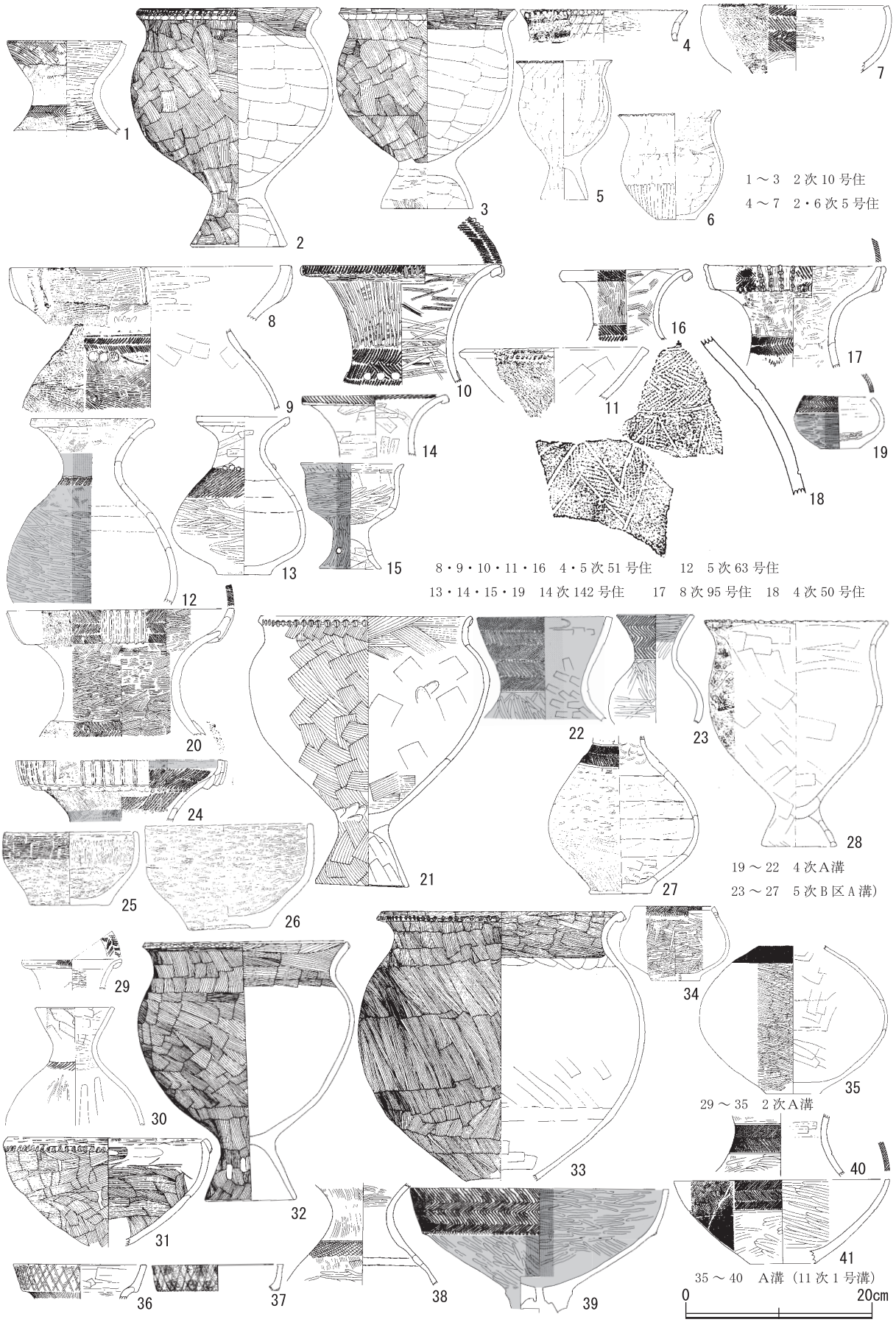
みを施す甕で、輪積み部はナデ甕だが胴部にハケ整形痕が見られる。

広口壺・無頸壺・鉢・高坏　いずれも菊川式系と久ヶ原式系の両者がある。菊川式系の広口壺・無頸壺（第 236 図８・27）は、いずれもハケ整形痕を残す無文土器で赤彩されない。鉢（第 239 図 16）は口辺部と体部間に稜を有し、内外ともにヘラミガキされている。高坏は良好な資料は少ないが、坏部だけの 17 は外方に開くが菊川式のように鍔状にはなりきれていない。一方、脚部（35）は菊川式に忠実で、接合部の薄い突帯にハケ刺突で刻みを施し、裾は鍵状に開き羽状縄文を施す。久ヶ原式系は精製土器で、折返し口縁部に縄文施文し刻みが入り、頸胴部に一帯の沈線区画羽状縄文帯が配され赤彩された広口壺（第 236 図 22)、27 号住出土の鉢(第236図23)も口縁部に沈線区画の羽状縄文帯がある。９号住出土高坏破片(第 30 図⑥）もそうで、吹上遺跡３次 41 号住出土高坏（第 240 図４）が坏部の形状が分かる事例であり、壺と同様に、沈線区画羽状縄文帯の存在が際立つ。

ｂ．中・新期　環濠では、第２次Ａ溝東側、第４次Ａ溝・第５次Ｂ区Ａ溝・11 次Ａ溝出土土器が中・古期よりも新しい様相でまとまっており、環濠埋没が進んだ時期は中・新期のようである。そして、西側（４次、５次Ｂ区）ではＡ・Ｂ溝上に住居も構築されるようになる。Ａ・Ｂ溝上に構築された 30・50・51・52・63 号住出土土器や、複合関係で新しく位置づけられる住居跡出土土器であっても菊川式系の要素を色濃く残す５・10・95・142 号住居跡等出土土器を該当させた（第 238 図)。

壺　複合口縁壺は内湾度が強まるが、下端への突出はまだ見られず、肩部の稜が残るもの（第 238 図 20）や、棒状浮文をもたない中型複合口縁壺には竹管斜格子目文があり（36・37)、37 には円形朱文がある。竹菅斜格子目文は菊川式Ⅴ－３・４期（第 234 図 15）にあり、その採用には新たな関係性継続が窺える。折返し状口縁は口縁端部の面取が残り（12・13・14・29)、やや丸みが増しているとはいえ下部に重心がある形状は健在である（13)。折返し状口縁の口内帯にはハケ刺突文はほとんど見られず、あっても斜行縄文（14）や羽状縄文（29）である。単口縁（１・30）は、口唇端部に平坦面をもつ点は変わりないが、明瞭に内湾するか（１)、内湾気味（30）である。文様は Ki1 だけで Ki が省略された簡素なものとなり、１・12（第 237 図７)・30・38 はハケ目沈線の上位区画と刺突による斜行文であり、第 237 図８は羽状文である。第 238 図９（第 237 図 9）は Ki1 と Ki の境界となるべき部分に円形浮文が配されているが、KI が省略されたため結果としての最下端の位置となっている。一方、13（第 237 図 10）は Ki1 が省略され Ki が長い原体の斜行縄文帯を構成するもので、ハケ目沈線と円形浮文は最上位にある。中・古期が Ki1 だけでもあっても上下を沈線区画して完結した文様帯が多いのに対し、中・新期が省略したままのものが多い点に新旧関係を考えたい。10 は口内帯に原体の短い斜行縄文で頸胴部の羽状縄文も同様で駿河系と見られ、菊川式系でも東駿河の菊川式系の新たな波及があったことや、13 が出土した午王山 142 号住では変形ながらワイングラス型高坏が伴出しており（第 238 図 15)、新期以降出土事例が増える西遠江以西との交流拡大も視野に入れる必要がある。

久ヶ原式系の壺は良好な資料はないが、沈線区画された帯縄文壺には複合口縁壺（第 238 図 17）がある。本来、久ヶ原式の壺は折返し口縁が基本であり 16 がそうであるが、複合口縁の採用は、その形態が菊川式系と同様の受け口状口縁部形態であることから両者の融合と



第238図　午王山遺跡　下戸塚式中・新期の土器

も取れる。16・17・40 は頸部文様帯の位置から二帯型になる可能性があり、中・古段階から継続して存在感がある。一帯型の事例としては 27(第 237 図 11)や 35 がある。大型破片 (18) は沈線区画横帯縄文帯の下部山形文は形が崩れ幅も狭く単斜方向（LR）であり、同様の特徴をもつ久ヶ原式を安藤編年では久ヶ原Ⅱ式古段階に留めている。しかし、第 236 図９・10 よりは新しいことは間違いなく、本稿では久ヶ原２式新段階としておく。単口縁で口辺部に下部を沈線区画する羽状縄文帯を有する壺（22・23）は、久ヶ原１式（第 233 図 15）からの系統であるが、口縁部が内湾している 22 は、先述の菊川式系の壺（１）と同調した新しい要素である。

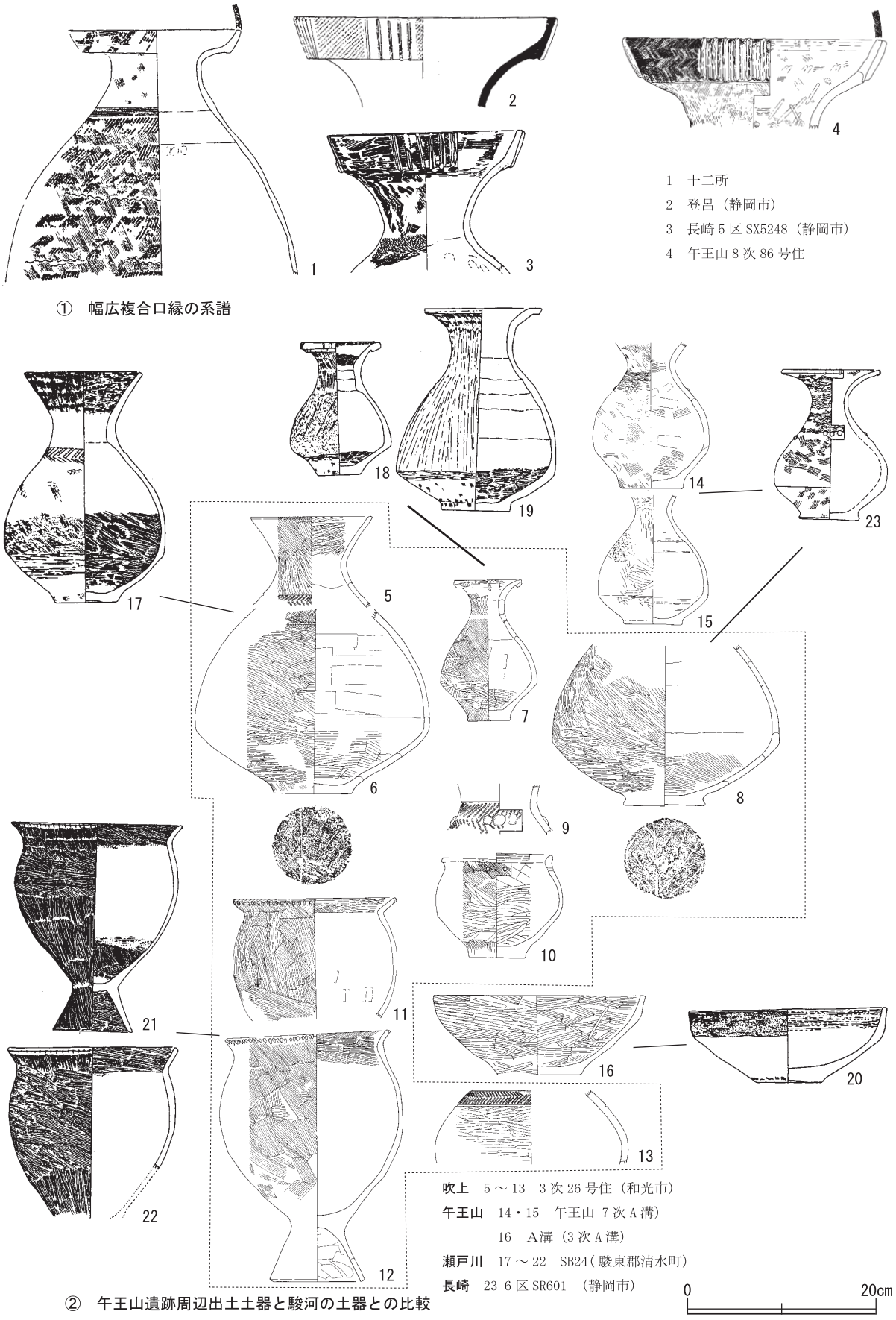
甕　ハケ台付甕（第 238 図２・３・21・32・33）は、口唇部にハケ整形具による面取があり下方から刻みを加える技法は継承され、２・33 の折返し段があるような口縁部は東遠江東部からの交流継続を示す資料である。中・古期に比して頸部の反りがやや曲線化し、胴肩部の張りや胴部中位の円形度が増すのが新しい要素である。ナデ甕は台付甕（５・28）と平底（６）があるが、台付甕は輪積み痕が見られず、平底には一段の輪積み痕跡が残っている。

広口壺・無頸壺・鉢・高坏　菊川式系と久ヶ原式系との組み合わせからなるが、菊川式系は粗製な鉢・高坏、久ヶ原式系は装飾性があり赤彩された精製の無頸壺・鉢・高坏である点は、中・古期から継続する。

粗製鉢（第 238 図 25・26）は、いずれも体部下半との境に稜をもち、底面は周囲に薄い粘土帯があり中央部が凹んでいるものが多い。菊川式の鉢に忠実であり、相互交流の継続更新が確認できる。ハケ整形痕を明瞭に残す高坏には二種があり、鉢状の坏部を有し口唇端部へのハケ整形具による面取・下方からの刻みを有するもの（11）と折返し口縁で下端に刻みを有し内湾し深みがあるもの（31）とがある。前者は、菊川式系甕の口縁部とツクリが同一である。久ヶ原式系はいずれも口縁部・口辺部に縄文帯を有するもので、無頸壺（第 238 図 34）は折返し口縁で下端に刻みを有し、小型無頸壺（19）は単口縁で羽状縄文帯の下位を沈線区画している。鉢 (41) は単口縁が開き、羽状縄文帯の下位が沈線区画される。沈線区画横帯縄文は壺と同様に顕著である。11 次Ａ溝出土の高坏（39）は薄く幅広の粘土帯を貼付して口縁部とし、羽状縄文を施し下位に刻みを施している。縄文帯には円形朱文の点列を３列配している。11 次Ａ溝には、先述したように複合口縁壺（37）にも円形朱文が施されているものもあり中・古期には確認できないから、その採用は中・新期の可能性がある。

ｃ．下戸塚式中期と駿河との関係性　先に午王山遺跡の複合口縁壺の口縁部形態や羽状縄文施文・棒状浮文について駿河との関係性について触れたが、午王山遺跡７次Ａ溝からは登呂式土器の小型壺が２点（第 239 図② 14・15）出土している。和光市 / 吹上遺跡３次 26 号住出土土器群（第 239 図② 5 ～ 13）は、東駿河の菊川式系土器群と対比してみると共通する点が少なくない。３次 26 号住は、菊川式系のハケ整形痕が明瞭な無頸壺（10）に久ヶ原式系の沈線区画羽状縄文帯壺（13）が伴い、下戸塚式中・古期に位置づけられる。

篠原和大氏によれば、東駿河でも黄瀬川扇状地に位置する瀬戸川遺跡では、東遠江系統の著しく変容した土器群がみられるという（篠原 2002 p.692)。吹上３次 26 号住出土の壺（５）は、Ki1（ハケ目沈線・ハケ刺突羽状文）のみの瀬戸川 SB24 出土の単口縁壺（17）に、吹上３次 26 号住出土の小形壺（７）は折返し口縁でハケ整形だけの簡素な小型壺（18）に近い。



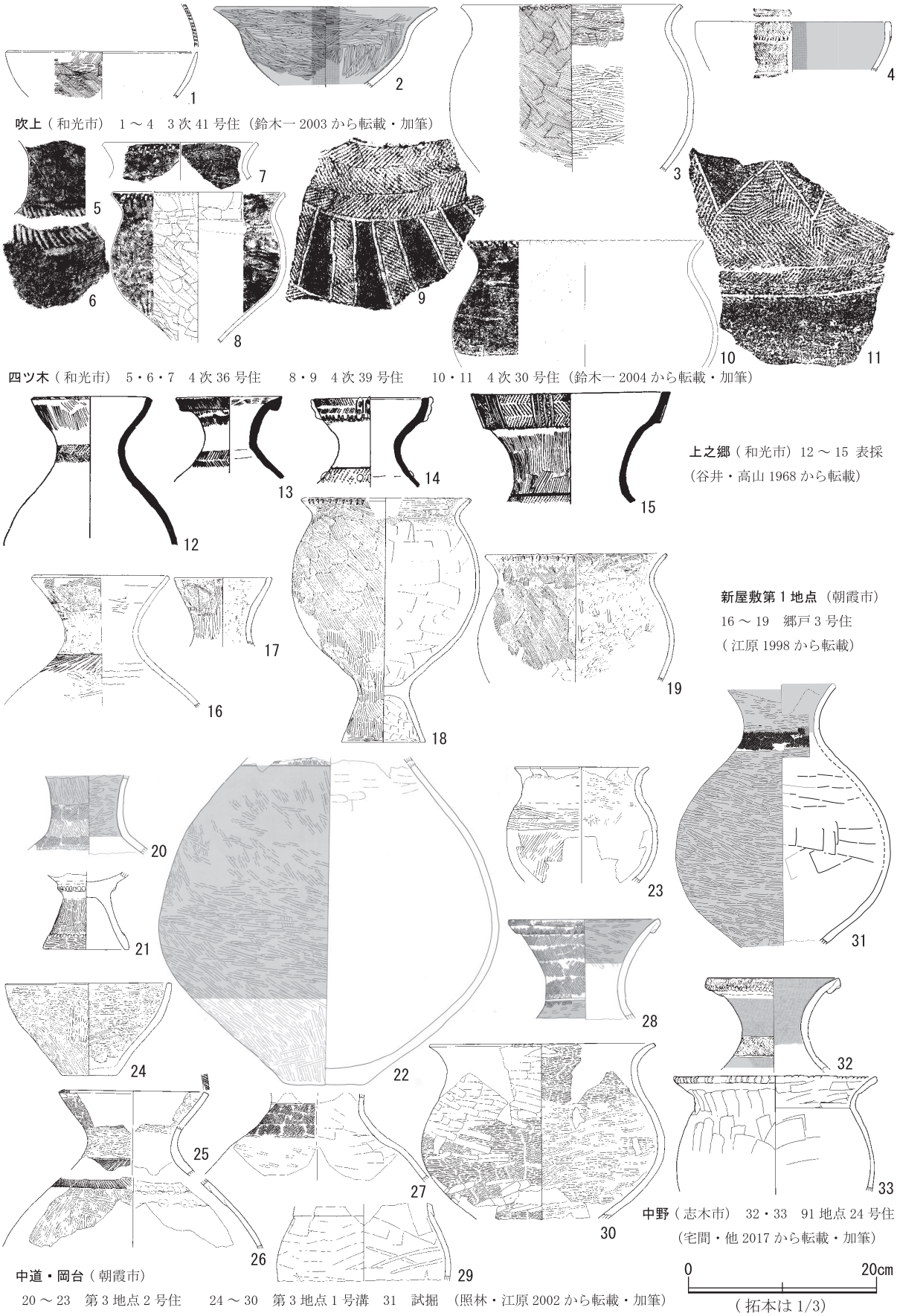
第 239 図　下戸塚式中・古期の土器と駿河の土器との比較（鈴木一 2003、篠原・山下 2000 から転載・作図）

大型壺（８）の裾が突き出た底部形態も駿河に特徴的で、その底面形態はハケ羽状刺突をハケ目沈線で区画した大型壺（６）と同様の輪台風である。菊川式系ハケ台付甕（11・12）の屈曲頸部から短く外反し、最大径が上位にある胴部形態も、瀬戸川遺跡の台付甕（21・22）に近似する。因みに、午王山３次Ａ溝出土の浅鉢（第 239 図 16）は口縁部が直立する瀬戸川遺跡の鉢（20）に近い。武蔵野台地の下戸塚式中段階以降の大きく外湾しない折返し状口縁や簡素化された装飾帯をもつ菊川式系土器は、東駿河の変容した土器群からもたらされた可能性があり、菊川式系と言ってもその発信地の特定が今後検討課題になってこよう。

ｄ．周辺の下戸塚式中期の土器　午王山遺跡近隣において、下戸塚式中期の遺跡が近年の調査によって増加しつつある（第 240 図）。下戸塚式が容認されるためには、その広がりが把握される必要があるが、弥生時代後期の白子川周辺の土器に東海東部地方の影響が濃厚な点を最初に指摘したのは、谷井　彪氏と高山清司氏である。両氏は、昭和 40 年代の前半に和光市内（旧・大和町）の宅地造成や農地転用などで出土した土器を実測・報告し（谷井・高山 1968）、上之郷遺跡や午王山遺跡の出土土器を紹介した。後者については、本書でも再実測したものが掲載されており（23 頁第７図）、ここでは上之郷遺跡の一部を再録する（第 240 図 12 ～ 15）。12・13 は頸胴部の装飾にハケ刺突羽状文を施しているもので、いずれも上位のみをハケ目沈線で区画している。12 は単口縁壺で内湾し口唇部に平坦面がある。複合口縁壺（15）は複合部が下位に突出しない受け口状であり、頸部縄文帯は沈線区画である。以上の諸特徴から、下戸塚式中・新期に位置づけられる。上之郷遺跡は越戸川流域にあり、花ノ木遺跡を調査・報告した石坂俊郎氏によって花ノ木遺跡と一体の環濠集落と解釈されている。花ノ木遺跡の環濠集落は下戸塚式古期から中期に（あるいは新期にまで）継続しているようであり、石坂氏による土器の分析もある（石坂・他 1994）。また、篠原和大氏も第１号環濠資料を検討しているので（篠原 2009）、それらに譲りたい。以下は、現時点における下戸塚式中期の北限域を示す土器群を、南から白子川、越戸川、黒目川、柳瀬川流域の順に紹介する。

白子川左岸の環濠集落である和光市 / 吹上遺跡３次 26 号住出土土器（第 239 図②５～ 13）が下戸塚式中・古期の良好な事例であることは先述したが、３次 41 号住出土土器（第 240 図１～４）は 26 号住にはない高坏がまとまっている。いずれも脚部を欠くが、ハケ整形で口唇部にハケ刺突の刻みがある粗製高坏（１）とヘラミガキと赤彩の精製高坏（２）は駿河も含めた東海東部系で（変形しているが）、久ヶ原Ⅱ式古の高坏（４）が伴う。10 は、口唇端部が面取され下方からの刻みがある菊川式系ハケ甕である。下戸塚式中・古期に位置づけたい。

和光市 / 四ツ木遺跡は越戸川流域にあり、４次 30 号住出土の甕（10）は口唇部交互押捺で輪積み痕が全く見られないナデ甕だが、久ヶ原Ⅱ式古の壺大型破片（11）が伴っている（鈴木一 2004）。36 号住では上位のみのハケ目沈線区画でハケ刺突羽状文の壺破片（５・６）に口唇端部面を整形し下方から刺突する菊川式系のハケ甕（７）が伴っており、下戸塚式中・新期と見る。39 号住ではハケ甕（８）に縦区画文壺（９）が出土している。縦区画文壺は古屋紀之氏が仮称田端道灌山式として狭義の弥生町式と対比させているが（古屋 2018）、本例は久ヶ原Ⅱ式併行であり、それ以前と見られる。縦区画文壺の位置づけについては、系統



吹上（和光市）　1 ～ 4　3 次 41 号住（鈴木一 2003 から転載・加筆）

四ツ木（和光市）　5・6・7　4 次 36 号住　　8・9　4 次 39 号住　　10・11　4 次 30 号住（鈴木一 2004 から転載・加筆）

上之郷（和光市）12 ～ 15 表採
（谷井・高山 1968 から転載）

新屋敷第 1 地点（朝霞市）
16 ～ 19　郷戸 3 号住
（江原 1998 から転載）

中野（志木市）　32・33　91 地点 24 号住
（宅間・他 2017 から転載・加筆）

中道・岡台（朝霞市）
20 ～ 23　第 3 地点 2 号住　　24 ～ 30　第 3 地点 1 号溝　31　試掘　（照林・江原 2002 から転載・加筆）

（拓本は 1/3）

第 240 図　近隣遺跡の下戸塚式中期ないしは併行期の土器

関係とその広がり、あるいは下戸塚式との関係性把握にもう少し時間をかける必要がある。四ツ木遺跡の下戸塚式は、中・古期から中・新期にまたがると見ておきたい。

朝霞市／新屋敷遺跡第１地点（郷戸遺跡）は越戸川左岸にあって、右岸側の上之郷遺跡に対峙する。1968 年に発掘調査された３号住出土土器が、江原　順氏によって再検討されている（江原 1998)。16 は壺で、ハケ目沈線下にハケ刺突斜行文が巡る Ki1 だけの構成である。17 は口唇部が面取される内湾気味の口縁部であり、17 と同様の肩部装飾帯があってもおかしくはない。18・19 の台付ハケ甕は口唇端部の面取と下方からの刻みが観察できるが、胴部の円形度が増して最大径が中位に移行している。下戸塚式中・新期に位置づけたい。

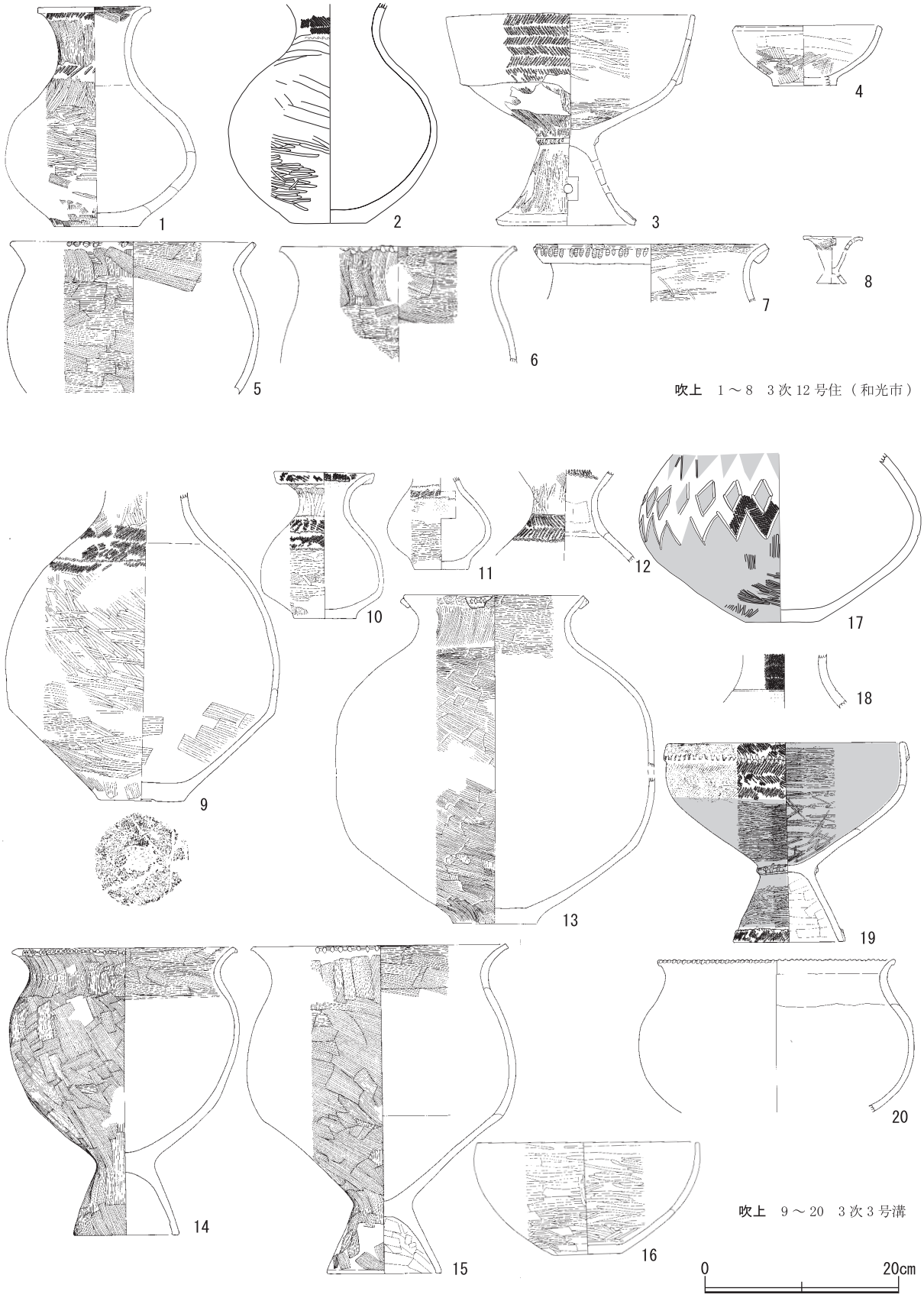
朝霞市／中道・岡台遺跡は黒目川右岸の環濠集落で（照林・江原・他 2012)、部分的にしか調査されていないが第３地点２号住、１号溝（環濠)、試掘地点（方形周溝墓）が菊川式系と久ヶ原式系からなっている（20 ～ 31)。菊川式系では、羽状縄文帯がハケ目沈線で区画されている壺（20)、平縁で口唇部にハケ刺突の刻みがある内湾気味口縁でハケ刺突羽状文の上位をハケ目沈線で区画する壺（25・26）と鉢（24）が菊川式系で、ハケ整形痕が明瞭な高坏脚部（21）もその可能性がある。久ヶ原式系は一帯型沈線区画羽状縄文壺が目立っており（22・27・31)、22・31 は赤彩されている。甕は、輪積み痕跡を残すもの（23）や残さないもの（30）も胴部のハケ整形痕が明瞭である。輪積み痕が１段残る甕（29）はナデ甕だが、午王山５号住出土甕（第 238 図６）のような平底かもしれない。２号住は下戸塚中・古期、１号溝は中・新期だが 23 のような古い様相をもつものも混じているようである。

志木市／中野遺跡は柳瀬川右岸にあるが（宅間・他 2017)、91 地点 21 号住から久ヶ原Ⅱ式の壺（32）が出土している。分厚い折返し状口縁で、頸部に沈線区画羽状縄文帯があり、赤彩されている。伴出したハケ甕（33）は口縁部のツクリが菊川式系とは言い切れない。現時点では、下戸塚式中期の菊川式系土器は柳瀬川流域では希薄であり、広がるのは次期まで待たねばならないとすれば、黒目川が下戸塚式中期における北限となるかもしれない。

④　下戸塚式新期　壺における端末結節文の盛行をもって画期とするもので、ハケ刺突やハケ目沈線が残る古期とそれがなくなる新期とに分けられる。環濠埋没後の新期には、数軒の小集落が営まれていたようであり、新・新期をもって午王山遺跡における弥生時代の集落造営は終焉を迎える。

ａ．新・古期　午王山遺跡では良好な資料に乏しいので、和光市／吹上遺跡３次 12 号住、３次３号溝出土土器（鈴木_2003）などを用いて記述する（第 241 図)。

壺　ハケ刺突文やハケ目沈線が残るが、簡略化がより進み端末結節文の存在感が顕著である。第 241 図 1 はハケ刺突斜行文を巡らしただけであり（第 237 図 12)、11 はハケ刺突斜行文を上下ハケ沈線で区画しているが、いずれも乱れが顕著である。10 は上位ハケ目沈線に端末結節羽状縄文（第 237 図 13)、２はハケ目沈線がなく斜行縄文の端末結節、９もハケ目沈線がなく斜行縄文の端末結節で幅広横位縄文帯（第 237 図 14）を構成する。９は下半部に稜があり、底面中央が凹む特徴は継承している。篠原和大氏は長い縄文原体と端末結節文を特徴とする菊川式をモミダ型と呼称しており（篠原 2001)、標識となる藤枝市／上藪田モミダ遺跡は志太平野にあって駿河に属する。Ki1 と Ki を保持するもの（第 234 図 12）に忠実な土器は、武蔵野台地東北縁一帯では板橋区／西台後藤田遺跡 Y43 号住（第 235 図８）や



（鈴木一 2003 から転載・一部加筆）

第 241 図　下戸塚式新・古期の土器

富士見市 / 南通５号溝（第 235 図９）で出土しており、第 241 図 9 は Ki だけの第 234 図 13 に忠実であると言える。駿河以東の菊川式系の波状的な流入がこの段階でもあったことが確認でき、南通５号溝出土事例はその北限が柳瀬川流域にまで及んだことを示す。

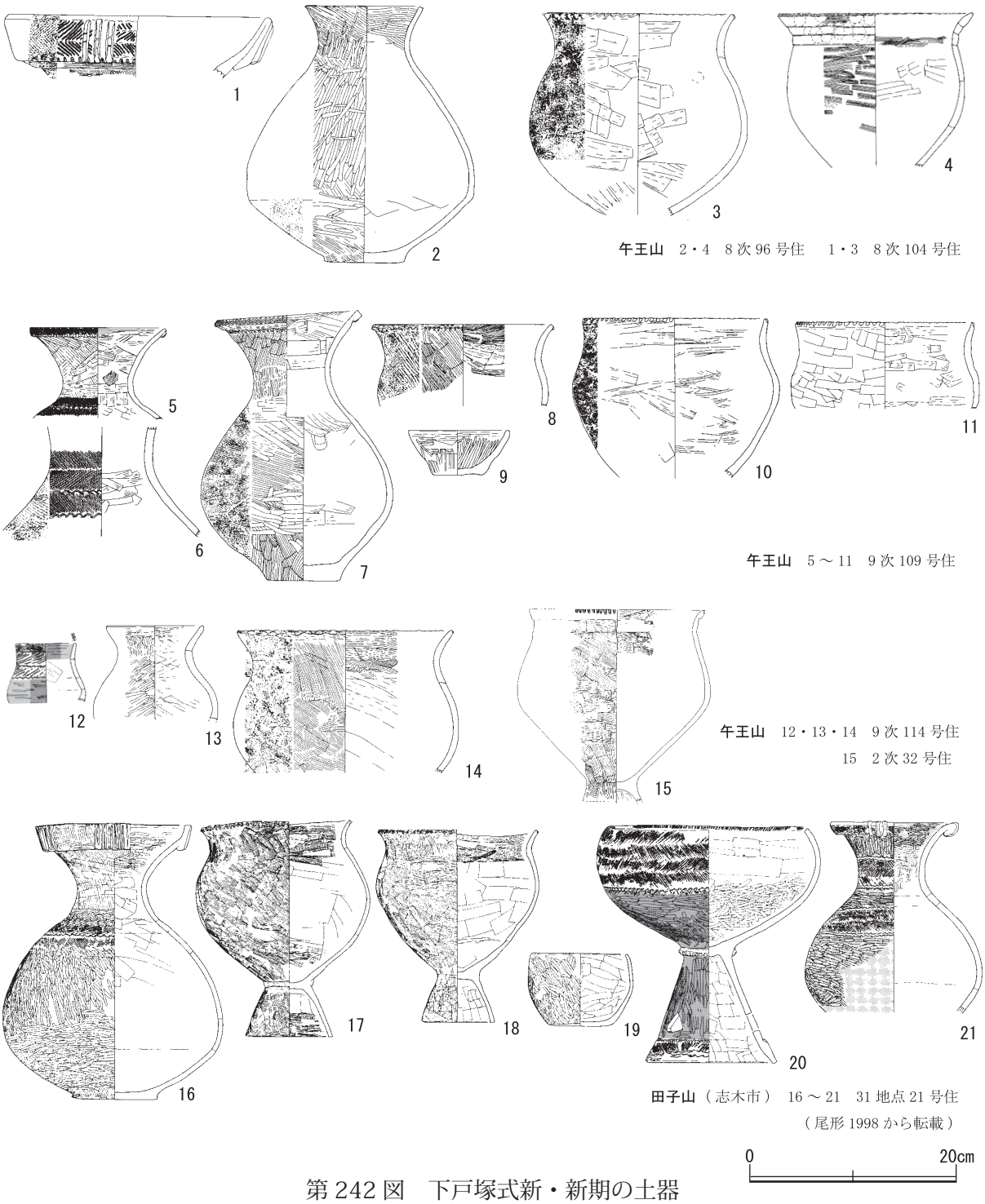
久ヶ原式系の壺は数少なくなるが、吹上遺跡３次３号溝からモミダ型壺とともに出土した第 241 図 17 は、山形文が重なって菱形になった幾何学文で構成され、赤彩されている。更に複雑化する久ヶ原Ⅲ式以前の久ヶ原Ⅱ式新に位置づけられる。富士見市 / 東台遺跡３号方形周溝墓では、自縄結節文区画羽状縄文帯とその下位に沈線区画山形文をもち赤彩された久ヶ原Ⅱ式の壺（第 243 図② 12）と菊川式系壺（10・11）が伴出しており、10 はモミダ型壺である（堀 2005)。二帯の自縄結節文区画羽状縄文帯壺は武蔵野台地東北端地域では初現であり、この土器を再評価した小出輝雄氏は、久ヶ原式の土器（12）とモミダ型壺（10）の共伴から後期中頃以降、弥生町式以前に位置づけた（小出 2006)。12 の複合口縁は棒状浮文が２条と少なく幅も狭い未発達なものだが、久ヶ原式には本来複合口縁はないから変形品と言える。胴部山形文は頂点間が詰まって形が崩れており、小出氏は多少上下に押しつぶされたような器形や沈線も細いこともあげており、久ヶ原Ⅱ式新に位置づけておきたい(6)。この土器は、吹上遺跡３次 12 号住出土壺（第 244 図 13）に系統的に繋がるものである。モミダ型とした吹上遺跡３次３号溝出土壺（第 241 図９）や東台遺跡３号方形周溝墓出土壺（第 243 図② 12）は口縁部を欠失しているが、口縁部形態が分かる資料として新宿区 / 落合遺跡５～７次 SI32 出土壺（第 243 図③ 13）がある。厚みのある折返し状口縁で外方に開き、口内帯に端末結節斜行縄文が施されており東海東部系の要素が色濃い。

甕　折返し状口縁の甕（第 241 図７・13）は口縁部形状や肩が張る器形に東遠江の要素が色濃く見られ、モミダ型壺とともに東海東部からの新たな波状的な影響があったことが分かり、台付甕も 14･15 のように口縁端部の面取を残すものは継承されている。その一方で、５・６や午王山 62 号住出土甕（第 243 図３）のように端部に交互押捺が用いられるなど口縁端部形成の規格性が薄れ、頸胴部の緩曲化や肩部の張りもなくなってくる。ナデ甕（20）も細かな擦痕が入り、実測図によってはハケ甕ともナデ甕とも取れる甕が目立つようになるのもこの段階以降という（松本 2007　p. 282)。

鉢・高坏　鉢は明確に菊川式系と言いうる特徴を示すものはなくなる。吹上遺跡３次３号溝出土高坏（19）は久ヶ原式系で、同・41 号住出土高坏（第 240 図４）の系譜を引くが、折返し口縁部から体部にかけての縄文帯下部の沈線区画がなくなっている。高坏では西遠江以西の要素が部分的に組み込まれるものがみられるようになり、第 241 図３は、坏部に幅広の粘土帯を貼付して羽状縄文帯とし、坏部と脚部の境に刻み突帯がつくが、円形の透かしや開く裾部の粘土貼付は西遠江の要素である。和光市 / 城山遺跡１号住出土高坏（第 243 図①９）も脚部に透かし孔があり、午王山遺跡 62 号住では西遠江以西そのものあるいは忠実に模倣した高坏が伴う（第 243 図①５)。交差編年上の良好な資料であり、後述する。

ｂ．新・新期　弥生時代における午王山遺跡の集落終焉期（第 242 図１～ 15）であるが、志木市 / 田子山遺跡 21 号住一括資料（16 ～ 21）で補う（尾形 1998)。

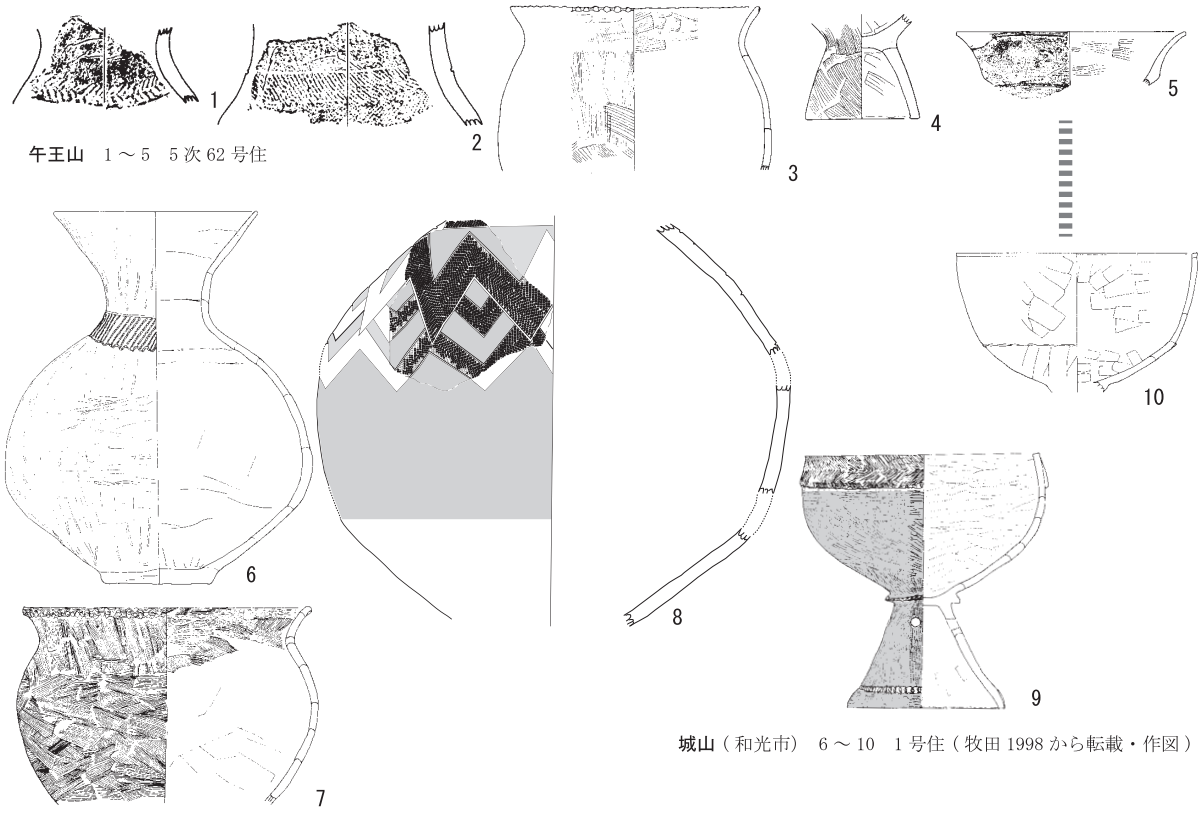
壺　この段階にはハケ刺突文やハケ目沈線はなくなり、東海東部系の壺（第 242 図 16）の Ki1 は櫛描直線文と波状文で、Ki は羽状縄文である（上位 LR は端末結節で、下位 RL は



第242図　下戸塚式新・新期の土器

ヘラミガキされていて不明。第237図16)。幅広複合口縁の下端の突出は明瞭であり、胴部は下位に重心があるものの稜をもつほどではない。棒状浮文が3本で厚みがある折返し状口縁壺（21）は、二帯の自縄結節文区画帯縄文で（第237図19)、久ヶ原式系壺の沈線区画2帯から自縄結節文区画2帯への継承・変換と見たい。午王山遺跡では、104号住の幅広複合口縁壺（第242図1）の下端は16ほど明瞭ではないがはみ出しがあり、５・６（第237図17・18）は羽状縄文と端末結節文の組み合わせで次段階での盛行が準備されている。

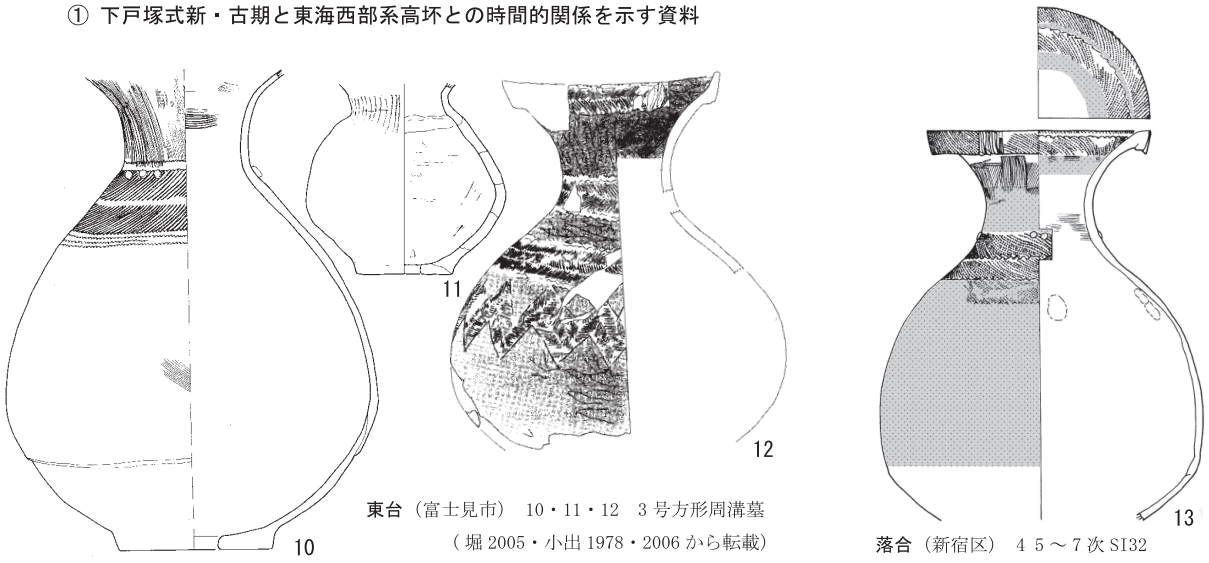
甕　ハケ甕は口唇端部の面取はみられず、頸胴部が緩曲で胴部の最大径も中位に移行している（第242図17・18)。折返し状口縁の台付甕（15）は、口縁部が扁平となり緩曲な頸部



午王山　１～５　５次 62 号住

城山（和光市）　６～10　１号住（牧田 1998 から転載・作図）

① 下戸塚式新・古期と東海西部系高坏との時間的関係を示す資料



東台（富士見市）　10・11・12　３号方形周溝墓
（堀 2005・小出 1978・2006 から転載）

落合（新宿区）　４ 5 ～７次 SI32
（徳沢・小木谷 1999 から転載・付加）

② 久ヶ原Ⅱ式・新と下戸塚式新・古（モミダ型壺）との共伴

③ モミダ型壺の口縁部形態が分かる資料

第 243 図　下戸塚式新・古期との併行関係土器

から胴部に移る。最大径が口縁部にある輪積み甕（４）は輪積み痕が口辺部だけで頸胴部以下はハケ整形がなされ、ナデ甕（３・10・11）は頸部が緩曲なまま胴部に移行する。

鉢・高坏　鉢（９・19）は小型化している。高坏（20）は、坏部が内湾化し縄文帯の区画は自縄結節文であり、坏部と脚部境の突帯や脚部裾の縄文を付した粘土帯や赤彩など久ヶ原式系の高坏である。脚部の三角形の透かしは久ヶ原遺跡（久が原六－２－７）３号土坑で出土しており（齋藤あ 2017　p. 64）、同土器の坏部口辺部縄文帯には多条の自縄結節文がみられる。同遺構からは頸部より上位だけに輪積み痕を残す台付甕も出土している。同土器は、久ヶ原Ⅱ式に位置づけられている。

ｃ．下戸塚新期と東海西部との交差編年　午王山遺跡 62 号住出土土器（第 243 図①１～5）は、区画のないハケ刺突羽状文（１）や沈線区画横帯縄文（２）が残る下戸塚式新・古期だが、高坏（５）は西遠江以西の山中型有段高坏である[(7)]。城山遺跡１号住出土土器（第 243 図①６～ 10）は、沈線区画横帯縄文帯下に山形文がずれて重なるが梯子が入り込まない久ヶ原Ⅱ式新の大型壺（８）、やや内湾の単口縁・上位ハケ沈線端末結節文・胴下部重心の菊川式系の壺（６）、辛うじて口唇部面取を残す台付甕（７）、透かし孔のある高坏（９）は下戸塚式新･古期の組み合わせを示している（牧田 1998）。伴った高坏（10）は脚部を欠くが、口唇端部に平端面があり坏部が深く内湾する有稜高坏であって、廻間Ⅰ式（欠山式）成立期の様相をもつ。５や 10 は外来系で、東海地方西部の山中Ⅱ式３段階から 廻間Ⅰ式０段階に位置づけられるようなので（赤塚 2002）、下戸塚式新・古期と東海地方西部との併行関係の目安となる。

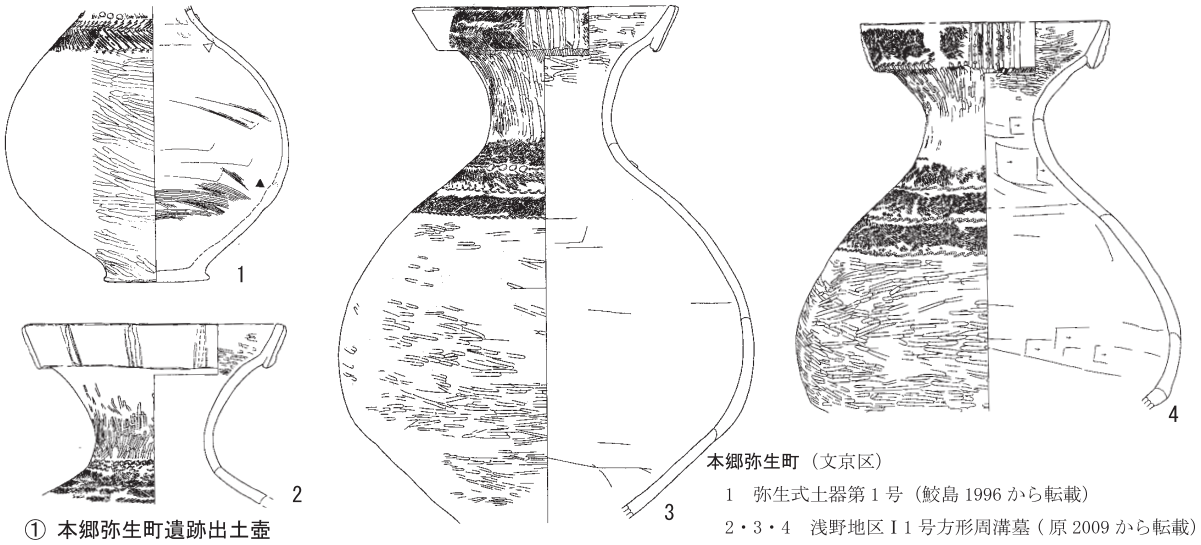
４　下戸塚式以後

下戸塚式終焉後、武蔵野台地東北縁地域では、遺跡の拡大増加が認められるがその土器は弥生町式土器である。前項において、下戸塚式新期では菊川式系の端末結節文で一帯縄文帯を構成する壺が主流を占めるようになるとしてきたが、その正統を継ぐのは「弥生式土器第１号」の本郷弥生町遺跡出土壺（石川 2008　pp.76-79）に他ならない（第 244 図１）。Ki1 と Ki の構成がこの段階まで活きているとすれば、この土器が横羽状端末結節文一帯で上方に浮文があるのは Ki だけの構成だからである。この土器は口縁部を欠失しているが、浅野地区 11 号方形周溝墓から出土した２点（３・４）は幅広複合口縁である。２点とも複合口縁の下端が突出し棒状浮文も５条と多くなっており、４では端末結節縄文帯３段の構成で円形赤彩文も観察できる。３の頸部直下の縄文帯は、Ki1 が無節 Lr 端末結節であり、下位の羽状縄文帯を Ki とすれば円形浮文の位置は Ki1 と Ki の中間点で下戸塚式中期以降の構造が継承されているのである[(8)]。３・４のような端末結節文一帯縄文帯壺とともに出土した第 244 図２は、自縄結節文で上下区画する幅広一帯縄文壺であり、東海東部系と久ヶ原式系の要素が一体化して作出されたものとみる。

午王山遺跡周辺では、富士見市 / 南通遺跡第３地点出土壺（第 244 図５）や志木市 / 西原大塚遺跡 349 号住出土壺（９）が結節文区画縄文一帯壺であり、結節文区画縄文帯の下位に変質沈線区画山形文壺（10）や結節文区画二帯縄文帯壺（６・８）は久ヶ原式系壺で、下戸塚式を継承する構成要素である。斉藤瑞穂氏が下戸塚Ⅱ式の例としてあげた吹上遺跡３次 41 号住出土壺（13）の下位縄文帯は、横帯縄文帯と変質山形文が一体となり鋸歯文化した 10 からの系統と見られる。一帯縄文壺は、複合口縁部が直立し、より幅広となって棒状浮文数が増加するとともに胴部の円形化などの発達をみせる（11・12）。古屋紀之氏が「狭義の弥生町式」と称した本郷弥生町出土壺を、改めてカッコなしで弥生町式土器と呼称すべきと主張したい。

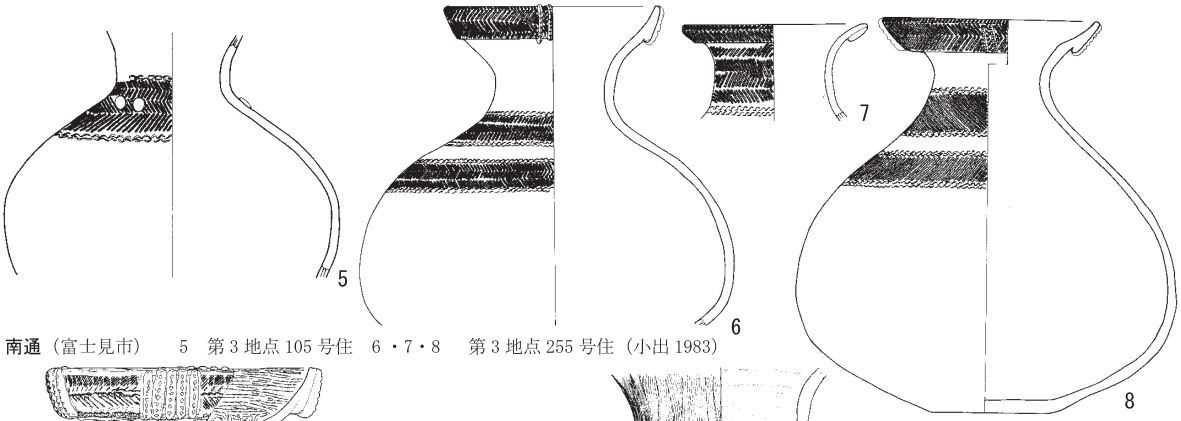
５　終わりに

武蔵野台地東北縁地域の弥生時代中期後半から後期後半にかかる土器編年を記してきた

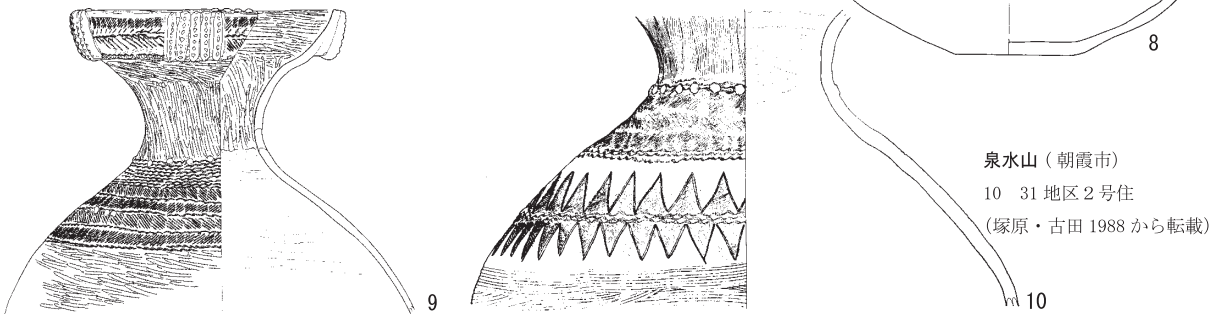


① 本郷弥生町遺跡出土壺

本郷弥生町（文京区）
1　弥生式土器第１号（鮫島 1996 から転載）
2・3・4　浅野地区Ⅰ１号方形周溝墓（原 2009 から転載）

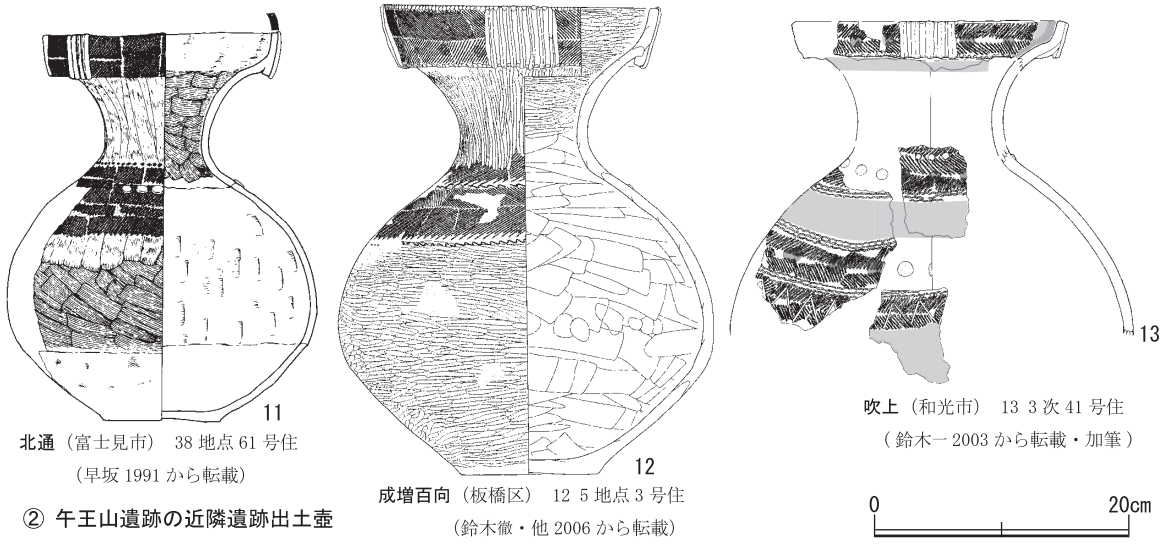


南通（富士見市）　5　第３地点 105 号住　6・7・8　第３地点 255 号住（小出 1983）



西原大塚（志木市）　9　349 号住（佐々木・内野・宮川『西原大塚Ⅱ』から転載）

泉水山（朝霞市）
10　31 地区２号住
（塚原・古田 1988 から転載）



北通（富士見市）　38 地点 61 号住
（早坂 1991 から転載）

② 午王山遺跡の近隣遺跡出土壺

成増百向（板橋区）　12　5 地点３号住
（鈴木徹・他 2006 から転載）

吹上（和光市）　13　３次 41 号住
（鈴木一 2003 から転載・加筆）

0　20cm

第 244 図　午王山遺跡にはない弥生町式土器の壺

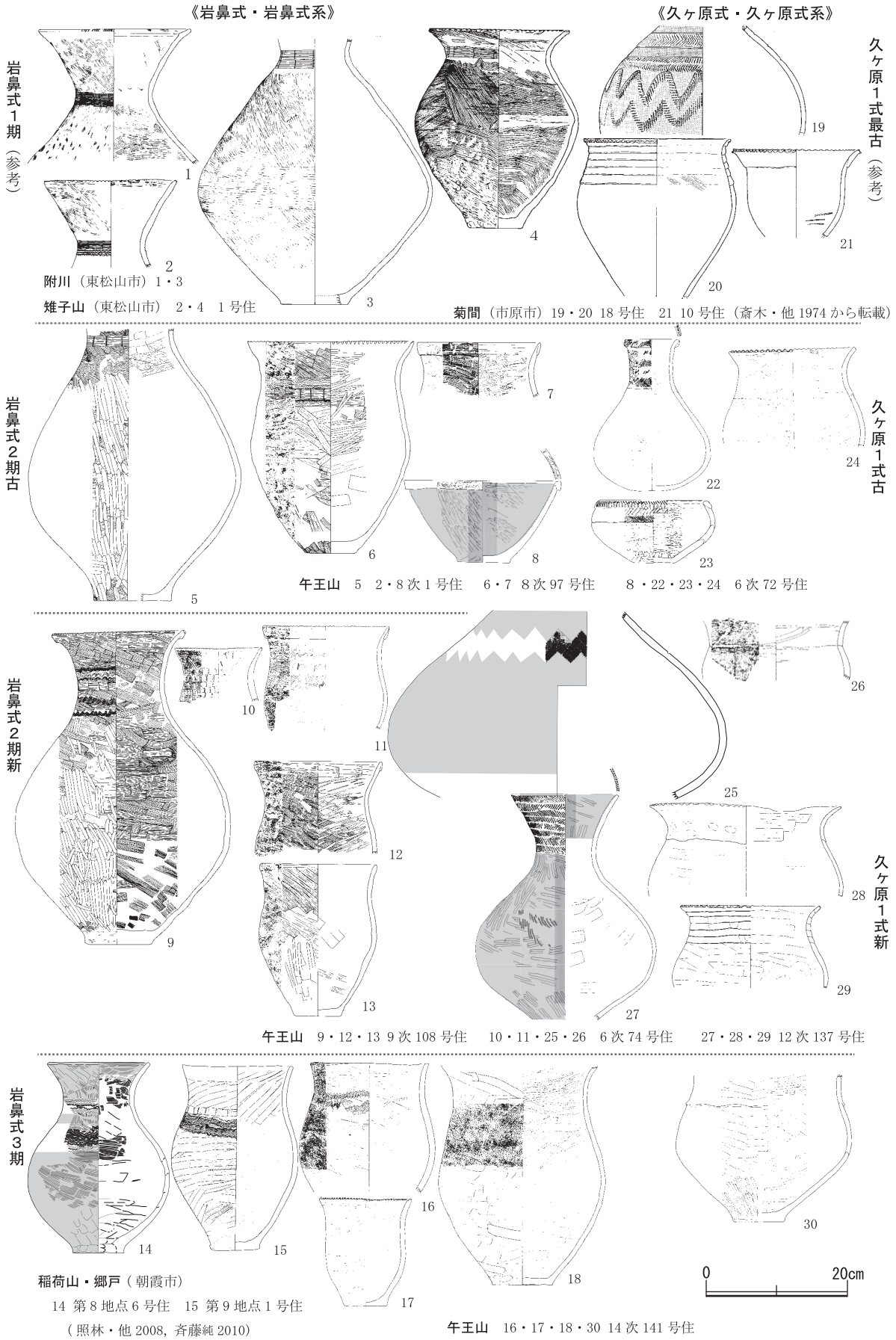
が、午王山遺跡の環濠集落造営期である下戸塚式については古・中・新期と時期分類した。今後、周辺資料の増加に合わせて分析が精緻化すれば、１期・２期・３期・・・に、あるいは、１式・２式・３式・・・に分類できる日が来ることを期待したい。更に、弥生時代後期末から古墳時代前期にかかる弥生町式土器・前野町式土器・五領式土器の土器編年についても記述を進めたいところであるが、すでに紙幅も尽きている。機会があれば改めて稿を草することとし、ここではこれまでの記述と若干の追加を第245・246・247図と第30表のようにまとめ、筆者の責を果たしたことにする。

第 30 表　午王山遺跡とその周辺域　弥生時代中期後半から後期末の編年

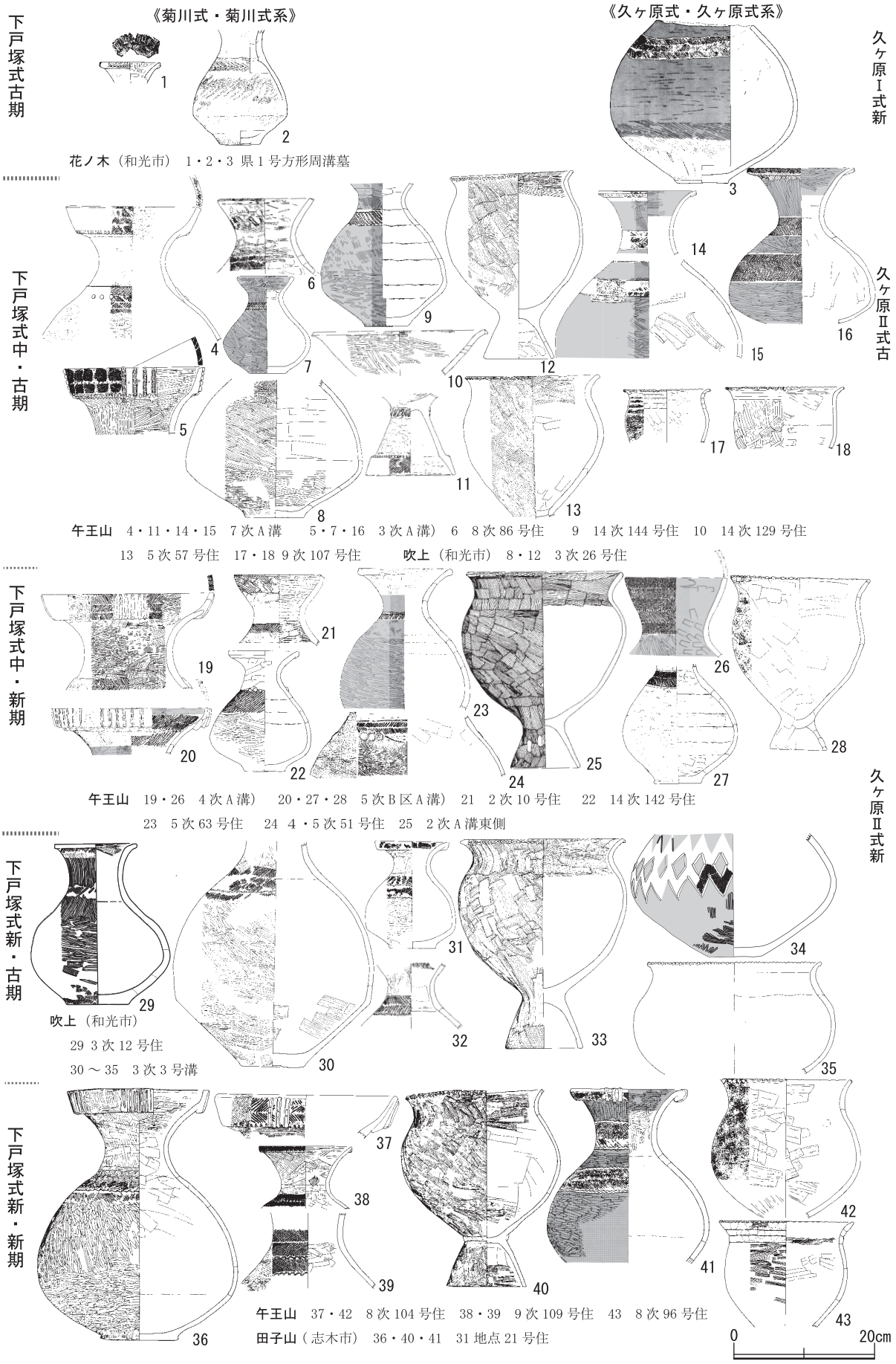
土器型式		武蔵野台地東北縁（白子川・越戸川・黒目川・柳瀬川流域）		北武蔵	南武蔵南部	東海東部など
		午王山遺跡　遺構	近隣遺跡・遺構			
宮ノ台式	Ⅲ期	—	花ノ木 4 次 10 住	北島式	宮ノ台式Ⅲ期	白岩式
	Ⅳ期	—			宮ノ台式Ⅳ期	
	Ⅴ期	82 住、87 住、133 住	新屋敷第 1 地点 6 住 本村南	仮 用土・平式 仮 代正寺式	宮ノ台式Ⅴ期	
岩鼻式１期		—	—	岩鼻式１期	久ヶ原Ⅰ式古	菊川式最古
岩鼻式２期古		1 住、3 住、72 住、97 住	氷川神社北方 21 住	岩鼻式２期古		
岩鼻式２期新		74 住、108 住、124 住、137 住		岩鼻式２期新	久ヶ原Ⅰ式新	菊川式古
岩鼻式３期		81 住、105 住、141 住、（18 住、119 号住）	稲荷山・郷戸 9 地点 9 住	岩鼻式３期		
下戸塚式古		—	花ノ木 県 1 方形周溝墓			
下戸塚式中・古		4 住、8 住、9 住、11 住、20 住、24 住、27 住、57 住、59 住、68 住、73 住、75 住、84 住、86 住、90 住、91 住、93 住、100 住、107 住、110 住、113 住、118 住、121 住、128 住、129 住、138 住、144 住、Ａ溝（3 次 2 溝・7 次 2 溝・5 次Ａ区 1 溝）	吹上 3 次 26 住・41 住 四ツ木 4 次 30 住	吉ヶ谷１式１期 吉ヶ谷１式２期	久ヶ原Ⅱ式古 北川谷３期古	菊川式中～新
下戸塚式中・新		5 住、10 住、12 住、14 住、16 住、30 住、42 住、44 住、50 住、51 住、52 住、58 住、63 住、69 住、77 住、78 住、88 住、92 住、95 住、130 住、132 住、142 住、146 住、Ａ溝（4 次 2 溝・5 次Ｂ区 2 溝・2 次 1 溝・10 次 1 溝・11 次 1 溝）	中道・岡台第 3 地点 1 溝 新屋敷 1 地点 3 号住	吉ヶ谷１式３期	久ヶ原Ⅱ式新 北川谷３期新 北川谷４期古	山中式Ⅲ 廻間Ⅰ式
下戸塚式新・古		19 住、62 住、（101 住）	吹上 3 次 12 住、3 次 3 溝 城山 1 住 東台 3 号方形周溝墓	吉ヶ谷２式１期		
下戸塚式新・新		23 住、96 住、104 住、109 住、114 住	田子山 31 地点 21 住		久ヶ原Ⅲ式 北川谷４期新	菊川式最新
弥生町式古		—	南通 3 地点 105 住 西原大塚 349 住	吉ヶ谷２式２期		
弥生町式新		—	北通 38・39 地点 61 住 成増百向 5 地点 3 住			
前野町式古		—	富士前 15 地点 1 住		日吉台／北川谷５期古	廻間Ⅱ式前半
前野町式新		—	南通 3 地点 109 住 成増一丁目 2 住	吉ヶ谷系	北川谷５期新	廻間Ⅱ式後半

＊宮ノ台式　安藤（1990）、久ヶ原式　安藤（2017）、北武蔵　柿沼（2012）、北川谷（古屋 2013）
菊川式（篠原 2001）、山中式・廻間式（赤塚 2002）

なお、本稿を記すにあたっては下記の方々にご教示をいただいた。記して謝意を表したい。
石川日出志、遠藤英子、尾形敏則、小倉淳一、菊池健一、小出輝雄、笹森紀己子、
佐藤康二、鈴木一郎、鈴木敏則、鈴木敏弘、宅間清公、轟　直行、野本孝明、前田秀則
松本　完



第 245 図　武蔵野台地東北縁（白子川・黒目川・柳瀬川流域）後期土器編年 - 1



花ノ木（和光市）　1・2・3　県1号方形周溝墓

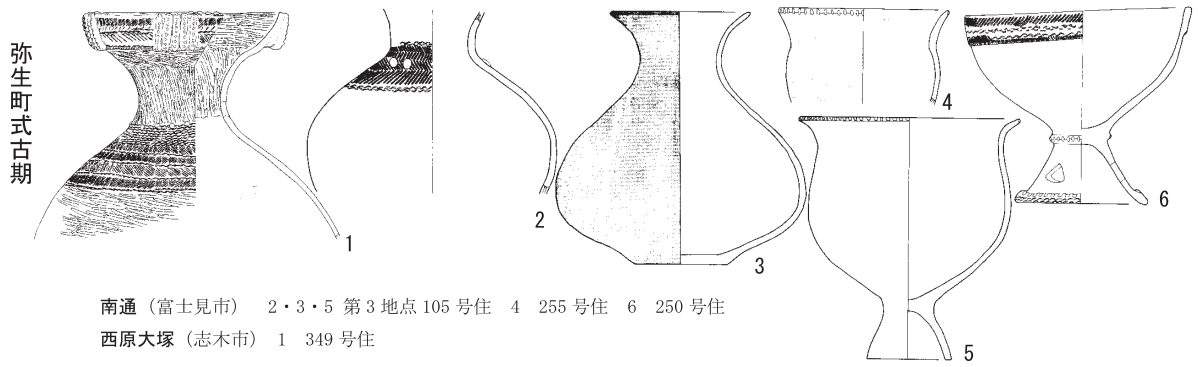
午王山　4・11・14・15　7次A溝　　5・7・16　3次A溝）　6　8次86号住　　9　14次144号住　10　14次129号住
13　5次57号住　17・18　9次107号住　　吹上（和光市）　8・12　3次26号住

午王山　19・26　4次A溝）　20・27・28　5次B区A溝）　21　2次10号住　　22　14次142号住
23　5次63号住　　24　4・5次51号住　25　2次A溝東側

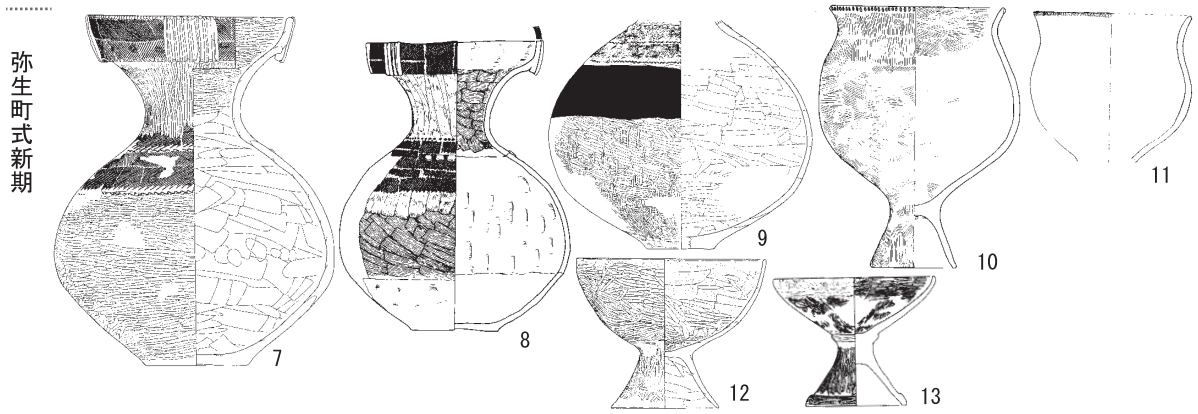
吹上（和光市）
29　3次12号住
30～35　3次3号溝

午王山　37・42　8次104号住　38・39　9次109号住　43　8次96号住
田子山（志木市）　36・40・41　31地点21号住

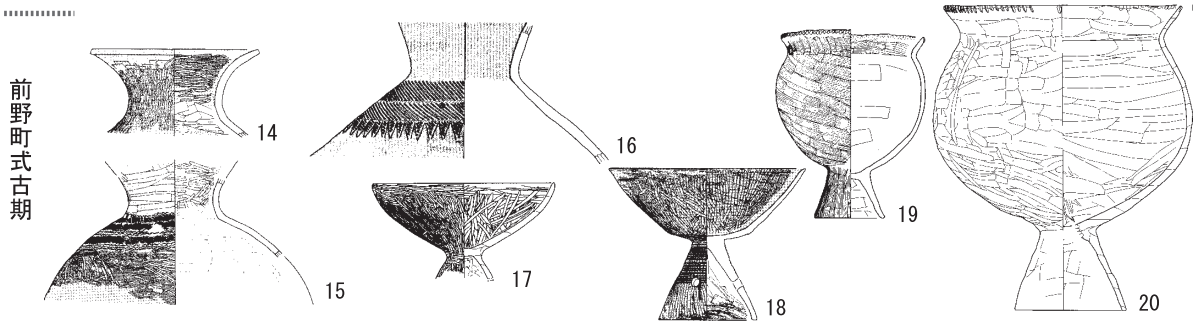
第246図　武蔵野台地東北縁（白子川・黒目川・柳瀬川流域）後期土器編年 - 2



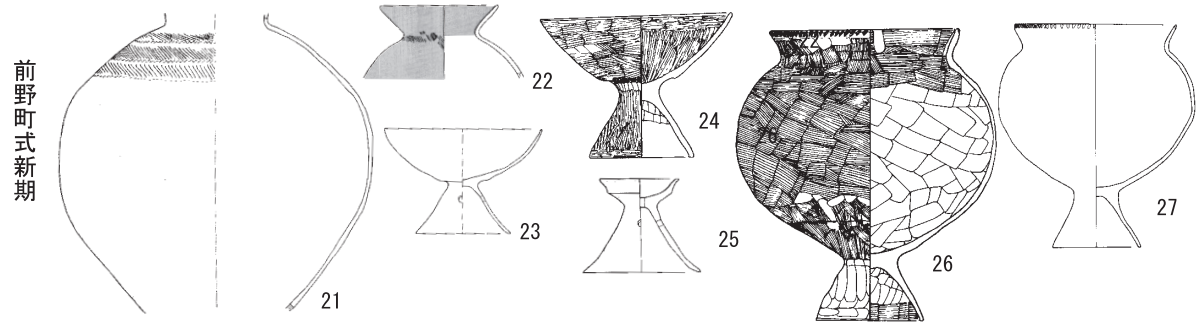
南通（富士見市）　2・3・5 第３地点 105 号住　4　255 号住　6　250 号住
西原大塚（志木市）　1　349 号住



成増百向（板橋区）7・12 第５地点３号住　　**北通**（富士見市）　8　38 地点 61 号住　10　33 地点 57 号住
泉水山（朝霞市）　11　31 地区３号住　　**市場峡・市場上**（和光市）　9　18・19 次 57 号住（依田・他 2013）
向原（板橋区）　13　14 号住（石川・藤波・隅田・他 1994）



富士前（志木市）　14・15・18・19　　15 地点１号住（尾形・他 1999）　　**南通**（富士見市）　16　第３地点 129 号住
市場峡・市場上（和光市）　17・20　24 次 80 号住（依田・他 2015）



南通（富士見市）　21・22・23・27　第３地点 109 号住　　25　124 号住
成増一丁目（板橋区）　24・26　２号住（鈴木敏・他 1981）

0　20cm

第 247 図　武蔵野台地東北縁（白子川・黒目川・柳瀬川流域）後期土器編年 － 3

【註】

1）安藤氏は､松本完氏や鈴木正博氏の久ヶ原式論（松本 2005･鈴木正 2009）も参考になったと記している。後者は、菊池義次氏の久ヶ原Ⅱ式（鈴木＝久ヶ原２式）の再評価で、大村直氏の久ヶ原１式・２式の時期区分との相違・齟齬、装飾壺の文様帯系統の誤謬を衝いている。

2）柿沼 2013 では午王山遺跡出土土器の東京湾岸地域との編年対比を、大村　直氏の久ヶ原１・２式から山田橋式との比較・検討で行ったが、久ヶ原Ⅱ式の扱いに失当があるとの鈴木正博氏の指摘（註１）を受け、久ヶ原式土器に関しては安藤氏が再設定した編年に準拠する。大村氏は久ヶ原式と山田橋式を分ける基準を壺における結節文区画の採用としている。沈線区画から結節文区画への移行を久ヶ原式／弥生町式区分の基準とする考えを再評価したのは笹森紀己子氏だが（笹森 1984)、氏も久ヶ原Ⅱ式への評価は低い。しかし、武蔵野台地東北縁では沈線文区画が久ヶ原Ⅱ式併行でも根強く残り、結節文区画がみられるようになるのは下戸塚式でも端末結節が盛行する段階以降であり、細別の基準にはなりにくい。下戸塚式中期に伴うのは久ヶ原Ⅱ式とすれば、実態に即した伴出関係が確認できる。

3）この資料は、2008 年に開催された「ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ南関東の弥生後期土器を考える」で立花実氏から紹介されたもので（立花 2009、大磯町 2007)、会場から篠原和大・鈴木敏則・大木紳一郎氏が発言して評価を加えている。

4）松本氏は「櫛刺突文」と表現しているが、その施文法について佐原　真氏は実験考古学の成果から施文具は薄板状のハケ整形具であり､押しつけることによって施文することから「木目沈線紋」と表現し、工具の長さや押圧の仕方によって「木目列点紋」「木目刻目紋」と区分する（佐原 1987)。篠原和大氏は佐原氏に準拠して「木目沈線文」を用い、同じ工具による「擬縄文」を「ハケ刺突擬縄文」としていたが、その後「ハケ目沈線文」「ハケ刺突文」などとしている（篠原 2009)。直近では轟　直行氏が「ハケ目沈線」「ハケ刺突文」としており（轟 2017)、筆者もこれを採用する。

5）齋藤氏提唱の「下戸塚式（1 式)」には賛同するが、下戸塚１式とした土器群について、東海地方の要素の伝播は一時的で時期を経るごとに減少していく（齋藤瑞 2018　p. 149)、としている点は首肯しがたい。菊川式とは、あるいは東海東部とは、松本氏が記したように「型式変化の軌道が一部共有され」ており、相互関係が波状的に継続されているのが確認できる事実関係である。「「本郷弥生町」の出自をことさら東海地方にまで求めなくともよいように、私には思われるのである」（齋藤瑞 2018p. 158）ともしているが、首肯できない。東遠江から西駿河に広がるモミダ型壺の端末結節文が新たに波及して取り入れられたのが下戸塚式新期の端末結節文壺であり、それが直接的な系譜として主流化したのが弥生町式土器である。「下戸塚２式」を採用できない所以でもある。

6）安藤氏が久ヶ原Ⅱ式古とした壺は結節文や付加条３種と沈線区画が併用されており、結節文区画横帯縄文の事例としてあげた影向寺出土壺は久ヶ原Ⅱ式新に置いている（安藤 2017)。都立田園調布高等学校地内遺跡２号方形周溝墓出土土器に４条の結節により区画した二帯横帯縄文と下部に山形文を配した壺がある（斉藤あ 2017)。山形文はやや崩れているが、口縁部は折返し状口縁で外方に開き、頸胴部も縦に長く、同書では久ヶ原Ⅱ式古段階に位置づけられている（p. 69)。東台遺跡出土壺は本文中に述べたとおりやや新しい要素があり、久ヶ原Ⅱ式新段階としたいところである。

7）山中型有段高坏の管見に触れた出土例として、大田区／熊野神社付近遺跡 Y- ４号住出土高坏（米川・他 1991､野本 2017）や目黒川流域の烏森遺跡１次環濠上層出土高坏（合田･本山 2012）があげられる。前者は、久ヶ原Ⅱ式古に伴っており、坏部に櫛描波状文が施された山中Ⅱ式１ないしは２段階と見ら

れる。後者は、櫛描波状文を欠く山中Ⅱ式３段階で熊野神社例より新しく、午王山５次 62 号住出土事例に近い。環濠上層からは吹上遺跡３次３号溝出土壺（第 12 図 17）と同様の山形文が重なって連続菱形文となった壺が出土している（ただし、羽状縄文ではなく斜行縄文）。同中層からは結節文区画二帯でその下位に沈線区画山形文を配した壺も出土しており、前後関係があるとしても近接した時期と考えたい。

８）設楽博己氏は、この土器は東海東部の土器と同じ特徴をもつとしつつ円形浮文が縄文の上端に付いていることは駿河地方にない、との加納俊介氏の指摘（ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ南関東の弥生土器実行委員会 2005）を紹介し、地元で製作されたものとしている（設楽 2011p.66）。そのとおりであるが、本文中に記したように本来浮文は Ki1 と Ki の中間点にあり、Ki1 と Ki のどちらかの省略によって浮文の位置に変動が生じる。このことは、下戸塚式の段階から確認できる。

【引用・参考文献（図版出典を含む）】

赤塚次郎 2002「Ⅱ　濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡　考察編』愛知県埋蔵文化財センター　調査報告書第 92 集　pp.25-4　財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター

天ヶ嶋岳 2003『川越城跡（第 11 次調査）』川越市遺跡調査会発掘調査報告書第 27 集　川越市遺跡調査会

安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」上・下『古代文化』第 42 巻第 6・7 号　財團法人 古代學協會

安藤広道 1996「第Ⅲ部　編年編　南関東地方（中期後半・後期）」『YAI!』 pp.241-258　弥生土器を語る会

安藤広道 2009「東京湾西岸～相模川流域の後期弥生式土器の検討」『南関東の弥生土器 2 ～後期土器を考える～』考古学リーダー 16　pp.114-128　関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷遺跡研究会編　六一書房

安藤広道 2015a「Ⅳ，各地の弥生土器及び平行期土器群の研究６　関東」『弥生土器』考古調査ハンドブック 12　pp.344-396（株）ニューサイエンス社

安藤広道 2015b「コラム１　久ヶ原･弥生町期の未来？」『列島東部における弥生後期の変革』考古学リーダー 24　pp.279-286　西相模考古学研究会　西川修一・古屋紀之編　六一書房

安藤広道 2017「久ヶ原遺跡と久ヶ原式土器」『土器から見た大田区の弥生時代―久ヶ原遺跡発見､90 年―』pp.152-161　平成 28 年度特別展　大田区立郷土博物館

石川日出志・藤波啓容・隅田　眞・他 1994『向原遺跡』東京都住宅局　板橋区向原遺跡調査会

石川日出志・藤波啓容・他 1999『西台後藤田遺跡発掘調査報告書―第１地点―』東京都住宅局、都内第二遺跡調査会　西台遺跡調査団

石川日出志 2008『「弥生時代」の発見　弥生町遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」050　新泉社

石川日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史①岩波新書 1271　岩波書店

石川日出志・松田　哲 2014「総論」『熊谷市前中西遺跡を語る』考古学リーダー 23　pp.3-33　関東弥生文化研究会埼玉弥生土器観会編　六一書房

石川安司・柿沼幹夫・宅間清公 2017「ときがわ町破岩遺跡―関東地方西部域 弥生時代中期末葉の遺跡・

遺物の一事例―」『埼玉考古』第 52 号 pp. 19-30 埼玉考古学会
石坂俊郎・他 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 134 集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
市毛　勲・車崎正彦・松本　完・他 1996『下戸塚遺跡の調査』第 2 部　早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編　早稲田大学
伊藤玄三・守屋幸一 2000『中台畠中遺跡発掘調査報告書』中台畠中遺跡調査会　日立製作所
江原　順 1998「朝霞市郷戸遺跡出土の土器」『あらかわ』創刊号 pp. 23-28 あらかわ考古談話会
照林敏郎・江原　順 2002『中道・岡台遺跡第 3 地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財調査報告書第 20 集　朝霞市教育委員会
大磯町編 2007『大磯町史 10 別冊 考古』
大村　直 2004『市原市山田橋大山台遺跡』市原市文化財センター調査報告書第 88 集
尾形敏則 1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について―田木山遺跡第 31 地点の弥生時代 21 号住居跡出土の資料―」『あらかわ』創刊号 pp35-53 あらかわ考古談話会
尾形則敏 1999「第 3 章　富士前遺跡第 15 地点の調査」『志木市遺跡群 9』志木の文化財第 27 集 pp. 16-21 埼玉県志木市教育委員会
柿沼幹夫 2003「芝川流域の宮ノ台式土器」『埼玉考古』第 38 号 pp. 61-101　埼玉考古学会
柿沼幹夫 2006「岩鼻式土器について」『土曜考古』第 30 号 pp. 1-28 土曜考古学研究会
柿沼幹夫 2009「補足・意見―和光市午王山遺跡における岩鼻式土器―」『南関東の弥生土器 2―後期土器を考える―』考古学リーダー 16 pp. 192 － 202 関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷遺跡研究会編　六一書房
柿沼幹夫 2012『弥生時代後期地域社会の考古学的研究―北武蔵地方を中心に―』埼玉大学大学院文化科学研究科
柿沼幹夫 2013「荒川下流域弥生時代後期土器に関する覚書」『埼玉考古』第 48 号 pp. 5-28 埼玉考古学会
柿沼幹夫 2014「前中西遺跡の周辺を巡る課題」『熊谷市前中西遺跡を語る』考古学リーダー 23 pp. 67-89 関東弥生文化研究会　埼玉弥生土器観会編　六一書房
柿沼幹夫 2016「頸胴部帯縄文甕―交差編年・地域間交流の鍵―」『埼玉考古』第 51 号 pp. 19-36 埼玉考古学会
栗原文蔵・野部徳秋 1973『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 1 集　埼玉県教育委員会
黒沢　浩 2003「神奈川県二ッ池遺跡出土弥生土器の再検討―二ッ池式土器の提唱―」『明治大学博物館研究報告』第 8 号 pp. 21-58 明治大学博物館事務室
黒沢　浩 2005「南関東における弥生時代後期土器群の動向―二ッ池式土器の検討を中心に―」『駿台史学』第 124 号 pp. 49-72 駿台史学会
小出輝雄 1978『富士見市中央遺跡群Ⅰ』文化財調査報告第 15 集　富士見市教育委員会
小出輝雄 1983『針ヶ谷遺跡群―南通遺跡第 3 地点の調査―』富士見市遺跡調査会調査報告第 21 集　富士見市遺跡調査会
小出輝雄 2006「埼玉の弥生後期土器についての一考察（予察）」『埼玉の考古学Ⅱ』 pp. 251-260　埼玉考古学会編　六一書房

合田芳正・本山直子（2012）『烏森遺跡第１次発掘調査報告書』目黒区埋蔵文化財発掘調査報告書第 24 集　共和開発株式会社

小林行雄・杉原荘介編 1968a『弥生式土器集成　本編１』日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会　東京堂

小林行雄・杉原荘介編 1968b『弥生式土器集成　本編２』日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会　東京堂

小林理恵 1995「西台遺跡」『板橋区史　資料編１　考古』pp. 502-507 板橋区

斎木　勝・他 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会

埼玉考古学会編 1976『埼玉県土器集成４』

今泉泰之「附川遺跡」pp. 31-32 図版 7

柿沼幹夫「竹間沢本村遺跡」pp. 45-47 図版 16

佐々木保俊「南通り遺跡」pp. 40-42 図版 12・13

谷井　彪「台の城山遺跡」pp. 43-45 図版 14・15

齋藤あや 2017『土器から見た大田区の弥生時代―久ヶ原遺跡発見、90 年―』平成 28 年度図録　大田区立郷土博物館

斉藤　純 2010「第８章　稲荷山・郷戸遺跡第 9 地点の調査」『朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告集報 1』朝霞市埋蔵文化財調査報告書第 33 集　朝霞市教育委員会

齋藤瑞穂 2010「下戸塚式という視点」『古代』第 123 号 pp. 53-72 早稲田大学考古学会

齋藤瑞穂 2018「第９章　下戸塚式という視点―関東地方後期弥生土器型式の提唱―」『弥生土器型式細別論』pp. 140-159 同成社

佐々木保俊・小出輝雄 1984『針ヶ谷遺跡群』富士見市遺跡調査会調査報告第 23 集　富士見市遺跡調査会

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳『西原大塚遺跡Ⅱ』埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合　埼玉県志木市教育委員会

笹森紀己子 1984「久ヶ原式から弥生町式へ―壺形土器の文様を中心に―」『土曜考古』第 9 号 pp. 17-40 土曜考古学研究会

佐原　真 1987「9 補塙　2.B. 遠賀川系土器の技法」『弥生文化の研究』4　弥生土器Ⅱ　pp. 218-222　雄山閣

鮫島和大 1996「弥生町の壺と環濠集落」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 14 号　pp. 131-154　東京大学文学部考古学研究室

篠原和大・山下英郎 2000「静岡県における後期弥生土器の編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』〔第 1 分冊〕pp. 72-197 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会　福島県立博物館

篠原和大 2001「駿河地域の後期弥生土器と土器の移動（補遺）」『ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ 弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』資料集 pp. 58-67 西相模考古学研究会

篠原和大 2002「第Ⅰ部 各地域の様式と編年 5 (2) 東遠江　第Ⅴ様式」『弥生土器の様式と編年　東海編』pp. 589-610 加納俊介・石黒立人編　木自社

篠原和大 2009「南関東・東海東部地域の弥生後期土器の地域性―とくに菊川式土器の東京湾北東岸への移動について―」『南関東の弥生土器 2 －後期土器を考える－』pp. 246-254 関東弥生時代研究会

埼玉弥生土器観会　八千代栗谷研究会編　六一書房
設楽博己 2011「弥生式土器の発見」『弥生誌－向岡記碑をめぐって』 pp. 62-72　東京大学総合研究博物館
シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編 2005『南関東の弥生土器』考古学リーダー５　六一書房
加納俊介 p. 167
黒沢　浩「５．弥生町式と前野町式」pp. 49-55
松本　完「４．久ヶ原式」pp. 40-48
鈴木一郎 2001『峯前遺跡（第３次）　花ノ木遺跡（第４次）　吹上遺跡（第４次）　吹上原遺跡』和光市教育委員会
鈴木一郎 2003『吹上遺跡（第３次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第 30 集　和光市遺跡調査会　和光市教育委員会
鈴木一郎 2004『四ツ木遺跡（第４次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第 34 集　和光市遺跡調査会　和光市教育委員会
鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 110 集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木　徹・他 2006『成増百向遺跡第５地点』扶桑レクセル　共和開発　アルケーリサーチ
鈴木正博 2009「「久ヶ原２式」への接近」『南関東の弥生土器２－後期土器を考える－』 pp. 229-239　関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷研究会編　六一書房
鈴木敏弘・他 1981『成増一丁目遺跡発掘調査報告』成増一丁目遺跡調査会
鈴木敏弘 1995「赤塚氷川神社北方遺跡」『板橋区史 資料編１ 考古』pp. 430-453 板橋区
杉山祐一 2010「房総における宮ノ台式土器から久ヶ原式土器への変遷」『西相模考古』第 19 号 pp. 1-38　西相模考古学研究会
宅間清公・他 2017『中野遺跡第 91 地点』志木市の文化財第 67 集　埼玉県志木市教育委員会
立花　実 2009「Ⅱ　討論の記録　７．大磯町馬場台遺跡第 19 地点の資料をめぐって」『南関東の弥生土器２～後期土器を考える～』考古学リーダー 16　pp. 164-168　関東弥生時代研究会　埼玉弥生土器観会　八千代栗谷遺跡研究会編　六一書房
谷井　彪 1966「大和町新倉午王山出土の弥生式土器」『埼玉考古』第４号　埼玉考古学会
谷井　彪・高山清司 1968「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」『埼玉考古』第６号　pp. 30-54　埼玉考古学会
谷井　彪・宮崎朝雄 1975『台の城山遺跡発掘調査報告書』朝霞市文化財調査報告書第５集　朝霞市教育委員会
塚原正典・古田　幹 1988「第 11 章　泉水山遺跡第 31 地区の調査」『泉水山・下ノ原遺跡Ⅲ』朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会
照林敏郎・他 2008『稲荷山・郷戸遺跡第８地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集　朝霞市教育委員会
照林敏郎・江原順・他 2002『中道・岡台遺跡第３地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集　朝霞市教育委員会
徳澤啓一・小木谷晃与 1999『落合遺跡Ⅲ』学校法人目白学園　新宿区落合遺跡調査団

轟　直行 2017「菊川式土器の成立に関する研究」『古代文化』VOL. 69　pp. 22-40　公益財団法人　古代学協会

中嶋郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』２号　pp. 119-150　転機同人会

中嶋郁夫 1991「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」－「菊川様式」編－」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』『転機』４号　pp. 75-94　第８回東海埋蔵文化財研究会

野本孝明 2017「多摩川下流域左岸産の久ヶ原式土器の移動とその評価」『東京考古』No. 35　pp. 21-53　東京考古談話会

早坂廣人 1991「第４章　北通遺跡第 38・39 地点」『富士見市遺跡群Ⅸ』富士見市文化財報告第 41 集　埼玉県富士見市教育委員会

原　祐一 2009『東京大学本郷溝内の遺跡　浅野地区Ⅰ』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書９　東京大学埋蔵文化財調査室

比田井克仁 1991「山中式・菊川式東進の意味すること」『東海系土器の移動から見た東日本の弥生土器』『転機』４号　pp. 153-171　第８回東海埋蔵文化財研究会

比田井克仁 2005「テーマ３．　後期土器の地域性　報告（１）―久ヶ原式・弥生町式の今日―」『南関東の弥生土器』考古学リーダー５　pp. 125-134　シンポジウム　南関東の弥生土器実行委員会編　六一書房

古屋紀之 2013「横浜市都筑区北川谷遺跡群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『横浜市歴史博物館紀要』第 17 号　pp. 1-30　横浜市歴史博物館

古屋紀之 2014「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原・弥生町期の現在―相模湾／東京湾の弥生後期の様相―』pp. 29-44　西相模考古学研究会　記念シンポジウム資料集

古屋紀之 2015「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』考古学リーダー 24　pp. 19-35　西相模考古学研究会　西川修一・古屋紀之編　六一書房

古屋紀之 2018「久ヶ原・弥生町問題再論」『西相模考古』第 27 号　pp. 41-67　西相模考古学研究会

堀　善之 2005「東台遺跡第 24 地点」『富士見市内遺跡ⅩⅢ』富士見市文化財報告第 57 集　埼玉県富士見市教育委員会

牧田　忍 1998『花ノ木遺跡第２次　城山遺跡』和光市埋蔵文化財調査報告書第 21 集　和光市遺跡調査会　和光市教育委員会

牧田　忍 2009「武蔵野台地後期弥生土器考」『埼玉考古』第 44 号　pp. 13-28　埼玉考古学会

松尾茂美 1995「沖山遺跡」『板橋区史　資料編１　考古』pp. 454-463　板橋区

松本　完 1991「東海系土器群の受容と変容―南関東地方の事例について―」『東海系土器の移動から見た東日本の弥生土器』『転機』４号　pp. 141-151　第８回東海埋蔵文化財研究会

松本　完 1993「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚』pp. 47-70　久保哲三先生追悼論集刊行会

松本　完 1996「第４章　第１節　出土土器の様相と集落の変遷」『下戸塚遺跡の調査』第２部　pp. 581-647　早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編　早稲田大学

松本　完 2007「武蔵野台地北部の後期弥生土器編年―埼玉県和光市午王山・吹上遺跡出土土器を中心として―」『埼玉の弥生時代』　pp. 263-290　埼玉弥生土器観会編　六一書房

森本六爾・小林行雄編 1938・1939『弥生式土器聚成図録 正編』・『同　解説』 東京考古学会学報第 1 冊　東京考古学会

安田脩一 2017『装飾壺からみた弥生時代の朝霞』第 32 回企画展　朝霞市博物館

依田賢仁・他 2013『市場峡・市場上遺跡（第 18・19 次調査）』和光市埋蔵文化財調査報告書第 51 集　和光市遺跡調査会　和光市教育委員会

依田賢仁・他 2015『市場峡・市場上遺跡（第 24 次調査）』和光市埋蔵文化財調査報告書第 58 集　和光市遺跡調査会　和光市教育委員会

米川仁一 1991「第Ⅸ章　第３項 弥生土器」佐々木藤雄編『山王三丁目遺跡』 pp. 189-203　熊野神社遺跡群調査会

第４節　午王山遺跡と弥生時代の動向

石川　日出志

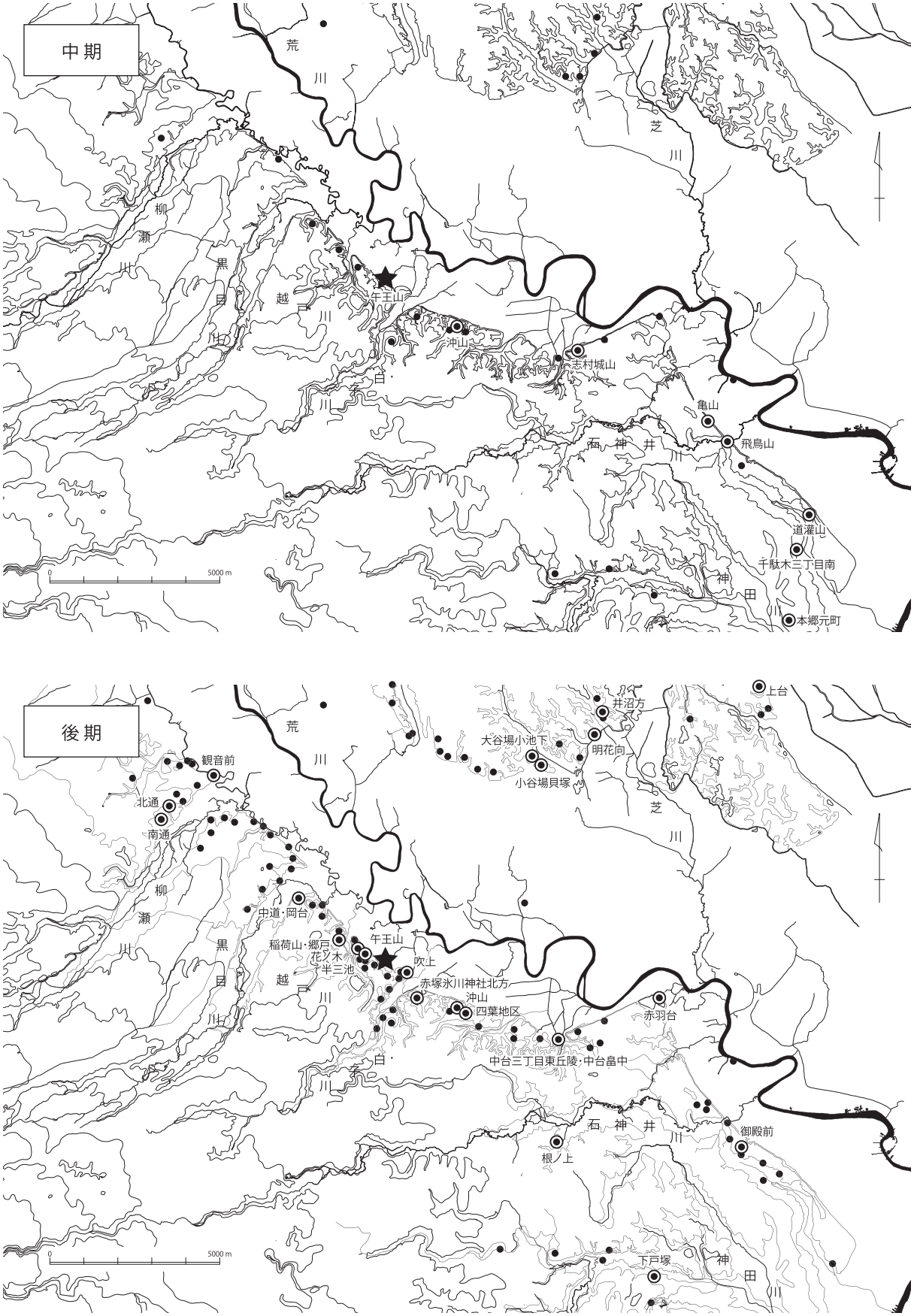
１　午王山遺跡とその周辺の遺跡分布

これまで15次にわたる調査のデータと資料を今回統一的に再検討した結果、午王山遺跡が営まれたのは弥生時代中期後半と後期前半～後半であり、後期初頭は空白期のようで、なおかつ後期後半でも弥生町式土器段階の直前には終焉を迎えることが明らかになった。後期の集落が継続する途中で環濠が二重に巡らされた可能性が高いことも確認できた。

本遺跡は、北側に荒川低地を望む武蔵野台地北縁に位置し、深い浸食地形が南側を横断するために独立丘となっている。荒川流域のみならず、関東地方の弥生時代遺跡でこれほど明確な独立丘に集落が形成された実例はきわめて稀であり、個性的な立地といってよい。どの時代の遺跡も、その遺跡が営まれた地形環境、ひいては生態環境とともに、周囲の集落で生活する人々との間に形成された社会的環境の中で存立した。したがって、遺跡群の分布状態はその遺跡の住民が生活した当時の生態的・社会的環境を知る手がかりとなる。第248図に弥生時代中期と後期の本遺跡周辺における遺跡群の分布状態を示した。まず中期（上）と後期（下）を比べると、遺跡のほとんどは台地の縁辺部に立地し、分布密度は武蔵野台地側で高く、大宮台地で低いという傾向は共通する。しかし、もう少し具体的に見てみよう。

関東地方で本格的な灌漑稲作を基礎とする集落が出現するのは中期中頃の中里式・池上式土器段階である。しかし、この段階では足柄平野の中里遺跡、小櫃川下流域の常代遺跡、北武蔵域の池上遺跡などごく限られた遺跡しか明確でなく、これまで荒川下流域ではこの段階の遺跡は把握できていない。ところが、中期後半の宮ノ台式土器段階になると、南関東各地の河川流域に灌漑稲作農耕集落群が形成される。武蔵野台地北縁（第248図上）でも、下流側から文京区千駄木三丁目南遺跡・荒川区道灌山遺跡から板橋区沖山遺跡まで数km間隔で、１～２haほどの規模をもつ環濠集落が形成され、その間にも小規模集落が点在する。ところが午王山遺跡周辺は集落が比較的まとまるが環濠をもつ大型集落はみられず、黒目川よりも上流では遺跡分布が稀薄となる。本遺跡から約27km遡った坂戸市木曽免遺跡で環濠集落が確認され、附島遺跡などもあるが、宮ノ台式土器を伴う遺跡の分布密度は低くなっている。また、荒川北側の大宮台地でも宮ノ台式土器を伴う遺跡や環濠集落がみられるが、遺跡は小規模で分布密度も疎らである。

後期になると遺跡の分布密度は飛躍的に高くなる。第248図下では北区御殿前遺跡周辺の遺跡群と赤羽台遺跡群周辺の間の遺跡分布が薄く見えるが、遺跡調査地点の粗密が反映した見かけ上の姿である。実態は、石神井川下流域から柳瀬川下流域までほぼ連続する状態である。それどころか、ここでは別の遺跡としてプロットされていても、今後の調査によってはひとつの遺跡としてまとめられる可能性のある遺跡群も少なくない。ただし、中期後半から後期になって突如このような遺跡分布の変化が起きたのではなく、後期でも初頭から前半の遺跡は中期後半以上に疎らな分布密度であり、むしろ後期前半から後半にかけて遺跡分布の急激な変動が起きている。そうした遺跡群動向を念頭におきつつ第248図下をみると、板橋



第 248 図　午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図（◉は環濠をもつ遺跡）

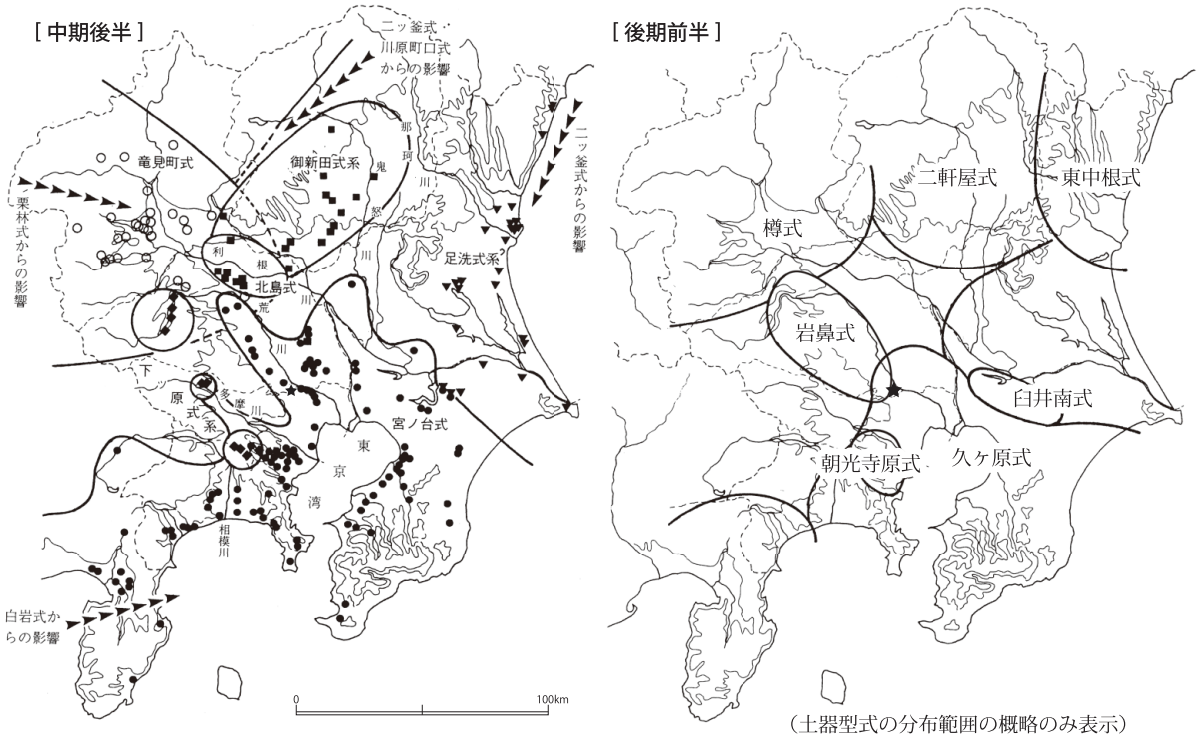
区四葉地区・沖山遺跡から黒目川までの約 7 ㎞の範囲に環濠を備えた遺跡が密集することがわかる。午王山遺跡は、その中で白子川下流域左岸側の独立丘に立地する、二重環濠をもつ可能性が高い集落であり、これら遺跡群の中核的な位置を占めた可能性が高いであろう。

2　関東における中・後期の土器型式分布の中の午王山遺跡

午王山遺跡の特色のひとつに、南関東系と北関東系、あるいは遠隔地系の土器型式が明瞭な点が挙げられ、当時の人びとの地域間交流や社会関係を知る手がかりとなっている。第 249 図に関東地方における弥生時代中期後半と後期前半の土器型式の分布圏を示した。現代社会感覚で過去の関東を一つの地域として認識するのは誤りであって、時代ごとに関東内の地域ごとの差異が顕在化したり、薄らいだりする。通史的にみると、弥生時代はもっとも地域ごとの差異が顕著な時代であり、中期と後期でも違いがある。

中期後半（第 249 図左）では、南関東は静岡県域方面と連動性の顕著な宮ノ台式土器、北西関東は長野方面と酷似する竜見町式、茨城県域周辺は東北地方南部と強い関連をもつ足洗式などの諸型式が分布し、それらに挟まれるように在来系の伝統の色濃い御新田式・北島式土器､および長野系と在来系の折衷とみられる下ッ原･馬場式系の土器群が分布する｡しかも、各遺跡ではいずれかの型式が圧倒的多数派を占めているために、分布境界を明瞭に線引きできるという特色をもつ。その中で、午王山遺跡は宮ノ台式土器分布圏に属しており、前述のように荒川流域における遺跡密集地の北縁寄りに位置する。そのために第 133 号住居跡の大型壺の頸部突帯などは典型的な宮ノ台式土器というよりも、東松山市代正寺遺跡など、より上流側の地域の特色をもつ。

後期前半（第 249 図右）になると、中期後半に周辺地域との関連が強かった土器型式が各



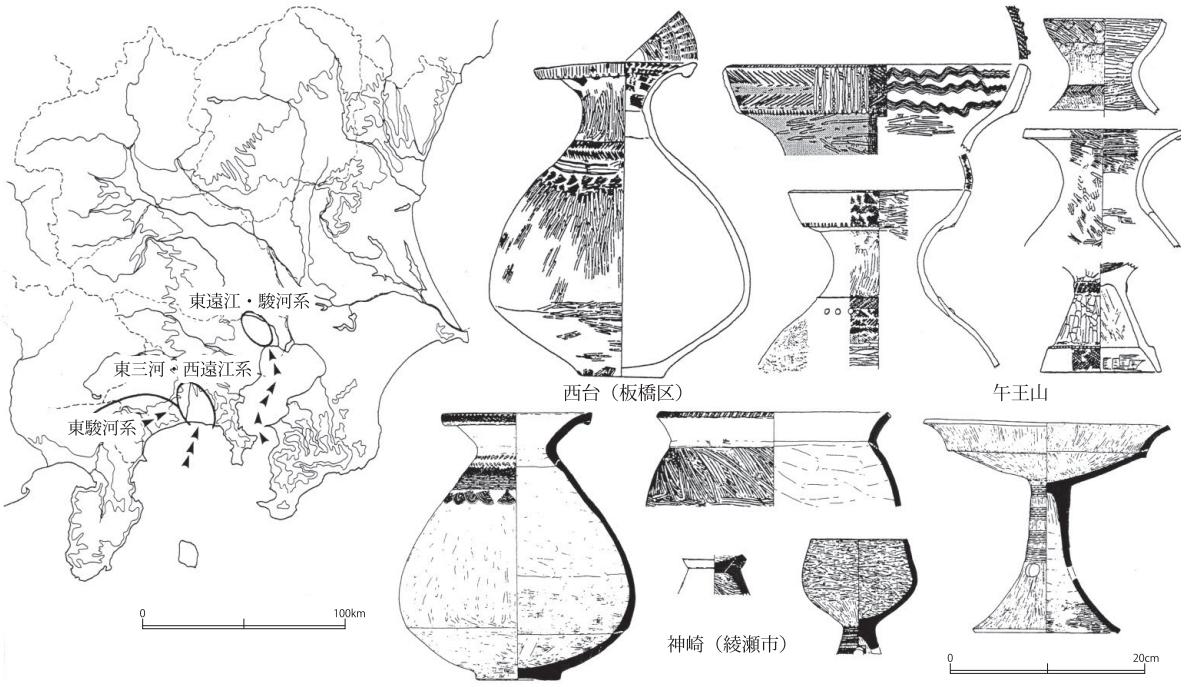
第 249 図　関東の弥生時代中期後半と後期前半の土器型式分布（左：石川 2008 に加筆）

地に定着して新たな地域ごとの個性が顕在化する。宮ノ台式の後裔である久ヶ原式はやや分布範囲を狭め、荒川流域では中期後半の竜見町式の後裔である樽式と兄弟型式である岩鼻式が顕著な分布圏を形成する。午王山遺跡は、南関東系の久ヶ原式と北関東系の岩鼻式土器が共存しており、両地域どうしが交流や交易を行う拠点としての役割を果たしたに違いない。

なお、中期後半から後期前半への変遷の過程で、午王山遺跡は後期初頭に一時的な空白期を挟んでいるようである。丘陵上の平坦地の約２／３を発掘したとはいえ、未調査区にこの段階の遺構・遺物が存在する可能性は残されている。ただし、たとえ後期初頭の遺構・遺物が存在したとしても遺跡の低減・縮小期であることは変わらないであろう。しかし、このことをもって本遺跡の個性的な特徴とみてはならない。例えば、かつて西川修一氏が相模川下流域をとり上げて弥生時代中期後半から後期にかけての検出住居数を集計し、後期初頭の検出数が著しく少ないことから、あたかも無住の地のような状況であったと述べた（西川1991）。その後、相模地域でも後期初頭の住居検出は増えたものの激減していることに変わりはない。宮ノ台式土器から久ヶ原式土器への土器型式の変遷が追える東京湾沿岸でも後期初頭の遺構・遺物の検出数は激減しているし、南関東のみならず関東・中部地方一円でも同様の傾向が確認できる。後期初頭における午王山遺跡のしぼみ現象は、より広範な地域で連動して起こった現象として考える必要がある。

後期中葉になると、南関東の土器型式群に大きな変動が生じる（第250図）。それは第249図の久ヶ原式土器分布圏内の西半部の各地にみられる現象で、東海方面に由来する土器型式の影響が著しくなる。相模川西岸南部域では東駿河系の土器型式が分布圏を広げる。ところが、相模川流域では、かつて寄道式・伊場式と呼ばれた東三河・西遠江の土器型式が突如出現する。特に綾瀬市神崎遺跡は面積約0.5haを環濠で囲む集落で、在来系の久ヶ原式土器は５％未満にとどまり、出土土器の95％以上は東三河・西遠江の特徴をもつものであった（第250図下段：村上ほか1992）。土器の混和材は相模川流域のものであることから当地域で製作されたと考えられるものの、土器の製作技術と器種組成は故地のものとほぼ一致する。土器だけでなく、竪穴住居も短軸上に炉をもつことも東海方面に類例があり、竪穴住居に重複がないことから短期的な移住者のムラと判断された。その後の調査で、竪穴住居の重複例は確認されたものの、短期的な移住者のムラという評価は変わらない。そして神崎遺跡だけでなく、相模川流域では東三河・西遠江の土器型式が顕著な遺跡が各所に存在しており、これを契機として遺跡数と検出住居数が飛躍的に増加する。

これに対して武蔵野台地の東縁部では、東遠江の菊川式土器の影響を受けた土器が顕著となる。神田川流域の新宿区下戸塚遺跡は菊川式土器の影響が特に顕著で、下戸塚式土器と命名されている（斎藤2010）。さらに板橋区西台遺跡では、ハケ刺突による羽状文や扇形文を施し菊川式そのものというべき細頸壺が出土しており、午王山遺跡でも下戸塚式土器が顕著である（第250図右上）。ただし午王山遺跡で、壺の中に受口状口縁をもち、その下端に刺突列を連ね外面に羽状縄文を施す実例があり、その特徴は東遠江よりも駿河地域で菊川式の影響が顕著となる段階にみられる一群であり、ここでは東遠江・駿河系としておく。ただし、相模地域の東三河・西遠江系土器では神崎遺跡を代表例として故地の土器の特徴を色濃く保持し、器種組成も再現性が高いのに対して、東遠江・駿河系当地域や本遺跡の東遠江・駿河

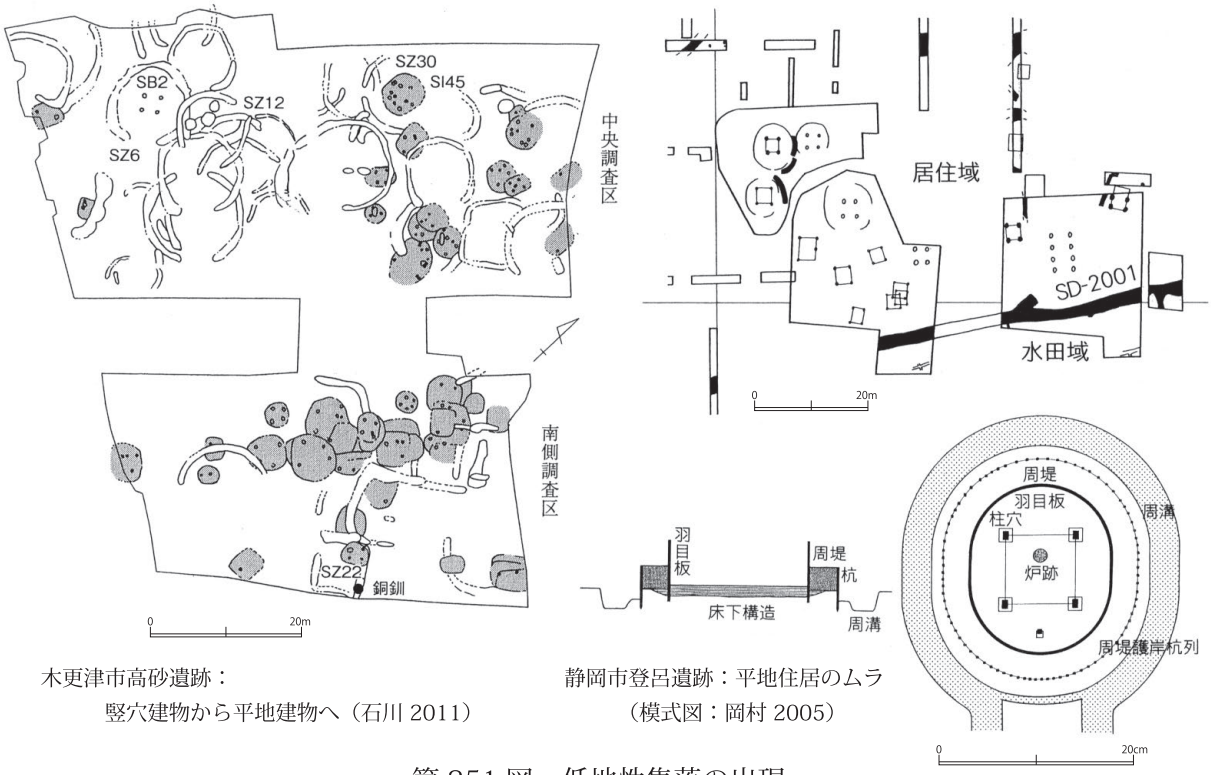


第 250 図　弥生後期における東海系土器の関東への普及
上段：東遠江・駿河系、　下段：東三河・西遠江系

系土器はその比率がやや低く、さらに東海系土器のなかでは壺の比率が高いという違いがある。しかしながら、在来系である久ヶ原式土器分布圏の西半部が東海地域に由来する外来系土器の定着によって大きな構造変換を起こしていることは注目に値する。

3　住居構造にも東海系が現れる

それでは東海系の影響が顕著になるのは久ヶ原式土器分布圏でも西半部だけで、東京湾東岸域はその圏外だったのであろうか。そうした疑問に答えてくれるのが、木更津市高砂遺跡の住居群である（第 251 図左）。高砂遺跡は中期末の宮ノ台式最新段階に形成され始めた、小櫃川流域の低地に立地する集落である。図は後期の住居群が密集する地区で、網かけしたのが竪穴住居でいずれも後期前半に属す。これらの竪穴住居群を切って、図の下方が途切れるほぼ環状の溝が折り重なっている。このうち溝 SZ6 は SB2 を中心にめぐっており、SB2 が４本主柱の平地式建物であり、SZ6 はそれを囲む周溝と判断できる。他の環状の溝も柱穴は失われているが平地住居とみるべきであり、したがって高砂遺跡のこの地点は、後期前半は竪穴建物で構成されていたのが後期中葉に一斉に平地住居に変貌したことになる。こうした住居構造は南関東では先行する時期に類例はない。一方、東海方面では、静岡市登呂遺跡のように、低地に立地する弥生時代中期後半～後期の各地の遺跡で確認されている。登呂遺跡の SB2009 住居跡で床面を断ち割ったところ、厚さ各数 cm の木炭層と白色粘質シルトが 10 層も互層をなしており地下水の浸透・上昇を抑える防湿措置と考えられる。登呂遺跡は静岡平野の低地部の自然堤防上に居住域を設けており、住居は当時の地表面レベルの平地式建物で、床下に防湿措置を施し、建物の周囲に溝を巡らすという低地仕様の住居構造を採っている（第 251 図右）。こうした住居構造が、東京湾東岸の低地に立地する集落に採用されたの



木更津市高砂遺跡：
竪穴建物から平地建物へ（石川 2011）

静岡市登呂遺跡：平地住居のムラ
（模式図：岡村 2005）

第 251 図　低地性集落の出現

である。東京湾東岸に、土器型式の上では東海方面の明確な影響を見出すことはできないが、住居構造に静岡方面からの新しい文化要素の導入が実現していたことになる。これは単に住居構造の問題にとどまるものではなく、生産基盤である水田耕地に接する低地に集落を構えるという生活様式の採用であり、おそらくはそれ以前よりも水田耕地の開拓に積極的に取り組む活動の反映であろう。こうした平地住居からなる集落は、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡や北区豊島馬場遺跡・板橋区浮間舟渡遺跡のように、荒川流域でも後期末から古墳時代前期に顕著になってくる。すでに午王山遺跡の集落は終焉を迎えた段階だが、午王山遺跡に見られる東海系土器の進出の動きが、やがてこうした動向を生み出したのであろう。

4　青銅器文化の波及

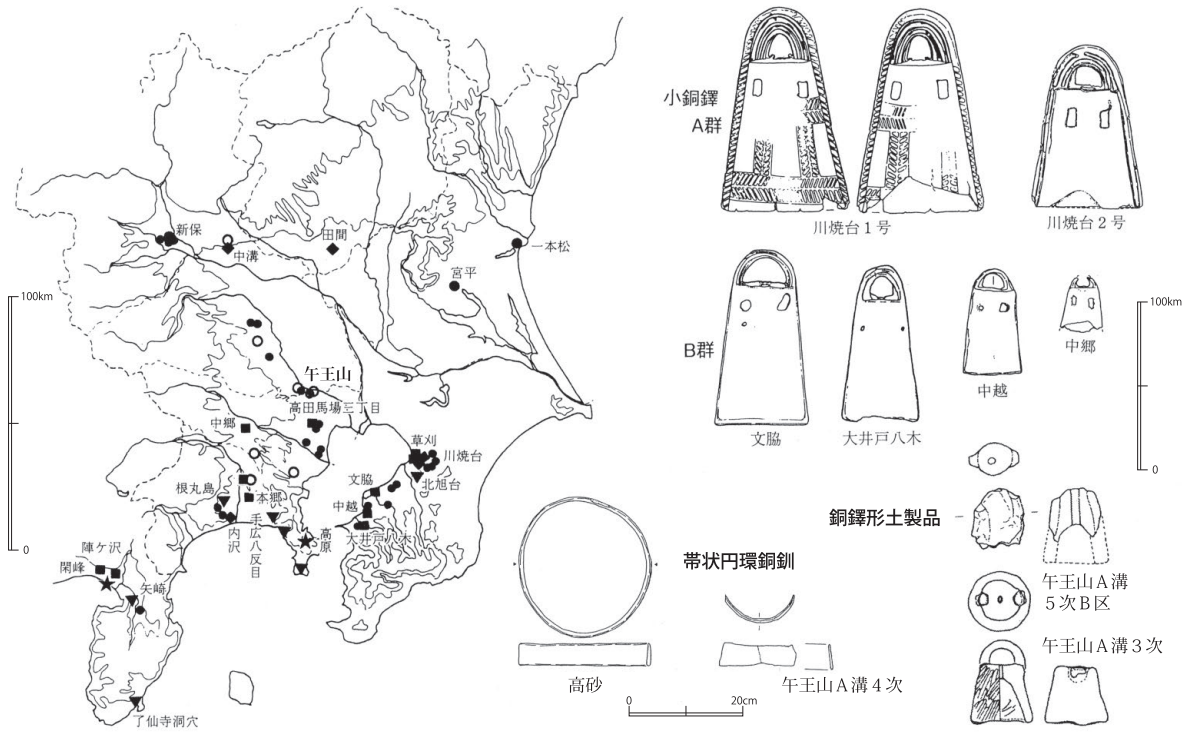
後期前半から中頃にかけてみられる南関東への東海系の土器と平地住居の波及はそれのみにとどまることはなかった。それまで関東地方に見られなかった西日本～東海系の青銅器やそれを用いた儀礼行為も採用されるようになる。午王山遺跡でもそれを知る資料が出土している。銅鐸形土製品と帯状円環銅釧である。

午王山遺跡では、A溝から３点の銅鐸形土製品（３次・５次Ｂ区・７次）が発見された。銅鐸形土製品は九州から関東まで分布しており、神尾恵一氏の集計では 230 点もの出土例がある（神尾 2012）。江原　順氏のデータ（江原 2016）を補記すると、関東では神奈川県で２遺跡３点（厚木市河原口坊中遺跡２点・横浜市稲荷前遺跡１点）、東京都１点（熊ケ谷遺跡）、群馬県１遺跡１点（太田市成塚石橋遺跡）、埼玉県３遺跡６点（午王山遺跡３点・朝霞市向山遺跡２点・坂戸市下田遺跡１点）と少ないが、午王山遺跡３点・向山遺跡２点と和光・朝霞界隈に集中する。銅鐸や小銅鐸などの青銅器は高度な鋳造技術を要するために、専門の技

術者が限られた集落で鋳造したと考えられる。一方、銅鐸形土製品は土器の製作と変わるところがなく、どの遺跡でも製作することが可能であるから、特別な意義を見出そうとするのは慎重でありたいが、午王山・向山両遺跡の銅鐸形土製品は小銅鐸を識別できて初めて製作できることに注目したい。

関東地方では相模湾岸から東京湾沿岸周辺にかけて 10 遺跡で小銅鐸が出土し、群馬・栃木両県南部でも各１遺跡でも検出例がある（第 252 図）。それらは形態的特徴から大きく二分できる。千葉県市原市川焼台遺跡１・２号、神奈川県平塚市内沢遺跡、栃木県小山市田間遺跡例はやや大型で、鰭と、突線が鋳出された扁平な鈕をもち、身の横断形は紡錘形（厚いレンズ形）を呈する（Ａ群）。一方、他の小銅鐸（Ｂ群）はより小形の傾向があり、鈕がほぼ円形で、鰭をもたない。身の横断形は紡錘形と略円形の２種がある。Ａ群は鈕の突線の表現と、川焼台１号の身の表裏を矢羽根（有軸羽状）文が袈裟襷状に施してあることから、銅鐸でも突線鈕式のうち三遠式銅鐸をモデルとして製作されたことが分かる。製作地は三遠式銅鐸の鋳造地域である東海西部域と考えるのが妥当である。

午王山遺跡Ａ溝から出土した３点の銅鐸形土製品のうち５次調査Ｂ区・７次調査出土品は横断形が紡錘形を呈する身の両側に粘土紐が貼付されて鰭が表現されている。一方、３次調査出土品は横断形が円形で、鰭の表現がない。向山遺跡の２例もこうした二者があり、小銅鐸Ａ群とＢ群をモデルとして作り分けたと考えられる。すなわち小銅鐸の２群を識別することが可能な作り手でしか製作することはできず、小銅鐸の識別のみならず小銅鐸を用いる儀礼の意味も知っていたと考えるべきであろう。そして、午王山・向山両遺跡の銅鐸形土製品



第 252 図　弥生後期の青銅器関連遺物の分布（石川 2011 に加筆）

凡例：　◆小銅鐸Ａ群　■小銅鐸Ｂ群　○銅鐸形土製品　●巴形銅器　★筒形青銅器　▼有鉤銅釧　●帯状円環銅釧

はその時期を明確に判断できる点でも重要である。午王山遺跡ではA溝の中層から出土しており、菊川式の影響色濃い下戸塚式の範疇に収まる。向山遺跡では、竪穴住居の床下から出土した（埋納か？）小銅鐸B群を模倣した完形品は、身の上部を横断するようにハケ目沈線文を１条巡らしているから、菊川式・下戸塚式段階に属すと判断できる。東海西部の編年に対比すると山中式後半から廻間Ⅰ式に併行し、三遠式・近畿式突線鈕式銅鐸がまさしく終焉を迎える段階に当たっている。この段階に小銅鐸が東海道筋を東方に波及し、その分布の東端の午王山遺跡一帯でその形態的特徴を識別し、そしておそらくは祭祀儀礼も知る人々によって土製品にその形が写されたことになる。

こうした段階に関東にもたらされた青銅器は小銅鐸だけではない。濃尾平野以西で製作された有鉤銅釧や筒形青銅器が神奈川・千葉両県域でも散見される。これらの青銅器が東海道筋でもたらされたのと好対照をなすのが巴形銅器で、群馬県新保遺跡や茨城県一本松・宮平両遺跡でみられ、長野県上田市武石遺跡でも発見されていることからみて、長野県の千曲川水系を経由して北陸方面から北関東へともたらされたと考えられる。午王山遺跡A溝では帯状円環銅釧が発見されているが、類例は静岡県域・南関東および長野県北部であることから東海道筋と千曲川水系のいずれからと考えるべきか判断が迷うが、少なくともいずれかの地域との交流を通じてもたらされたことに違いはない。

午王山遺跡は、中期後半に小規模な集落として現れ、後期初頭の空白期を挟んで後期前半から後半にかけて存続した。後期の午王山集落は、当地域の拠点として遠隔地との交流を重ね、地域社会の再編成を牽引した。この集落の後半段階になると、荒川周辺の台地上には大規模集落群が形成され、それが次なる古墳時代社会を生み出す基盤となった。こうした動向は、午王山遺跡単独でも、荒川下流域だけでも達成しえたわけではなく、まさしく日本列島各地の地域社会が連携して急激に次なる時代へと変革していく状況と連動していた。午王山遺跡はそうした地域社会の歴史動態をみごとに体現した遺跡というべきである。

【引用・参考文献（挿図出典を含む）】

石川日出志 2008「地域からの視点と弥生時代研究」『地域と文化の考古学』Ⅱ　pp. 23 - 38　六一書房
石川日出志 2011「関東地域」『講座日本の考古学』5 弥生時代（上）　pp. 397 - 429　青木書店
江原　順 2016『第 31 回企画展 小さな銅鐸を追って―銅鐸形土製品と小銅鐸―』朝霞市博物館
岡村　渉 2005『特別史跡登呂遺跡―再発掘調査報告書（考古学調査編）―』 静岡市教育委員会
小高幸男 1999『高砂遺跡Ⅱ』 君津郡市文化財センター
神尾恵一 2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』第 67 集　pp. 177 - 221
小林理恵 1995「西台遺跡」『板橋区史　資料編 1　考古』 pp. 502 - 507　板橋区
齋藤瑞穂 2010「下戸塚式という視点」『古代』第 123 号　pp. 53 - 72　早稲田考古学会
西川修一 1991「相模弥生後期社会の研究」『古代探叢』Ⅲ　pp. 249 - 273　早稲田大学出版部
村上吉正・小滝勉ほか 1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告 2　綾瀬市教育委員会